

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

Motooka

Kuwabara

元岡・桑原遺跡群15

— 第33次・40次・41次・44次・47次調査の報告 —

2009

福岡市教育委員会

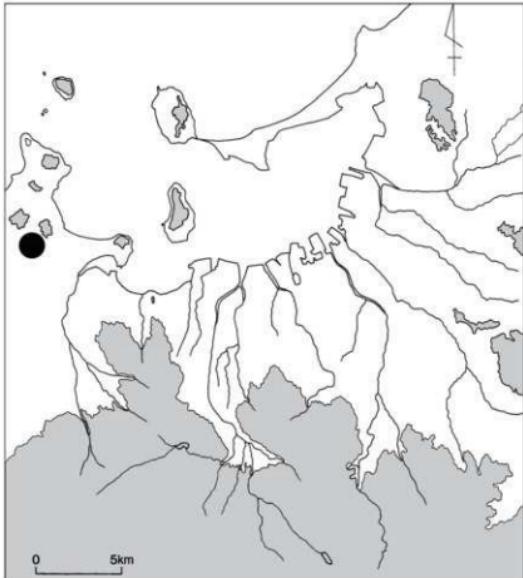
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

Motooka

Kuwabara

元岡・桑原遺跡群15

— 第33次・40次・41次・44次・47次調査の報告 —



0303・0410・0435・0523・0562

2009

福岡市教育委員会

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・春日市原町地区的キャンパスを統合移転し、福岡市西区・前原市・志摩町にまたがる新キャンパスを建設する事業を進めており、すでに平成18年度には工学部が移転したところです。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区的移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から教育委員会が取り組んでおり、すでに土地の先行取得を行った福岡市土地開発公社を原因者とした発掘調査報告書が12冊発行されております。

これらの福岡市土地開発公社を原因者とする調査とは別に、九州大学が再取得した土地においても九州大学を原因者とする発掘調査が平成14年度から実施され、本書はその第1冊目の発掘調査報告書になります。本書では第33・40・41・44・47次調査の成果を掲載しております。このうち第41次調査では平安時代の瓦が出土していますが、第41次調査の東側の第31次調査において平安時代中頃の瓦窯址が発見され、この窯で焼かれた瓦と同じタイプの瓦が鴻臚館などから出土しており、その重要性から瓦窯址を現地保存したところです。

本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に調査を委託された九州大学、調査に協力していただいた関係各機関と地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成21年3月31日
福岡市教育委員会
教育長 山田 裕嗣

例　　言

- 1 本書は、九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が平成14年度～平成17年度に行った元岡・桑原遺跡群第33次・40次・41次・44次・47次調査の報告である。
- 2 本書は、九州大学と受託契約を結んで実施した調査の発掘調査報告書の第1冊目であるが、この他に、福岡市土地開発公社受託分が平成20年度までに14冊発行している（第Ⅱ章参照）。
- 3 本書に掲載した遺構の作成者は以下のとおりである。
第33次調査　濱石哲也（担当者）
第40次調査　米倉秀紀（担当者）
第41次調査　米倉秀紀（担当者）
第44次調査　池田祐司・木下博文（担当者）・土井良伸・西嶋奈美
第47次調査　上角智希（担当者）
- 4 本書に掲載した遺構・遺物写真是調査担当者が撮影した。
- 5 本書に掲載した遺物実測図の作成者は以下のとおりである。
第33次調査　濱石哲也
第41次調査　米倉秀紀・撫養久美子・濱石正子・山崎賀代子
第44次調査　木下博文
- 6 本書に掲載した製図は以下のものが行った。
第33次調査　濱石哲也（担当者）
第40次調査　米倉秀紀（担当者）
第41次調査　米倉秀紀（担当者）
第44次調査　木下博文（担当者）
第47次調査　上角智希（担当者）
- 7 本書の執筆者は本文目次に記した。
- 8 本書の編集は、濱石・木下・上角の協力の下、米倉が行った。
- 9 本調査で出土した遺物及び調査の記録類は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・活用される。

目 次

I 調査の経緯（米倉）	11
1 調査に至る経緯	11
2 調査の経過	11
3 調査体制	12
II 元岡・桑原遺跡群の位置と環境（米倉）	13
1 立地	13
2 元岡・桑原遺跡群の既往の調査と歴史的変遷	13
III 第33次調査（濱石）	21
1 調査区の位置	21
2 調査の記録	21
3 まとめ	25
IV 第40次調査（米倉）	29
1 調査区の位置	29
2 調査の記録	29
3 まとめ	29
V 第41次調査（米倉）	31
1 調査区の位置	31
2 調査の概要	31
3 層序	34
4 遺構と遺物	35
5 まとめ	55
VI 第44次調査（木下）	73
1 調査区の位置	73
2 調査の概要	73
3 遺構と遺物	78
第1面	78
第2面	82
包含層出土遺物	89
4 まとめ	94
VII 第47次調査（上角）	115
1 調査区の位置と立地	115
2 調査の概要	117
3 1号墳の調査	118
4 2号墳の調査	131
5 その他のトレンチ調査	132
6 1号墳主体部採取赤色顔料の分析（片多雅樹）	133
7 まとめ	134

挿 図 目 次

II 元岡桑原遺跡群の位置と環境	
図II-1 元岡・桑原遺跡群位置図 (1/100,000)	14
図II-2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図	19
III 第33次調査	
図III-1 第33次調査地点位置図 (1/4,000)	21
図III-2 第33次調査地点現況測量図 (1/300)	22
図III-3 A区（桑原鏡田古墳群B群1号墳）測量図 (1/100)	23
図III-4 B区・C区測量図 (1/100)	24
図III-5 出土遺物実測図 (1/3)	25
IV 第40次調査	
図IV-1 第40次調査位置図 (1/2,000)	29
図IV-2 第40次調査全体図 (1/1,000)	30
V 第41次調査	
図V-1 第41次調査位置図 (1/2,000)	31
図V-2 第41次調査測量図 (1/250)	32
図V-3 谷及び調査区北壁土層断面図 (1/40)	33
図V-4 SX01実測図 (1/60)	36
図V-5 SX01土層断面実測図 (1/40)	37
図V-6 SX01出土遺物実測図1 (1/3, 1/4)	38
図V-7 SX01出土遺物実測図2 (1/3)	39
図V-8 SX01の下面出土遺物実測図 (1/3, 1/4, 1/5)	40
図V-9 谷1区Aトレンチ出土遺物実測図1 (1/3, 1/2)	41
図V-10 谷1区上層出土遺物実測図1 (1/3)	42
図V-11 谷1区上層出土遺物実測図2 (1/4)	43
図V-12 谷1区上層出土遺物実測図3 (1/3)	44
図V-13 谷1区中層出土遺物実測図1 (1/3)	46
図V-14 谷1区中層出土遺物実測図2 (1/3, 1/4)	47
図V-15 谷1区下層出土遺物実測図 (1/3, 1/2)	48
図V-16 他の谷1区出土遺物実測図 (1/3)	49
図V-17 谷2区出土遺物実測図 (1/3)	50
図V-18 谷3～5区出土遺物実測図1 (1/3)	51
図V-19 谷3～5区出土遺物実測図2 (1/3, 1/1)	52
図V-20 他の谷出土遺物実測図1 (1/4, 1/3, 1/1)	53
図V-21 他の谷出土遺物実測図2 (1/3)	54
図V-22 元岡桑原遺跡群古代関連構造出土地点位置図	56

VI 第44次調査

図VI-1	調査区位置図 (1/2,000)	74
図VI-2	第1面遺構平面図 (1/300)	75
図VI-3	第2面遺構平面図 (1/300)	76
図VI-4	遺物包含層土層断面図 (1/100)	77
図VI-5	第1面検出土坑実測図 (1/20、1/40)	79
図VI-6	SK03・07・08出土遺物実測図 (1/3、1/2)	80
図VI-7	SD10出土遺物実測図 (1/3)	81
図VI-8	SD13および出土遺物実測図 (1/60、1/20、1/3)	81
図VI-9	SB18実測図 (1/60)	82
図VI-10	SB71・72実測図 (1/60)	83
図VI-11	SC51実測図 (1/60、1/20)	83
図VI-12	SC51出土遺物実測図 (1/3)	84
図VI-13	SD21および遺物出土状況実測図 (1/60、1/20)	85
図VI-14	SD21出土遺物実測図 (1/3)	85
図VI-15	SD30出土遺物実測図 (1/3、1/2)	86
図VI-16	SX34土層断面図 (1/60)	87
図VI-17	SK50・SX64実測図 (1/40)	87
図VI-18	SX34出土遺物実測図 (1/3)	87
図VI-19	SX54出土遺物実測図 (1/3)	88
図VI-20	ピット・その他出土遺物実測図 (1/3、1/2)	90
図VI-21	包含層第1層出土遺物実測図 (1/3、1/2)	91
図VI-22	包含層第2層出土遺物実測図 (1/3)	92
図VI-23	包含層第3層出土遺物実測図 (1/3、1/2)	92
図VI-24	3区包含層62出土遺物実測図 (1/3)	93

VII 第47次調査

図VII-1	調査地点位置図 (1/2,500)	115
図VII-2	地形測量図 (1/400)	116
図VII-3	1号墳測量図 (1/200)	120
図VII-4	トレンチ1・2・3土層図 (1/100)	122
図VII-5	トレンチ4・6土層図 (1/100)	124
図VII-6	トレンチ7・8土層図 (1/100)	125
図VII-7	1号墳上で検出した近世墓 (1/100)	126
図VII-8	1号墳主体部実測図 (1/50)	128
図VII-9	赤色顔料が付着した割石 (1/4)	129
図VII-10	1号墳墳丘盛土復元図 (1/200)	130
図VII-11	元岡峰古墳墳丘測量図 (1/500)	136
図VII-12	元岡池ノ浦古墳墳丘測量図 (1/500)	137
図VII-13	塙除古墳墳丘測量図 (1/500)	138

図版・写真目次

II 元岡桑原遺跡群の位置と環境	
写真1 第31次調査の遺構と遺物	19
写真2 第42次調査 S D O 1 全景	19
写真3 第42次調査の出土遺物	20
III 第33次調査	
図版III-1 調査区全景（調査前） 1 南から 2 東から	26
図版III-2 調査区全景（調査後） 1 南から 2 東から	27
図版III-3 1 桑原錦田古墳群B群1号墳全景（調査前、南から）	28
2 桑原錦田古墳群B群1号墳全景（調査後、南から）	28
3 桑原錦田古墳群B群1号墳頂部状況（西から）	28
4 桑原錦田古墳群B群1号墳頂部削石除去後状況（西から）	28
5 B区全景（西から） 6 C区全景（東から）	28
IV 第40次調査	
写真1 B区全景（北から）	30
V 第41次調査	
図版V-1 上 調査区全景（東から） 下 調査区全景（西から）	61
図版V-2 上 谷1区土層断面（東から） 下 谷4区土層断面（西から）	62
図版V-3 上 SX01検出時全景（北から） 下 SX01検出時全景（南から）	63
図版V-4 上 調査区北壁・SX01土層断面 下 SX01土層断面（B-2区西壁）	64
図版V-5 上 SX01土層断面（D-2区北壁） 下 SX01土層断面（D-3区北壁）	65
図版V-6 上 SX01掘り下げ後全景（南から） 下 SX01掘り下げ後全景（東から）	66
図版V-7 谷1区下層遺物出土状況	67
図版V-8 出土遺物1	68
図版V-9 出土遺物2	69
図版V-10 出土遺物3	70
図版V-11 出土遺物4	71
図版V-12 出土遺物5	72
VI 第44次調査	
図版VI-1 上 3区全景（北から） 下 3区全景（東から）	98
図版VI-2 上 3区南壁土層（北から） 下 SB71・72（北西から）	99

図版VI-3	上 SC51 (南から)	下 SC51 北壁カマド検出状況 (南から) ······	100
図版VI-4	上 SC51 カマド土層断面 (東から) ······	101	
	下 SD43・SX64 (西から) ······	101	
図版VI-5	上 1・2区第1面全景 (北から) ······	102	
	下 1・2区第1面全景 (東から) ······		
図版VI-6	上 SK03 (西から) ······	103	
図版VI-7	上 SK05 (西から) ······	104	
図版VI-8	上 SK08 (東から) ······	105	
図版VI-9	上 SD13 須恵器大甕出土状況 (南から) ······	106	
	下 1区包含層第1層 土師器甕出土状況 (東から) ······	106	
図版VI-10	上 1・2区第2面全景 (北から) ······	107	
	下 1・2区第2面全景 (東から) ······		
図版VI-11	上 1・2区第2面近景 (南から) ······	108	
図版VI-12	上 SD21 (南から) ······	109	
	下 SD21 遺物出土状況 (北から) ······		
図版VI-13	上 SX34 土層断面 (東から) ······	110	
	下 2区東半包含層第3層 异生中期甕出土状況 (東から) ······	110	
図版VI-14	出土遺物1 ······	111	
図版VI-15	出土遺物2 ······	112	
図版VI-16	出土遺物3 ······	113	
図版VI-17	出土遺物4 ······	114	

VI 第47次調査

写真1	1号墳遠景 (北東から) ······	116
写真2	2号墳のある山道 ······	116
写真3	近世墓地 (南西から) ······	116
写真4	前方部側からみた1号墳 (北西から) ······	119
写真5	近世墓地側から見た1号墳 (北東から) ······	119
写真6	後円部の切通し ······	119
写真7	1号墳の東側斜面 (北から) ······	119
写真8	1号墳の西側斜面 (北西から) ······	119
写真9	トレンチ1 (北西から) ······	123
写真10	トレンチ1 土層 (西から) ······	123
写真11	トレンチ2 (南から) ······	123
写真12	トレンチ2 墳頂部土層 ······	123
写真13	トレンチ3 (北東から) ······	123
写真14	トレンチ3 墳頂部土層 ······	123
写真15	トレンチ4 (南西から) ······	124
写真16	トレンチ4 土層 ······	124

写真17	トレンチ5（北から）	124
写真18	トレンチ6土層	124
写真19	トレンチ7（西から）	125
写真20	トレンチ8（北東から）	125
写真21	近世墓の基壇（西から）	126
写真22	近世墓の改葬跡（南東から）	126
写真23	近世墓の配石（北から）	126
写真24	1号墳主体部（北西から）	127
写真25	I区赤色顔料検出状況	128
写真26	II区南壁土層	128
写真27	I区北壁土層	129
写真28	I区東壁土層	129
写真29	表採した赤色顔料付着の削石	130
写真30	1号墳出土削石	130
写真31	2号墳調査前状況（南西から）	131
写真32	2号墳調査前状況（東から）	131
写真33	2号墳清掃後（東から）	131
写真34	2号墳清掃後（南西から）	131
写真35	2号墳完掘状況（南西から）	131
写真36	2号墳内から出土した石	131
写真37	近世墓地トレンチ1（西から）	132
写真38	近世墓地トレンチ2（南東から）	132
写真39	1号墳北西の高まり（南東から）	132
写真40	1号墳北西の高まりのトレンチ	132

表 目 次

II	元岡桑原遺跡群の位置と環境	
表II-1	元岡桑原遺跡群調査一覧表	20
V	第41次調査	
表V-1	出土遺物一覧表	57
VI	第44次調査	
表VI-1	遺構一覧表	95
表VI-2	出土遺物観察表	96

I 調査の経緯

1 調査に至る経緯

九州大学は、平成6年に医学部・薬学部等を除いて福岡市西区元岡・桑原地区に統合移転することを決定した。これを受け福岡市教育委員会は、九州大学統合移転地を始めとした市内の大規模遺跡開発に伴う埋蔵文化財の発掘調査を担当する課として、平成7年度に文化財部大規模事業等担当課を発足させた。また同課の発足前の平成7年2月15日から同年12月31日まで移転用地内の踏査を行い、また平成8年3月11日から同年9月30日まで試掘調査を実施した。また一部の古墳等については確認調査を行った。

統合移転用地については、福岡市土地開発公社が全域を先行取得し、埋蔵文化財調査・造成工事が終了した後に九州大学が再取得することとなったため、造成工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結んで実施することとなり、平成8年度後半から発掘調査を開始した。

用地内で造成を行わずに現地形のままキャンバスとする地区については、公社先行取得後速やかに九大が再取得を行った。その後キャンバスの造成工事計画が変更となり、九大が再取得した地区についても、造成工事によって埋蔵文化財が破壊を受けることが明らかになったため、埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。九州大学は福岡市に対して、九州大学取得用地内の埋蔵文化財調査について依頼し、福岡市教育委員会は大学側が調査体制を整えるべきとして協議を進めたが、結果的に調査範囲が数万m²に及ぶ大規模なことなどから、平成14年度後半から福岡市教育委員会が調査を行うことで、協定書を結んだ。

2 調査の経過

九大再取得地の調査は、平成14年度後半に包蔵地の全体把握のための確認調査と試掘調査から開始し、平成15年度当初から本発掘調査（第31次調査）を開始した。調査範囲は農学部農場地区であるG地区（図II-1参照）のほぼ全城と他の地区数地点で、調査想定面積は5万m²に及び、当初は調査員4名体制で平成19年度中の調査終了を計画していた。しかしその後、九大側の大幅な計画変更により、九大移転計画が当初予定より5年以上遅れ込むこととなり、発掘調査についても見直しが行われ、調査体制の変更を余儀なくされたため、平成16・17年度は調査員2名体制、18年度以降は1名で調査を行うこととなった。

調査地区についての方針も、当初は造成地内の全遺跡を発掘調査する予定であったが、協議の結果、圃場整備に対する調査方針を準用し、道路・水路等の永久構築物部分、遺構面を削る部分、遺構面から2m以上の盛土を行う部分に対して発掘調査を実施することとなった。

調査は第31次調査が平成14年度中に確認調査を行い範囲を確認した後、平成15年4月1日から本調査を開始した。その後G地区において現在も発掘調査を継続中である。G地区は出土遺物量が極めて多く、第31次調査が約1500箱、平成16年10月1日から開始した第42次調査区が平成20年12月末日現在も調査中で約7000箱である。

また第31次調査では平安時代中頃の瓦窯址が発見されたが、ここで焼かれた瓦が鴻臚館で出土しており、焚き口部のみしか遺存していなかったものの、その重要性から現地保存することとなった。

福岡市土地開発公社調査分等を含めた調査一覧は表II-1のとおりである。調査を行った内、重要性が高い地区については現地保存をしている。

3 調査体制

調査委託 九州大学

調査主体 福岡市教育委員会文化財部

平成14年度

調査 大規模事業等担当課長 二宮忠治 主査 濱石哲也

　　調査担当 確認、試掘調査…二宮、上角智希

庶務 文化財整備課管理係

平成15年度

調査 大規模事業等担当課長 二宮忠治 主査 濱石哲也

　　調査担当 第31次調査…二宮、上角 第33次調査…濱石

庶務 文化財整備課管理係

平成16年度

調査 大規模事業等担当課長 力武卓治 主査 米倉秀紀

　　調査担当 第31次調査…上角 第41次調査・42次調査…米倉

庶務 文化財整備課管理係

平成17年度

調査 大規模事業等担当課長 力武卓治 主査 米倉秀紀

　　調査担当 第31次調査…上角 第42次調査…米倉・木下

第44次調査…池田祐司・木下 第47次調査…上角

庶務 文化財整備課管理係

平成18年度

調査 埋蔵文化財第2課長 力武卓治 調査第2係長 米倉秀紀

　　調査担当 第42次調査…米倉

庶務 文化財管理課管理係

平成19年度・・・第42次調査

調査 埋蔵文化財第2課長 力武卓治 調査第2係長 常松幹雄

　　調査担当 第42次調査…常松

庶務 文化財管理課管理係

平成20年度・・・第42次調査・第52次調査

調査 埋蔵文化財第22課長 田中壽夫 調査第2係長 常松幹雄

　　調査担当 第42次調査・52次調査…常松

庶務 文化財管理課管理係

II 元岡桑原遺跡群の位置と環境

1 立地

元岡・桑原遺跡群は、玄界灘に突き出た福岡市西側にある糸島半島にある。糸島半島は現在はその全面で九州本島と繋がっているが、接合部分の大半が江戸時代の干拓によるもので、繩文海進以降中世のある時期までは中央の一部で陸橋状に繋がっていた以外は、東と西がそれぞれ大きく海が湾入していたと考えられている。東側湾入部の奥にあたる元岡・桑原遺跡群の北東側と南側に繩文時代中・後期の貝塚（桑原飛櫛貝塚・元岡瓜尾貝塚）があり、また陸橋部には「泊（とまり）」の名が残されている。元岡・桑原遺跡群は東側の湾（古今津湾）の奥部すぐ北側に位置しており、遺跡の東側と南側は前述の湾（古今津湾）に面している。

糸島半島は全体に花崗岩から成る急峻な山地・丘陵部から成り、広い平野部はほとんど存在しない。半島全体に渡って、浸食による幅の狭い谷が複雑に入り出し、わずかに海岸近くの谷にたまたま幅の狭い沖積平地が存在するだけである。元岡・桑原遺跡群の立地している地点も標高2m～120m前後の等高線が密に入り組み、往事は丘陵部から直接海岸へ移行する地形であったと考えられる。沖積層の一部は最終水期にさかのぼるもの（元岡桑原遺跡群第42次調査地点）もあるが、現在残されている沖積層の大半は繩文後期以降の海退時以降に形成されたものと考えられ、それ以前の遺跡は概ね丘陵もしくは山際の段丘面にある。

海退後の繩文時代晩期になると、低地部に貯蔵穴（元岡桑原第2次）や包含層（同42次）などが表れるが、谷部の大半が埋まり平地部が出現するのは、古墳時代前半中までかかる部分が多く、その時期になると各谷とも細い流路のみが残されている状況である。これ以降元岡桑原地区の開発が本格化したと考えられ、第3次調査のように崖面近くにある弥生時代住居に比べ、7次・18次・20次のように、古墳時代中期以降の住居が狭いながらも埋まつた谷の平地部に築かれている。

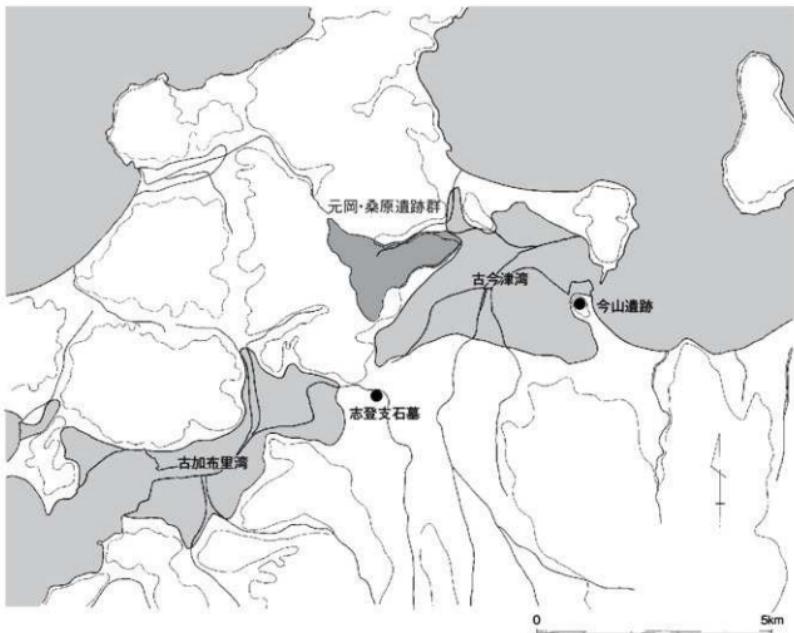
今回報告する内の第41次調査は上記の海岸部近くの立地そのものであり、谷の埋まり始めた時期は無遺物のため不明であるが、確認できる時期は古墳時代中頃からで、古墳時代後期からの住居址が築かれた時期には谷の中央に溝状に流路が残り、奈良時代を通じて溝が埋まり、その後整地を行って、新たな開発がなされている。

なお歴史的環境と周囲の遺跡については既報分、特に元岡桑原遺跡群3（福岡市報告829集）が詳しく記しているため、本書では略す。

2 元岡・桑原遺跡群の既往の調査と歴史的変遷

元岡・桑原地区で最初の調査は、昭和61年8月～10月に行われた桑原古墳群A群1号墳を嚆矢とする（調査番号8633）。現在の九大キャンパス内に位置する古墳であるが、封土と石室の多くはすでになくなっていた。

平成4年度には、現九大キャンパスのすぐ北東に位置する桑原飛櫛貝塚1次・2次（報告書では2次調査が桑原遺跡群1次）調査が道路の拡幅に伴って行われた（調査番号9243・9255）。貝塚は繩文時代中期～後期のアサリ・マガキを主体とする。貝層は長さ18m分が調査され、その厚さは80cm前後であった。貝塚の中から土壤墓が5基発見され、そのうち2基は人骨が向かいあったように葬られていた。そのうちの1体は女性で、土器が副葬され、14個の貝輪が装着されていた。もう1体は小児であった。桑原飛櫛貝塚は平成12年に立会調査が行われた（第3次調査、調査番号0049）。



図Ⅱ-1 元岡・桑原遺跡群位置図（縮尺1/100,000）

九州大学統合移転用地内の調査は、前述のように平成6年度～7年度に踏査、同7年度から8年度に試掘及び確認調査が行われ、平成8年度後半から福岡市土地開発公社を原因者とする発掘調査を実施した。公社を原因者とする調査は、平成16年度に終了予定であったが、造成工事計画の変更や、造成工事直前に伐採した部分での古墳の発見などにより調査期間が延長され、平成20年度に終了予定である。一方九州大学を原因者とする発掘調査は、上記のように平成14年度に開始され、平成24年度中の終了を目指している。以下、元岡・桑原遺跡群の概要を時代別に主な成果を記す。

旧石器時代

明確な遺構や包含層は発見されていないが、第3次調査や20次、26次調査でナイフ形石器・剥片・尖頭器・細石核などが発見されている。

縄文時代

第3次調査で草創期後半から早期の遺構・遺物が発見されている。草創期後半の無文土器・条痕文土器・早期の燃糸文土器・押型文土器及び各種の石器が出土し、石組炉・集石遺構が20数基、南九州で発見例の多い連絡土坑と呼ばれる炉穴1基などが検出された。第2次調査では晩期の貯蔵穴が1基検出されている。第42次調査では自然流路の底に晩期中頃の包含層が確認された。その他第20次調査などでも縄文土器が出土している。

弥生時代

第3次調査では中期の竪穴住居跡9軒以上、掘立柱建物等が検出された。第9次調査でも住居跡が検出されている。第20次調査では、中期前半の土器とともに、20点以上の玄武岩製磨製石斧の未製品や玄武岩剥片が多量に出土しているが、今山以外での石斧製作が明らかとなった。

現在調査中の第42次調査では、幅30m、深さ2m前後の自然流路2本の中に、弥生時代中期中頃～古墳時代初頭の大量の遺物を廃棄していた。その遺物総量はおそらく1万箱を越える。各時代の土器の他、農具・建物の柱、船材、文様入り漆器、楽器、男性陽物、鳥形などの他各種生活道具を含む木器も数百点出土している。木器の中には、さしば状の彩色木器や、高床倉庫や鹿を線刻した琴の側板なども出土している。

また直径6mの範囲内で小銅鐸2点、貨泉1点、銅鏡1点、青銅鏡先1点、土製勾玉3点が出土した地点（弥生時代後期後半）、大型建物2棟の横から出土した中期中頃の赤彩壺・高环群など祭祀的な遺物・遺構も検出されている。また土器の中には、楽浪系土器、陶質土器の他、半島系の調整を有するものがあるなど、半島のにおいて強く感じられ、他にも中国製と思われる鞘尻金具や貨泉7枚・五銖銭1枚などが出土している。

古墳時代

移転用地内には70基以上の円墳と6基の前方後円墳がある。また移転地周辺にも泊塚を始め、数基の前方後円墳があり、この元岡・桑原遺跡周辺だけ一つの系譜がたどれる可能性がある。前方後円墳の内、確認調査または発掘調査を行ったのは金屎古墳と石が原古墳・元岡E-1号墳である。金屎古墳（第1次・確認調査）は盛土が少なく、地山整形で大枠の形を作り出している。主体部は木棺墓で、菱雲文鏡と芝草文鏡が1面ずつ出土した。石が原古墳は横穴式石室を主体部にもつ後期古墳で、主体部の石はほとんど抜かれていたが、墳丘はほぼ完存していた。元岡E-1号墳（第13次）は墳丘・主体部のほとんどが破壊されていたが、方格T字鏡が出土した。

I-1号墳（第47次）は確認調査を行ったが、前方後円墳ではなく径約9mの低墳丘を有する前期の円墳であった。墳丘から赤彩の板石が出土し、主体部を一部掘削したが完全に破壊されていた。

第36次調査の経塚古墳は葺石・埴輪（形象・円筒）を有する径29mの大形円墳で、墳頂部の石室の天井石と考えられる大形の扁平石2枚を立てている。5世紀前半代の古墳と考えられる。これらの他多くの群集墳を調査しており、その一部は現地に保存している。

古墳時代の生活址は、第20次調査で5世紀以降7世紀までの竪穴住居跡が70軒以上発見されている。20次調査の東側の第27次調査でも十数基の住居跡が見つかっており、元岡・桑原の前方後円墳・群集墳を作った時期と符合する。

古代

生産に関する遺構・遺物、官衙に関する遺構・遺物が目立つ。前者は製鐵遺構と瓦窯址がある。製鐵遺構は奈良時代・平安時代の遺構がある。第12次調査では計27基の製鐵炉が発見され、他にも第24次調査などでも見つかっている。また第7次調査では「壬申年韓鐵」銘の木簡が出土した。瓦窯址は第31次調査で焚き口部分のみが発見されている。この瓦のタキ文様は鳥の足跡状の特異なもので、鴻臚館や海の中道遺跡など古代重要遺構で出土している。

官衙に関する遺跡では、特に第20次調査が目立つ。人工の池と溝の周囲に建物群が築かれ、池の中から「大寶元年」銘木簡が出土し、他にも鉢帯などが出土した。鉢帯は他にも第31次調査等でも出土している。第7次調査では、木製の船や畜車など延喜式に所載されている公的な祭祀に近い遺物群が出土している。また前述の「壬申年韓鐵」の他、「里丁・・政丁・・余部・・嶋里・・」銘

木簡や「廣刀自」銘墨書須恵器などが出土している。

全般的に出土遺物からは官衙的なにおいてが強く感じられるが、検出した高床倉庫等の建物跡は大規模な構造や官衙的な配置が見受けられない。このことは都衙等の行政的な役所を想定するよりも、生産的なことに関する官庁等を考えるべきであろうか。

中世

調査した地区においては、若干の建物が発見されているだけで、中世の遺構・遺物は極端に少ない。遺跡内に2つの中世城があるが、水崎城のごく一部を調査し、堅壠状の遺構を検出ただけで、ともに主郭部分は未調査である。

近世以降

第36次調査で、近世・近代を主体とする墓地を検出した。江戸時代に当地の領主である斎藤氏が明治時代に領地に帰農した後に築造されたと思われる大形の墓の他、中世末ないし江戸時代初期以来嘗々と営まれた集団墓地であるが、当初の墓地は小形の墳丘を盛っていたと考えられ、数百年間の間に結果として1m近い盛り土を有する形状になっている。

主な九州大学受託調査の概要（本書未掲載分）

第31次調査

全体が谷の中に立地する。本書掲載の第41次調査の南側に位置し、調査面積は約7000m²である。谷の下部は無遺物層であるが、谷が半分ほど埋まつたところから、5世紀の子持ち勾玉や滑石製白玉などの祭祀品が出土する。その後、自然堆積や整地を繰り返して、古墳時代の後期の住居跡・奈良時代から平安時代の住居・建物・鍛冶遺構などが造営されている。

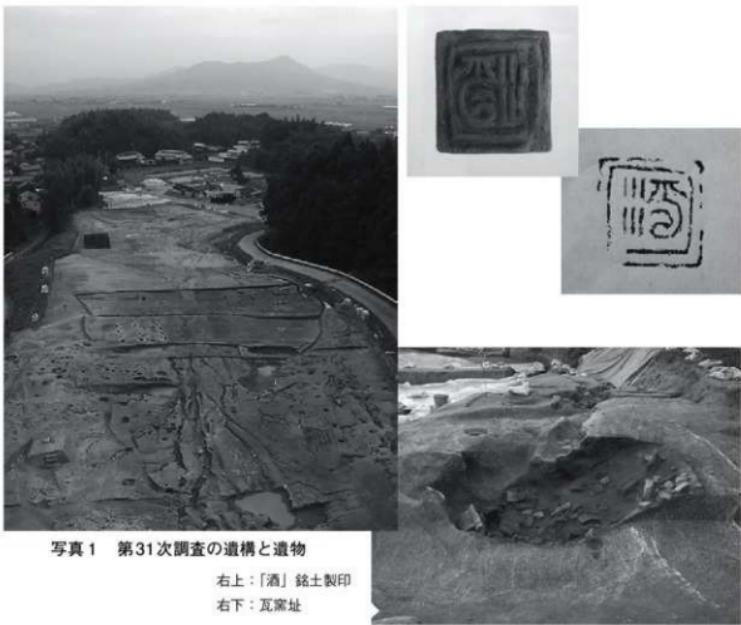
平安時代中期には、南側の山裾に瓦窯が造営される。検出したのは1基で、しかも焚き口部分の周辺のみであったが、非常に特徴的なタキキ痕を有する瓦で、同種の瓦が東区海の中道遺跡や中央区鴨舎跡等で出土している。瓦は窯跡の発見場所の上流である第41次調査でも出土しており、さらに多くの瓦窯があったものと考えられる。

第42次調査

前原市境にあり、調査区の東西両側を尾根に挟まれた谷の中に立地している。谷は幅が広く約100mを測る。谷の両側の尾根沿いに旧河川2本を検出した。それぞれ幅30m前後、深さ1.5~2mの河川である。東河川の最下層からは绳文時代晩期の遺物が出土するが、本格的に遺物が出土するのは弥生時代中期中頃からである。東河川の西岸に2棟の大型建物が築造され、建物の横から須玖2式の赤彩高环・壹などの完形品数点が出土している。この時期以降、土器の大量投棄が始まり、古墳時代の布留式までの間に東河川だけで約5000箱の遺物が投棄されている。

弥生時代終末近くには、小銅鐸2点・銅製鋤先1点・貨泉1点・土製勾玉3点からなる遺物がまとまって出土している。またこの時期に、格子目タタキとハケ目を有する半島系の器形を持つ土器や、同じく格子目タタキを有する日本の器形の土器が多量に出土しており、興味が持たれる。

西河川においても弥生時代中期から古墳時代の遺物が数千箱出土しており、両河川からの総量は1万箱を超す可能性が高い。西河川からは祭祀的な遺物の出土が多く、P18の写真のように各種の特徴的な木製品や絵画入り琴・絵画入り土器、大陸系の遺物などが出土している。なお西河川からは前述の格子目タタキの土器は1点も出土していない。





格子目タタキ(左)と平行タタキ(右)の器台



小銅鐸



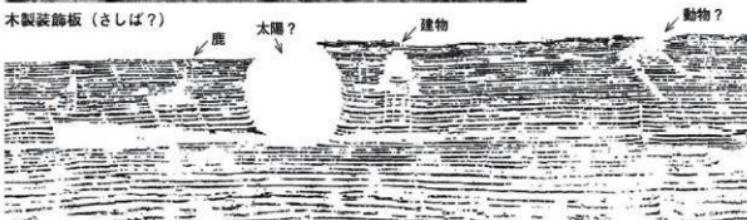
木製船材



木製飾板(さしば?)



木製人形



線刻絵画入り木製琴の側板

写真3 第42次調査の出土遺物



図 II-2 元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 (1/15,000)

表II-1 元岡桑原遺跡群調査一覧表

調査番号	遺跡名	原因者等	調査期間	古墳 基数	調査面積	内 容 等	遺物量
9602 第1次	確認調査		971201 ~ 981031			試掘のみ	-
9606 桑原石ヶ元古墳群	確認調査		961111 ~ 981031	19		円墳	-
9657 桑原石原古墳	確認調査		960820 ~ 961129		500	前方後円墳	-
9658 元岡石ヶ原古墳	確認調査		960827 ~ 961129		1280	前方後円墳	3
9656 桑原石ヶ元古墳群	公社		971201 ~ 981031	12	8,154	円墳群。	
9659 第2次	公社		961111 ~ 970325		3,007	古墳時代～古代溝、土坑、水田、礪文晚期防窓穴	35
9763 第3次	公社		971129 ~ 990222	1	3,500	繩文時代早期初頭環石組砌、弥生時代住居址、円墳	144
9764 第4次	公社		971201 ~ 980331		1,219	古代～中世獨立建物・溝	5
9771 元岡石原群2次	確認調査		971110 ~ 971128	60			3
9811 第5次	公社		980427 ~ 980623		2,500	古代土坑・塗含層	1
9812 第6次	公社		980630 ~ 980828		2,800	古墳時代包含層	1
9813 第7次	公社		980506 ~ 990611		7,500	古墳時代～古代住居址・建物・池、製鉄炉	530
9829 第8次 (元岡古墳群A群)	公社		980916 ~ 981225	1	300	円墳	2
9851 第9次	公社		981102 ~ 981210		190	弥生時代住居址	12
9854 第10次	公社		990106 ~ 990225		1,336	古代～中世塗含層	1
9855 第11次	公社		990106 ~ 990320		1,650	古墳時代～古代土坑・塗含層	8
9902 第12次	公社		990406 ~ 000328		5,500	古代製鉄炉	326
9903 第13次	公社		990412 ~ 000316	3	600	前方後円墳1基、円墳2基	6
9904 第14次	公社		990422 ~ 990722		1,200	古代塗含層	1
9923 第15次	公社		990611 ~ 990928		3,500	古代塗含層、中世水田	80
9933 第16次	公社		990802 ~ 991110		1,200	古代塗含層	1
9934 第17次 (元岡古墳群B群)	公社		990910 ~ 991228	2	517	円墳	4
9946 第18次	公社		991010 ~ 002015		16,800	古墳時代～古代・住居・建物・池、製鉄炉	1100
9947 第19次	公社		991016 ~ 992115		3,000	古代塗含層	1
0001 第20次	公社		000405 ~ 000523		28,130	弥生時代・古墳時代住居・古代建物・池、「大宝元年」木簡・骨器	2050
0002 第21次	土木局		000405 ~ 000521	3	3,170	石ヶ原古墳群1号基、桑原古墳群A群1基	6
0033 第22次	公社		000410 ~ 001025		4,750	古代鐵冶住建物・製鉄廻産遺構	30
0019 第23次	公社		000601 ~ 001031		8,110	確認調査	1
0034 第24次	公社		000821 ~ 000920		5,500	古墳時代住居址、古代製鉄炉	800
0052 第25次 (桑原古墳群A群)	公社		001124 ~ 011130	7	2,200	円墳	16
0110 第26次	公社		011005 ~ 011130	1	5,487	古墳時代住居址、円墳、古代獨立建物	1
0153 第27次	公社		011101 ~ 020820		4,495	古墳時代住居址	106
0154 第28次	公社		020201 ~ 020704		2,200	古代～中世塗含層	30
0204 第29次 (元岡古墳群B群)	公社		020405 ~ 030930	11	4,000	円墳	0
0240 第30次	公社		020801 ~ 020930		2,450	古代包含層	0
0242 第31次	九大		030401 ~ 060113		9,000	古代土坑・建物群及び製鉄廻産・古墳時代祭司同埋	1200
0257 第32次	確認調査		030120 ~ 030331		1,700	確認調査	-
0303 第33次	九大		030408 ~ 030519	1	450	桑原石原古墳群	1
0310 第34次	公社		030401 ~ 030812	3	1,200	元岡石原群1群	3
0340 第35次	公社		030520 ~ 050112		1,853	前方後円墳・石ヶ原古墳 (途中中断)	1
0341 第36次	公社		030901 ~ 030931	1	3,500	経塙・井戸 (埴輪を持つ大型円墳) + 中近世墓群	196
0365 第37次	公社		031020 ~ 040226	4	461	元岡石原群O群	3
0371 第38次	公社		040308 ~ 050117		1,000	水崎風穴一部	1
0399 第39次	民間		040405 ~ 040416		88	弥生時代中期塗含層	100
0410 第40次	九大		040407 ~ 040430		1,000	遺物・土壌流れ込み	1
0411 第41次	九大		040507 ~ 041130		1,000	遺物・土壌流れ込み	1
0435 第41次B	九大		060202 ~ 060217	900	谷の中の包含層、製鉄廻産物多量。途中・中期	60	
0452 第42次	九大		041001 ~		8,000	自然崩落、1万箱の遺物、平島系土器・小網縫・多種木器など	1万
0496 第43次	公社		050207 ~ 050308		古墳墓道	1	
0523 第44次	九大		050601 ~ 051020		1,189	古墳・古代墓葬	50
0535 第45次	公社		050720 ~ 051122	3	1,128	桑原石原群A群	1
0538 第46次	土木局		050808 ~ 051011		403		10
0562 第47次 (I-1号墳)	九大		060105 ~ 060310	1	107	前方後円墳ではなく円墳	0
0563 第48次	公社		060110 ~ 060223		447	整穴住居	17
0611 第49次	公社		060403 ~ 070322		4,000		55
0709 第50次	公社		070401 ~ 070827		811		44
0741 第51次	公社		070829 ~		4,000	古墳時代・古代建物群	
0763 第52次	九大		080121 ~		3,000	弥生時代・後平河川	
0768 第53次	公社		080215 ~ 080409		770	古墳時代・古代建物群	
0800 第54次	公社					先生・古墳時代河岸	

調査報告書一覧

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概要1	福岡市埋蔵文化財調査報告書 093集	2001
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概要2	福岡市埋蔵文化財調査報告書 143集	2003
元岡・桑原道路群1	福岡市埋蔵文化財調査報告書 725集	2002
元岡・桑原道路群2	福岡市埋蔵文化財調査報告書 744集	2003
元岡・桑原道路群3	福岡市埋蔵文化財調査報告書 829集	2004
元岡・桑原道路群4	福岡市埋蔵文化財調査報告書 860集	2005
元岡・桑原道路群5	福岡市埋蔵文化財調査報告書 881集	2005
元岡・桑原道路群6	福岡市埋蔵文化財調査報告書 909集	2006
元岡・桑原道路群7	福岡市埋蔵文化財調査報告書 910集	2006
元岡・桑原道路群8	福岡市埋蔵文化財調査報告書 962集	2007
元岡・桑原道路群9	福岡市埋蔵文化財調査報告書 963集	2007
元岡・桑原道路群10	福岡市埋蔵文化財調査報告書 964集	2007
元岡・桑原道路群11	福岡市埋蔵文化財調査報告書 1011集	2008
元岡・桑原道路群12	福岡市埋蔵文化財調査報告書 1012集	2008
元岡・桑原道路群13	福岡市埋蔵文化財調査報告書 1013集	2008
元岡・桑原道路群14	福岡市埋蔵文化財調査報告書 1063集	2009
元岡・桑原道路群15	福岡市埋蔵文化財調査報告書 1064集	2009
桑原道路群	福岡市埋蔵文化財調査報告書 432集	1995
桑原道路群	福岡市埋蔵文化財調査報告書 480集	1996

III 第33次調査

1 調査区の位置

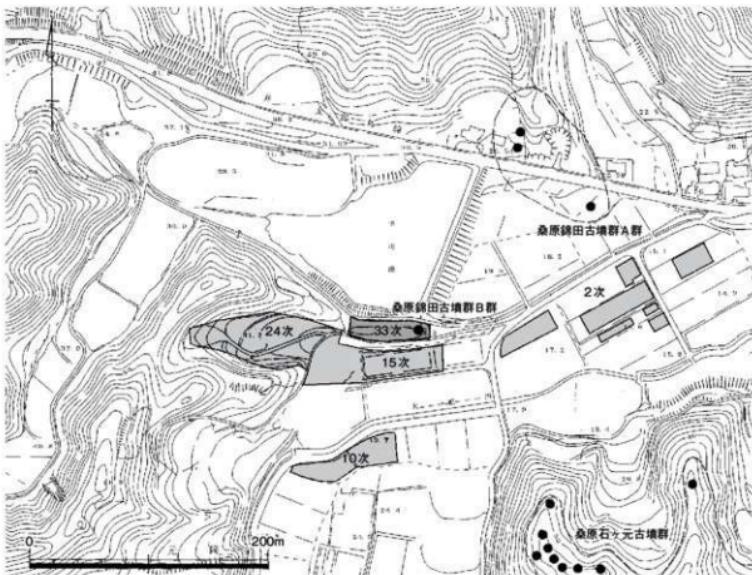
第33次調査区は福岡市西区大字桑原字平川に所在し、九州大学移転事業対象地の北側中央（D地区）に位置する。桑原は今津湾に面する東をのぞいた三方を山に囲まれており、その西の奥は東西の谷となり、桜井に抜ける県道が走っている。この谷の南側、元岡との境から延びる山稜の先端、やや東に突き出た丘陵が第33次調査区である。この丘陵の裾近くを南から東に向かい大原川（桑原川）が流れ、その周囲には水田が開かれている。また丘陵北側には平川溜池がある（図III-1）。

この丘陵の東端部が桑原錦田古墳群B群1号墳（円墳）として登録されており、今回の調査はこの古墳を対象としたものである。調査区の標高は最も高い丘陵西側で30m前後、南側にある水田からは約10mほど高い。

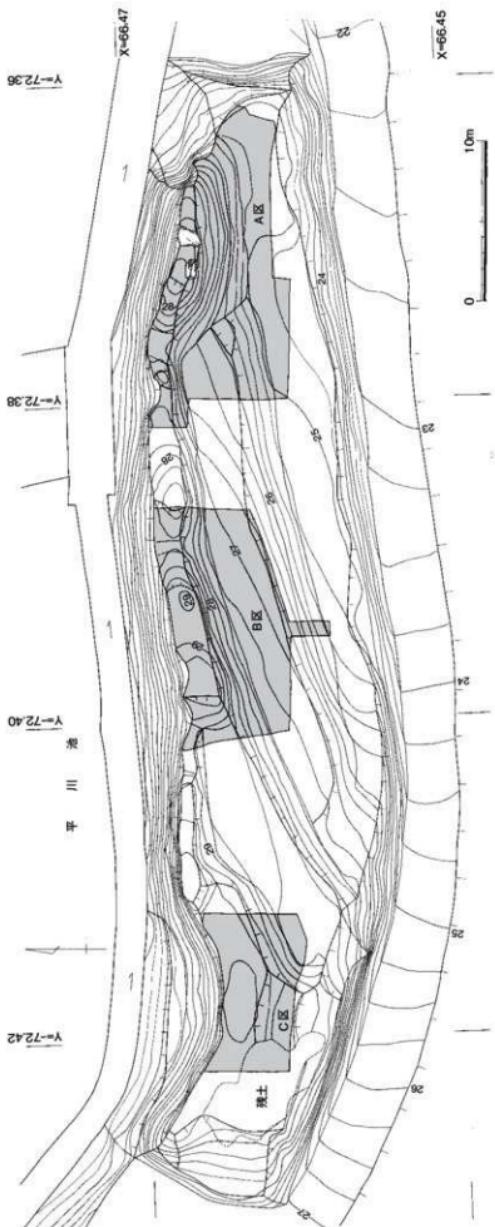
これまでに調査地の南側にあたる水田および谷部では第2次、10次、15次、24次調査が、水田を挟んだ元岡との境をなす山塊部では桑原石ヶ元古墳群の調査が行われている。また平川池をはさんだ北側には桑原錦田古墳群A群があり、2基の円墳が調査されている。

2 調査の記録

調査前、丘陵の東端部が丸みをもち、その頂部にふたつの削石がみられた。これが踏査時に円墳として登録されていた桑原錦田古墳群B群1号墳である。今回の調査はこの古墳を対象としたものであるが、丘陵上には他にも古墳らしき高まりがあり、この丘陵の全体約1,000m²を測量した上で、1号



図III-1 第33次調査地点位置図（縮尺1/4,000）



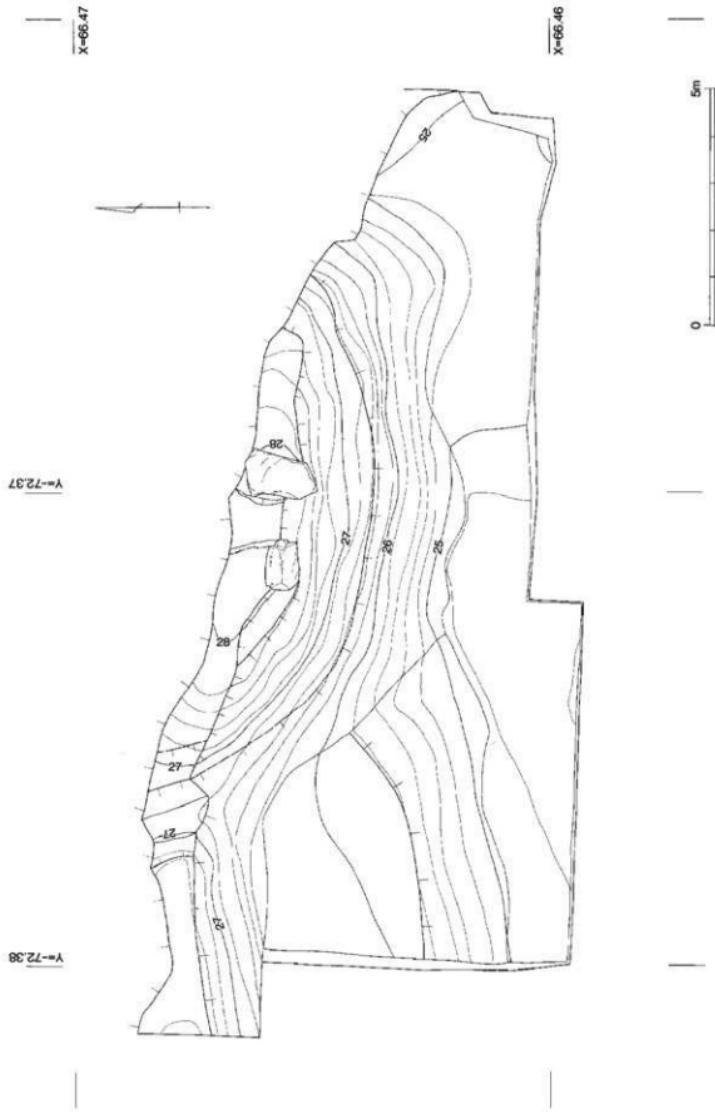
図III-2 第33次調査地点現況測量図（縮尺1/300）

墳を含めた尾根状部の3ヶ所（東からA区〈1号墳〉、B区、C区とよぶ）を発掘することにした。発掘調査は平成15年4月7日の現地確認から開始し、現況測量を終えた4月21日から3ヶ所の発掘に入り、4月26日～5月6日までの調査中断を経て、5月19日に終了した。発掘面積約450m²。

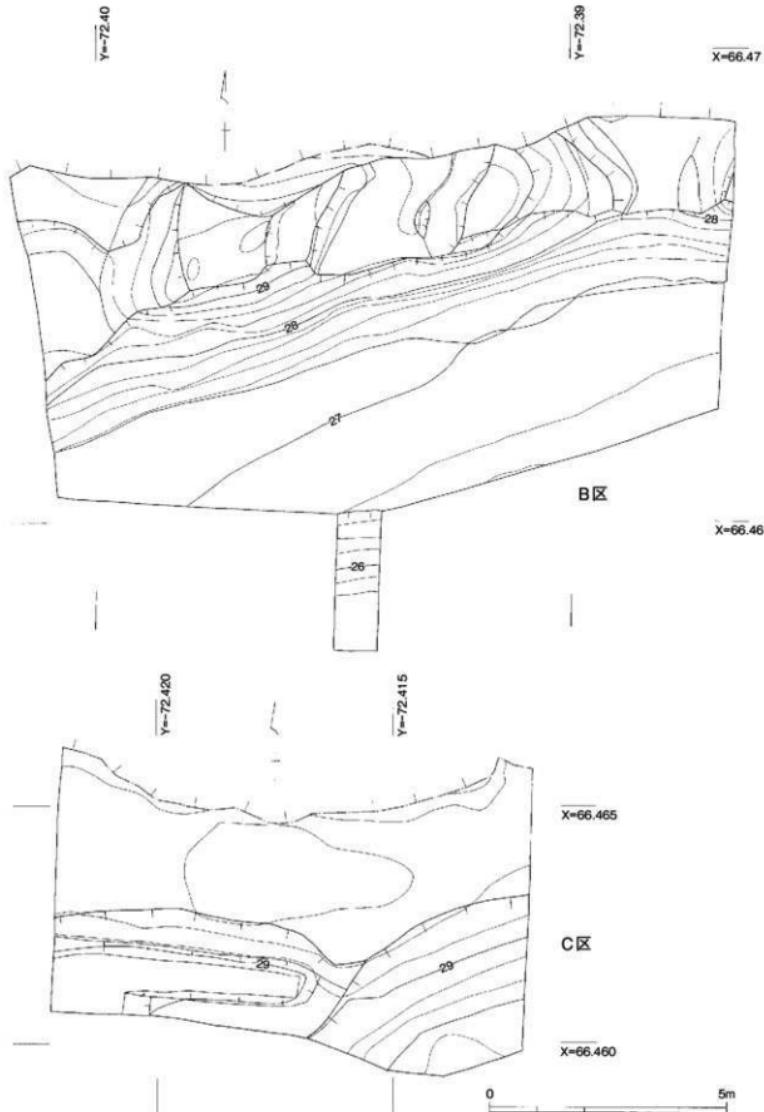
現況測量から調査地の丘陵は、西側からの尾根が土取りで切断され、北側部分は平川溜池築造の際に大きく削り取られ、また南斜面にも畑や農道がつくられているなど大きな改変を受けていることが判明した。南から見るとあたかも東西長70mほどの独立丘のように見えるが、たび重なる造成の行われた後の残丘というのが実態であった。今に残る東西の尾根線も本来のものではなく、造成によつてできた可能性が高い（図III-2）。以下、各区の調査の結果を記す。

A区〈桑原錦田古墳群B群1号墳〉（図III-3） 丘陵の東端部にあたる。西からの尾根がいったん緩やかに下がり、そこから東に1mほど高まって長さ6m、幅1mのやや東に傾いた平坦な頂部となる。ここにふたつの割石がみられた。平坦部の北側は大きく削り取られ平川溜池への急な崖面となり、南側も北側ほどではないが傾斜面となり、頂部から約3m下がったところに畑として利用したとみられる南北幅4mの平坦面が作られている。

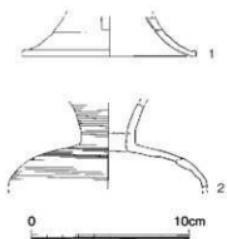
表土を剥いだところ、ほぼ全域が直下で地山となっており、頂部には花崗岩の岩脈が露出している。



図III-3 A区（桑原錦田古墳群B群1号墳）測量図（縮尺1/100）



図III-4 B区・C区測量図 (縮尺1/100)



図III-5 出土遺物実測図
(縮尺1/3)

た。埴丘の盛土は確認できなかった。西側の尾根との鞍部には幅1.5m、深さ20cmの北北西方向の溝があり、この東側肩部分の標高27mのラインが南側斜面変換線とほぼ軌を一にしてめぐっていた。

この鞍部の溝から約1m高い標高28mが頂部の平坦地となり、西に長さ1.1m、幅0.7m、厚さ0.4m、東側に長さ1.5m、幅0.9m、厚さ0.6mの割石が約1mの間隔をもって向かい合っていた。しかし、ともに掘り込みや根石などで固定された様子は認められず、岩盤の上にそのまま置かれていた状態であった。この二石の間に幅1.2m、深さ10cmの溝状掘り込みがあり、その中から須恵器の破片が出土した。須恵器(図III-5、1)は透孔をもちその下に回線をめぐらせた高杯脚部小片で、脚底径は11cmをはかる。焼成は堅緻で、外面淡褐色、内面暗灰褐色。脚裾には自然釉のかかり黒色となる。

以上の発掘状況から見ると、1号墳は大きく破壊され、わずかに南側下部の一部をとどめているだけと想定される。頂部の割石も石室構築材としてはもの的位置を保ったものではなく、かろうじて頂部西側の溝が古墳の状況をとどめているようにみえる。この溝を周溝とすれば埴丘の標高は27m前後で、また頂部の掘り込みを羨道端か墓道の痕跡ととらえ、溝の方向と考え合わせるならば、径12m前後、高さ3m程度、埴丘下部は地山整形で造った円墳に復元できよう。埋葬主体部は横穴式石室であり、南側に開口していたものとみられる。6世紀後半以降の築造であろうか。

B区(図III-4) 対象地の中央部分にある。尾根上の長さ11m、幅2~3m部分が、1mほど高まり、その中央がくぼんでいたため古墳ではないかと発掘を行った。A区と同様表土直下で地山があらわれ、くぼみのあった中央には幅3m、深さ20cmの掘り込みが南北方向に見られた。ここから須恵器片が1点出土したが、石材はもとより抜き跡も全く見られず、古墳との確証は得られなかった。出土した須恵器(図III-5、2)は小片のため反転復元して図示したが平顔とみられる肩部小片で、外面にはカキ目を施している。焼成は堅緻で、灰~暗灰色を呈する。

C区(図III-4) 対象地の西側、最も標高の高い部分を発掘したが、地山が表面に出ているなど削平が進んでおり、遺構、遺物は認められなかった。

3まとめ

今次の調査は桑原錦田古墳群B群1号墳とその西側尾根を対象としたものであったが、地形の改変が著しく明確な遺構の検出には至らなかった。1号墳はその南側下部の一部が残存したもので、古墳そのものは「皇紀二千六百年記念事業」として1939年起工し翌年竣工した平川溜池の建設(『元岡村誌』1961)でおかれた破壊されたものとみられる。平川溜池はさんだ北側の丘陵にある桑原錦田古墳群A群は3基の古墳からなり、うち2基の円墳が調査されている。ともに横穴式石室をもち、6世紀後半以降の築造年代が考えられている。B群はA群とは違った丘陵に立地しており、現在1号墳の1基が確認されているだけであるが、その北側部分が溜池で破壊されていることからみると、若干基数が増加する可能性もある。その痕跡がB区で出土した須恵器片とみるのは早計であろうか。しかし、この低地に面した丘陵上に営まれた桑原錦田古墳群(A・B群)にくらべ、南側の山陵尾根線上に築かれた桑原石ヶ元古墳群は30基をこえる。この古墳群は5世紀中頃から造墓が始まっているが、6世紀後半以降の築造古墳が約1/3もあり、桑原錦田古墳群と立地にくわえ基数もおおきく異なる。古墳被葬者の社会的地位や系譜による違いとみられるがその検討は今後の課題である。



1

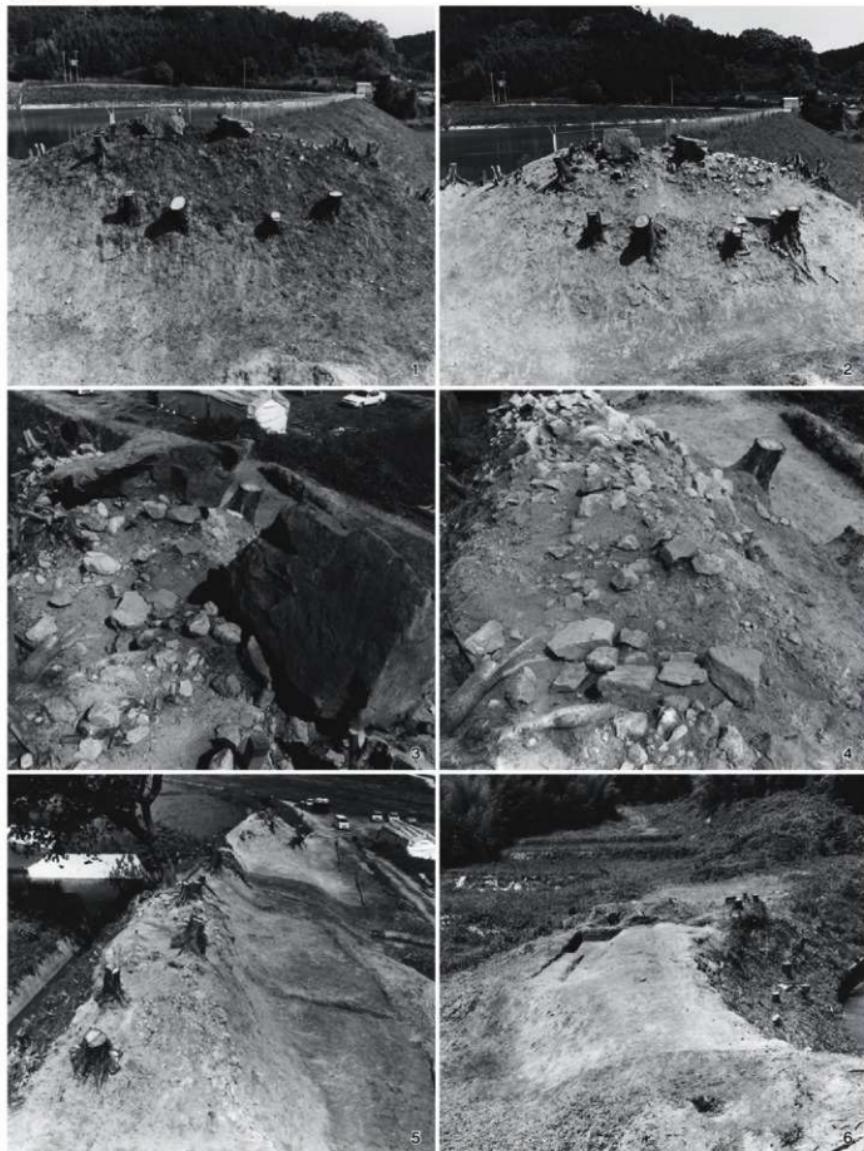


2

調査区全景（調査前） 1 南から 2 東から



調査区全景（調査後） 1 南から 2 東から



1 桑原錦田古墳群B群1号墳全景（調査前、南から）
2 桑原錦田古墳群B群1号墳全景（調査後、南から）
3 桑原錦田古墳群B群1号墳頂部状況（西から）
4 桑原錦田古墳群B群1号墳頂部割石除去後状況（西から）
5 B区全景（西から）

IV 第40次調査

1 調査区の位置

第40次調査は、元岡桑原遺跡群の北東隅に位置している。遺跡群がある丘陵群を北東に降りた平地部分に立地している。縄文時代海進期の海外線近くである。

平成8年度に実施した移転用地内の試掘調査で、西側から伸びる丘陵と若干の須恵器が検出されたことから調査を実施した。

2 調査の記録

発掘調査は、平成16年4月1日に重機による表土剥ぎから開始した。調査区は道路を挟んで西側約105m、東側約685mを測る。

西側調査区では、調査区南東端で、地表下約65~80cm、橙色粘質土から成る台地部約30mを検出したが、それ以外の地点は台地から徐々に落ち、グライ化した橙色粘質土が地山となる。調査区北端部で急激に落ち、落ちた部分で激しい湧水を伴っている。

地山の上は10~30cmの旧耕作土、その上に厚い客土がある、最上層は現耕作土である。遺構は旧耕作土に伴う狭い溝以外にはなく、遺物も須恵器・土師器の細片10片ほどだけである。

調査は4月30日に埋め戻して終了した。

3 まとめ

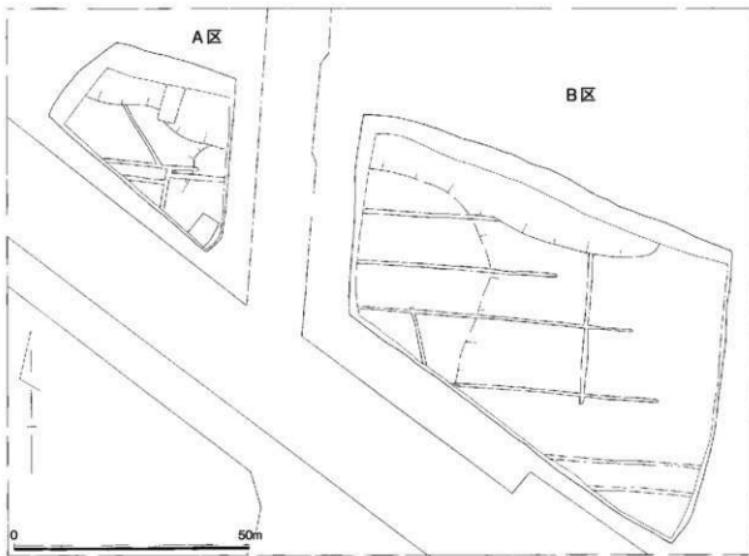
当該地は西から伸びる丘陵端部で、遺構はない。約200m北側には桑原飛櫛貝塚があり、調査区内北側が大きく落ちて湧水を伴うことから、調査区北側が旧海岸線に近いものと考えられる。



図IV-1 第40次調査位置図 (1/2,000)



写真1 B区全景（北から）



図IV-2 第40次調査全体図 (1/1,000)

V 第41次調査

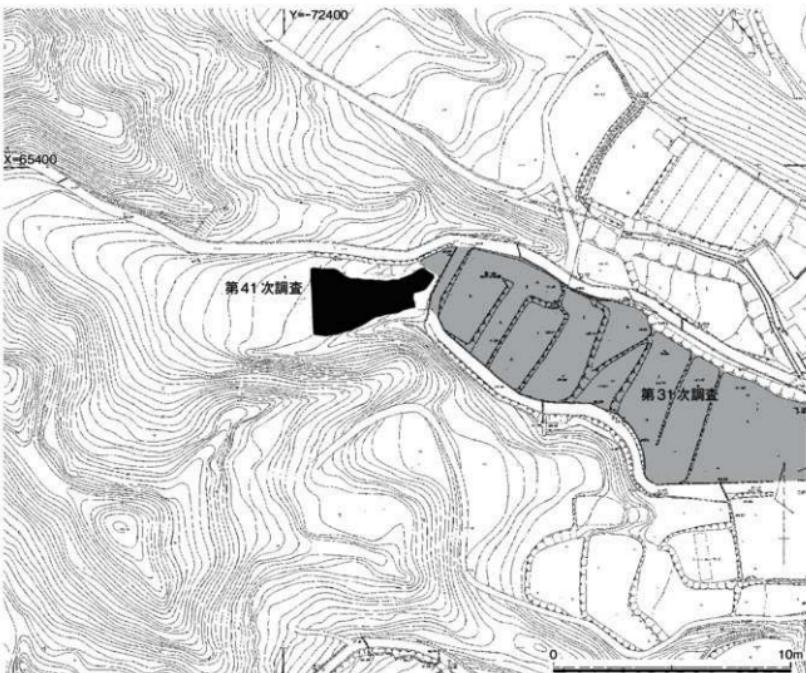
1 調査区の位置

調査区は第31次調査と里道を挟んで西側にあり、第31次調査と同じ谷の奥部である。調査区の北側と南側は幅が狭く急峻な痩せ尾根で、両側を尾根に挟まれた幅約40mの谷部に立地している。調査対象は試掘時に遺物包含層が切れる更に奥、道から概ね40mの範囲、約1,500m²とした。

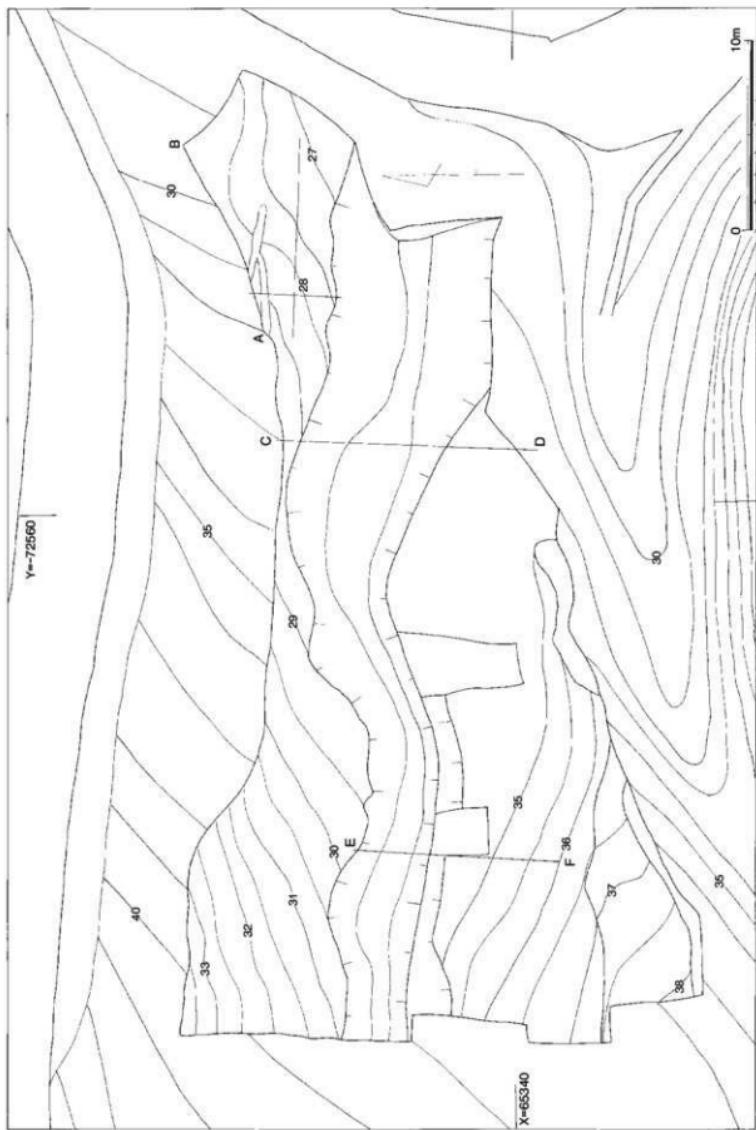
2 調査の概要

当初第31次調査の一部として、平成15年度中に表土を剥いでいたが、諸般の都合により、作業員を投入しての発掘調査は平成16年5月7日に開始した。表土剥ぎから時間が経過していたため、一度全面を清掃した後、遺構検出を行った。その結果、東側台地部にピットと西側台地際にピットと溝が確認できた。東側台地部のピットは、大きさ・覆土から柱穴の可能性が高いと考えたが、西側台地落ち際のピットは樹根等、溝は雨水等の流れた跡の可能性が高いと、覆土等から推測された。その他部分は全面谷の中の埋土と考えられ、まず谷の埋土の中に試掘トレンチを入れた。

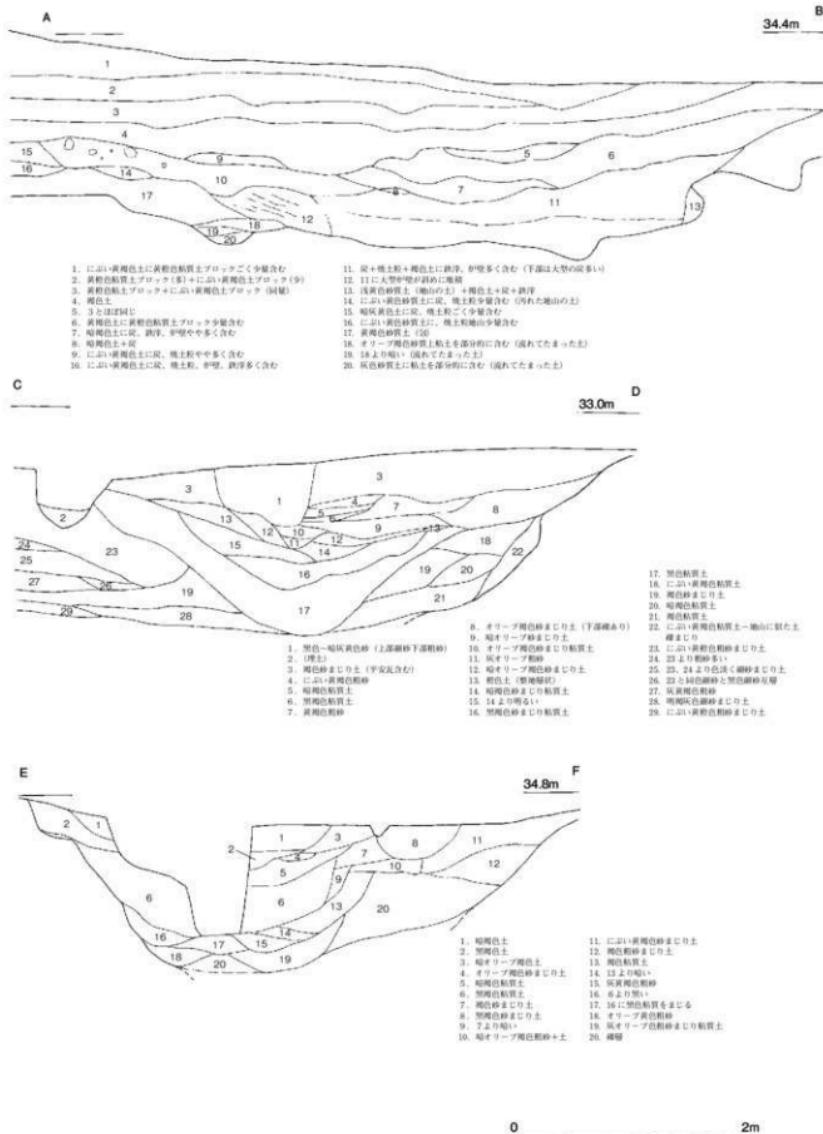
試掘トレンチは谷の方向と直交に、20m離れて2本入れた。第31次調査区に近いトレンチをAトレンチ(図2のC-D)、谷奥側のトレンチをBトレンチ(図2のE-F)と呼んだ。



図V-1 第41次調査位置図 (1/2,000)



図V-2 第41次調査測量図 (1/250)



図V-3 谷及び調査区北壁土層断面図 (1/40)

Aトレンチでは、最上層から多くの須恵器・土師器・鉄滓を含み、各層毎に多くの遺物を含んでいたが、最下層までは深くて掘削できなかった。Bトレンチでは、Aトレンチに比べて遺物が極端に少なく、特に下層では遺物がほとんど出土しなかった。

2本のトレンチの状況から、平安時代遺物が出土する黒褐色系の粘質土(上層)、砂と粘土の互層から成る奈良時代層(中層)、奈良時代以前の須恵器が出土する粗砂・細砂の互層から成る下層に分かれるため、それぞれ上層から掘削することにした。掘削に当たっては、10m毎に南から1区・2区・3区・4区・5区と分けて、1・2区の間、3・4区の間にベルトを設定して掘削していく。

1区の谷中心部から東側では台地部があり、その東南端では、前述の柱穴状ピット群があるが、その北側は、包含層上層から10cm掘り下げた深さで、大量の鉄滓・炉壁が出土し始めた。この地点ではSX01の番号を付し、全体を2m方眼でグリッドとグリッド間にベルトを設定し、遺物を残しながら掘削した。結果的にはこれらの遺物は北側上方からの流れ込みと判断された。

西側台地落ち際のピット・溝は、掘削の結果当初の予測通り新しい時期ものと判断できた。東側のピットについては、この地点を廃土の置き場にしていたため、最後まで調査ができず、調査の都合上、東側に隣接する第31次調査の一部として、調査を行った。

なお、調査区の東側前面には調査区より標高の高い既存道路があり、調査中は常に排水に悩まされ、平成16年度は台風が多くなったこともあり、調査期間は当初見込みを超えた上、最終的に道路を撤去しなければ、最下層が掘れない状態になったため、平成16年11月末の時点で1区の下層のみを残した状態で一旦調査を中断し、南側に隣接する第31次調査の大半が終了した平成18年2月2日に調査を再開した。谷最下層の南端部を掘削・写真撮影・測量を行い、同年2月17日にすべての調査を終了した。

3 層序(図3)

上層の下部に整地層と考えられる層があるが、基本的には谷の中にたまたま自然層位である。谷の下流(1区)が最も深く、谷の上流に行くほど谷底までの深さは浅くなっている。場所によって細かな層は異なるものの、大まかな層は共通しており、最も基本的な層序は調査区東端で確認できるが、前述の通り、絶え間ない湧水と調査期間中に頻繁に訪れた台風により、結局この部分の土層断面は実測することができなかった。谷の土層断面としては、谷2区と3区の間、谷3区と4区の間の2箇所を実測し、またSX01の北側の調査区北壁部分の実測を行った。

谷の埋没土は、谷1区から3区までが、上層:褐色土(一部砂礫層)、中層:砂層(薄い層の互層で、部分的に粘土層)、下層:黒色系の粘質土である。4区から西側には中層にあたる砂層がほとんど存在しない。また1区のみは下層の下部が葉を含む腐葉土層(最下層I)となり、さらにその下に厚さ20cm前後の砂層(最下層II)があり、最下層では若干の湧水を伴う。これらの層は全体としてUまたはV字に近い断面形を呈しているが、実測図を取った2箇所では、これらの層は無遺物の砂層群を切り込んだように溜まっており、人為的か自然によるものかは別にしても、一度谷全体に溜まった層の上から溝状に掘削されている。

図示している2つの土層断面では認められないが、谷1区から2区にかけて、上層と中層の間に厚さ10~20cmほどの整地層があった。橙色系の粘質土を数回にわたって整地したものである。

調査区北壁の土層断面を見ると、この地点は谷の中心の北側にある緩斜面部分の土層であるが、最下層に鉄滓・炉壁等を大量に含む流土が厚くあり、その上に間層を挟んで整地層が2枚ある。この整地層が前述の谷の整地層と同一時期かどうか不明である。なお図面の1層の上に厚さ約1mの鉄分を

多く含んだ灰色系の砂質土があり、さらにその上い厚さ1m前後の客土が乗っている。

地山は場所によって異なり、谷奥に近い4区以西では、花崗岩岩盤もしくは同風化土が地山で、3区以東では、南側が花崗岩岩盤、北側が橙色粘質土が地山である部分が多い。ただし谷底や谷の立ち上がり部分は人頭大に近い礫層があり、その下は掘削困難であった。

4 遺構と遺物

上述したとおり、明確に人為的に構築・掘削した遺構は31次調査に編入した柱穴群以外にはないが、谷の北側緩斜面に上方から落ちてきた、もしくは落とされた製鉄関連遺物群に対してSX01の名を付しており、この部分について記述した後、谷部から出土した遺物について説明する。

(1) SX01(図4、図版2・3)

調査区北東側、谷1区の北側の平坦面に近い緩斜面上にある。表土剥ぎ後に全体を一錆下げた段階で、鉄滓・炉壁が広い範囲で出土し始めたため、2mグリッドを設定し遺物を残しながら掘削した。遺物が全体に露出した段階で写真撮影・実測を行った。さらに遺物がなくなる面まで掘り下げ、各ベルトの土層断面実測・写真撮影を行った後、ベルトを撤去し、再度全体の写真撮影・実測を行った(図4)。土層の状況を見ると、北側の高所から斜めに互層に堆積している状況が窺われる。互層部分は焼土・炉壁などのまとまった層で、鉄滓は全体に包含されている。以上の状況を考えれば、製鉄炉は北側上方の斜面上ないしは斜面内にあるものと思われ、それらを斜面下に掻き出したものが、さらに斜面を落ちていって溜まった結果がSX01であると考えられる。

製鉄関係遺物群の下はほぼ平坦面を成しており、平坦面の北東側は溝や窪みが多くあり、水性の層が溜まっている。この平坦面は谷の中にある地形から見ると異質である。おそらく製鉄を始める前の作業スペースとして平坦面を造り、周囲に雨水用の小溝を掘ったのではないかと推定される。製鉄後は、鉄滓等の廃棄場所として使用されたと思われる。

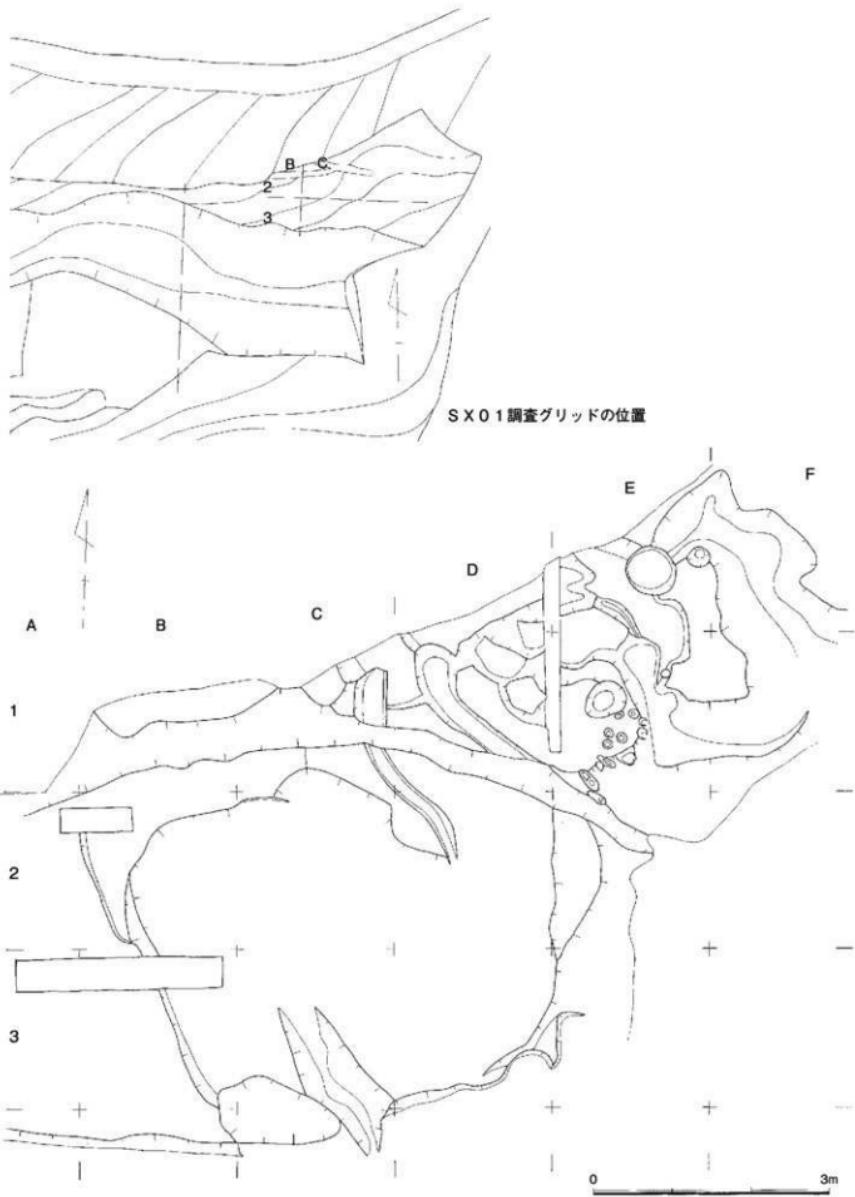
出土遺物(図6～8)

出土遺物の大半は鉄滓・炉壁で、これらがあわせてコンテナ100箱が出土した。その他に須恵器・土師器・瓦・羽口などがコンテナ約10箱出土した。出土した遺物は、製鉄遺物群が多く含まれる上層・中層と、若干の鉄滓が含まれている下層に分けて取り上げたが、下層は遺物量がかなり少ない。またSX01直下の包含層から出土した遺物とSX01内出土遺物が接合したものが若干あり、SX01と包含層を完全に分離できないことから、上・中層出土遺物の次に、SX01下の包含層出土遺物を掲載した。

上・中層出土遺物(図6・7)

上・中層からは須恵器・土師器の他、中世の陶器が少量と鉄滓・炉壁が多量に出土した。浅いコントナで約100箱の遺物が出土した。鉄滓・炉壁が分析が終了していないため、詳細は今後の報告書でまとめたい。出土した炉壁は約20箱で、炉底部分も含んでいる。鉄滓は約80箱の出土で、炉内滓・炉外滓とともに量が多く、双方とも流出滓を含んでいる。また鉄分を残す滓も少なくなさうである。以下、鉄滓以外の出土遺物について記す。

1は須恵器の甕で、口径16.7cmを測る。胴部外面はカキ目、その他はロクロによるヨコナデである。2は須恵器の环蓋である。3～6は土師器の皿である。いずれも底部はヘラ切りで、3は口径14.8cm、器高2.1cm、4は口径14.0cm、器高1.5cm、6は口径17.1cm、器高2.1cmを測る。5は底部に焼成後の穿孔らしきものが観察できるが、その部分で破片が削れているため、やや不明確である。1・2は上層、



図V-4 SX01実測図 (1/60)

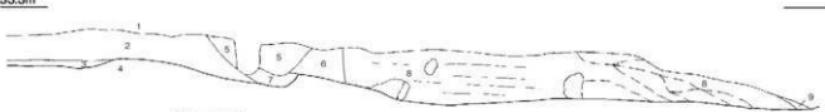
33.8m



32.4m



33.3m

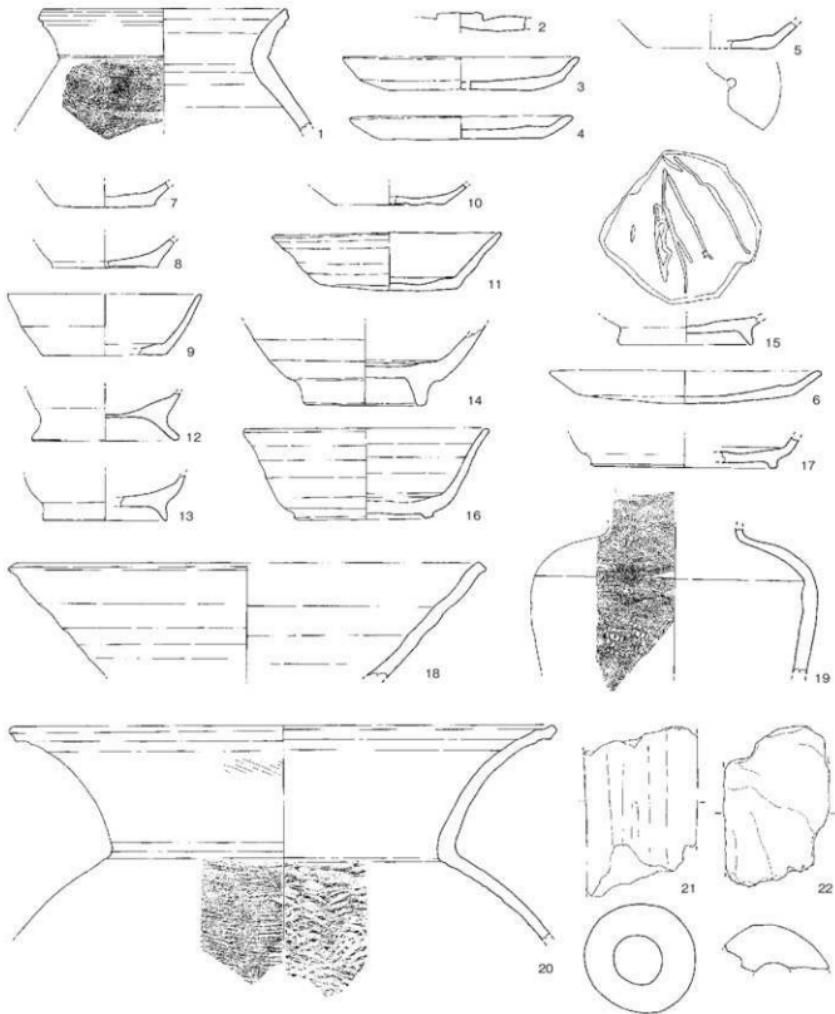


32.7m



0 2m

図V-5 S X O 1 土層断面実測図 (1/40)



図V-6 SXO 1出土遺物実測図1 (1/3、1/4)

3・4は最上層出土、5・6は中層の出土である。

7～11は土師器の壺で、いずれも底部はヘラ切り、体部はロクロによるヨコナデである。9は口径12.2cm、器高3.9cmを測る。11は全体的にやや歪んでいる。口径14.3cm、器高3.6cmを測る。12～15は土師器の高台付の椀または鉢である。12・13の大部分は摩滅のため調整は不明であるが、12の外底部に板状圧痕がかすかに確認できる。14はヘラナデで全面を仕上げている。15は内面をヘラによるミガキ状のナデで仕上げているが、見込み部分にヘラ状工具によって、ゆがみのある沈線状のものを数本施している。11・14・15は上層出土で、他は中層出土である。

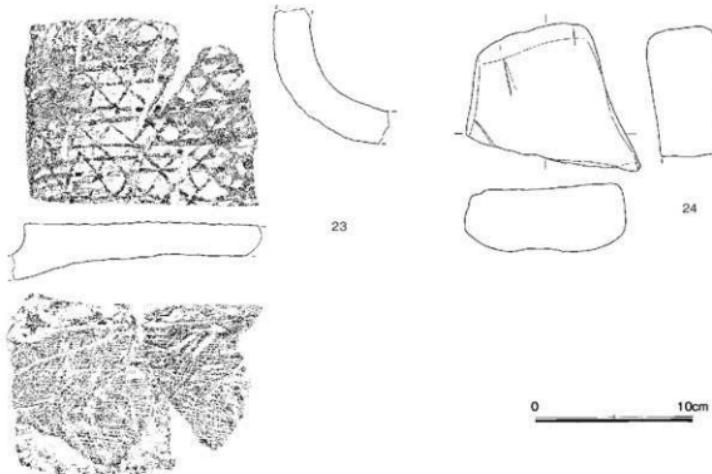
16～17は須恵器の高台付き椀である。16は口径15.4cm、器高5.8cmを測る。17は底径11.8cmとやや広い。ともに中層の出土。

18は須恵質の鉢である。口径30cmを測る。灰色を呈する。中世の捏ね鉢で、上層から出土した。19は須恵器の壺である。外面胴下部に格子目のタタキが施され、他はナデ消している。内面の下部にはヘラ状の調整痕がある。肩部の径18cmを測る。20は須恵器の甕で、口径46.2cmを測る。胴部外面は目の細かい平行タタキで、内面は同心円の当て具である。頸部から口縁部はヘラナデであるが、かすかに櫛状施文具の痕跡が認められる。18～20はいずれも上層の出土。21・22は中層出土の羽口で、羽口はこの2点のみの出土である。外径は約7.2cmと約7.8cmである。

23は中層出土の丸瓦で、外面に斜格子タタキを施している。内面は布の圧痕である。24は中層出土の石皿もしくは砥石であるが、摩滅がひどくどちらとも判断しにくい。砂岩製。最大幅10.8cm、厚さ4.5cmを測る。

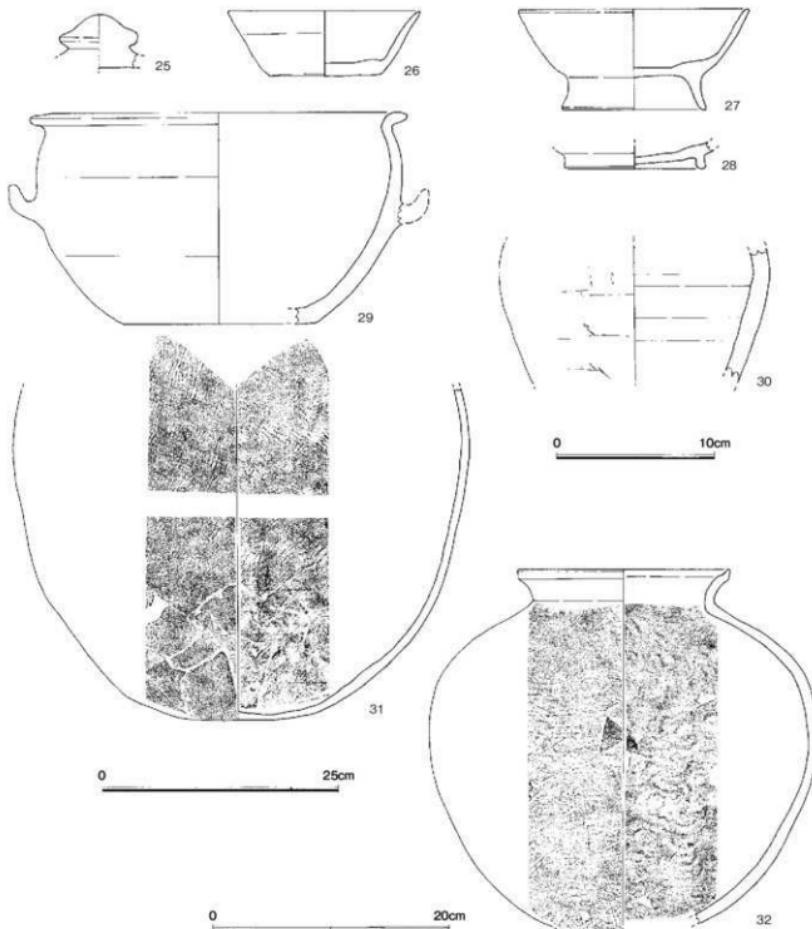
下層及びS X O 1 下出土遺物（図8）

ここで下層としたのは主にS X O 1 の包含層最上面から出土した遺物である。正確に言うとS X O 1 の遺物ではないが、S X O 1 出土遺物と比較するためにここに掲載した。25は須恵器の壺蓋把手部分で、ていねいな造りである。S X O 1 の直下から出土した。26は土師器の壺で、口径12.0cm、

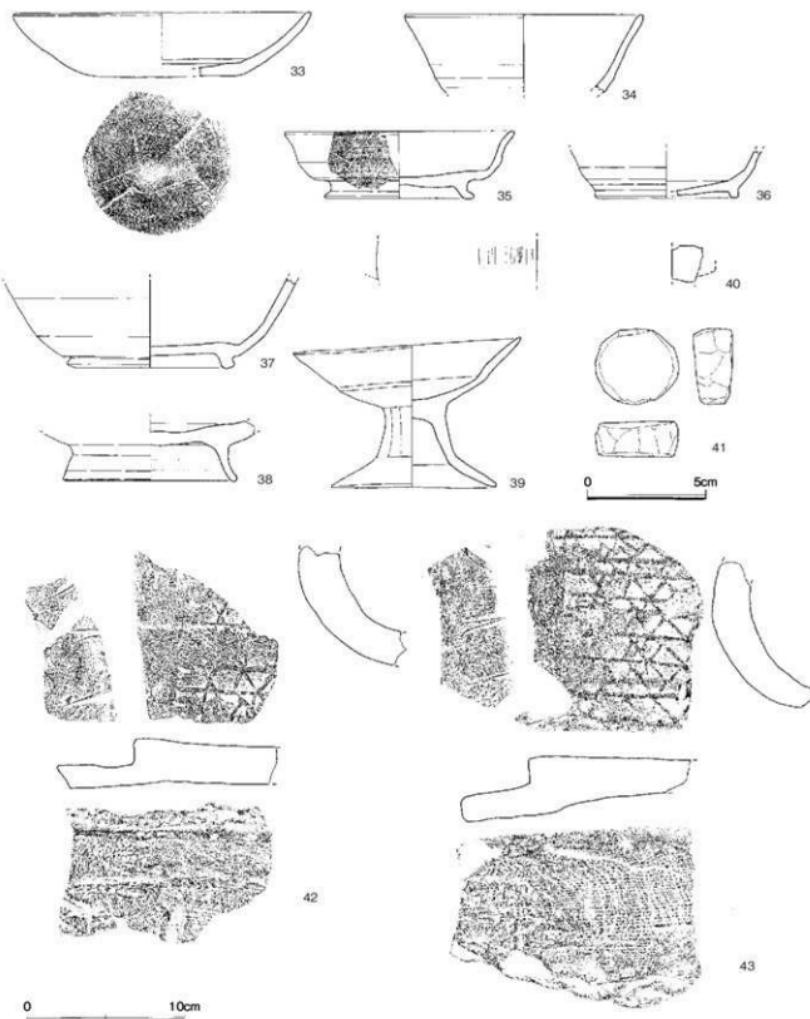


図V-7 S X O 1 出土遺物実測図2 (1/3)

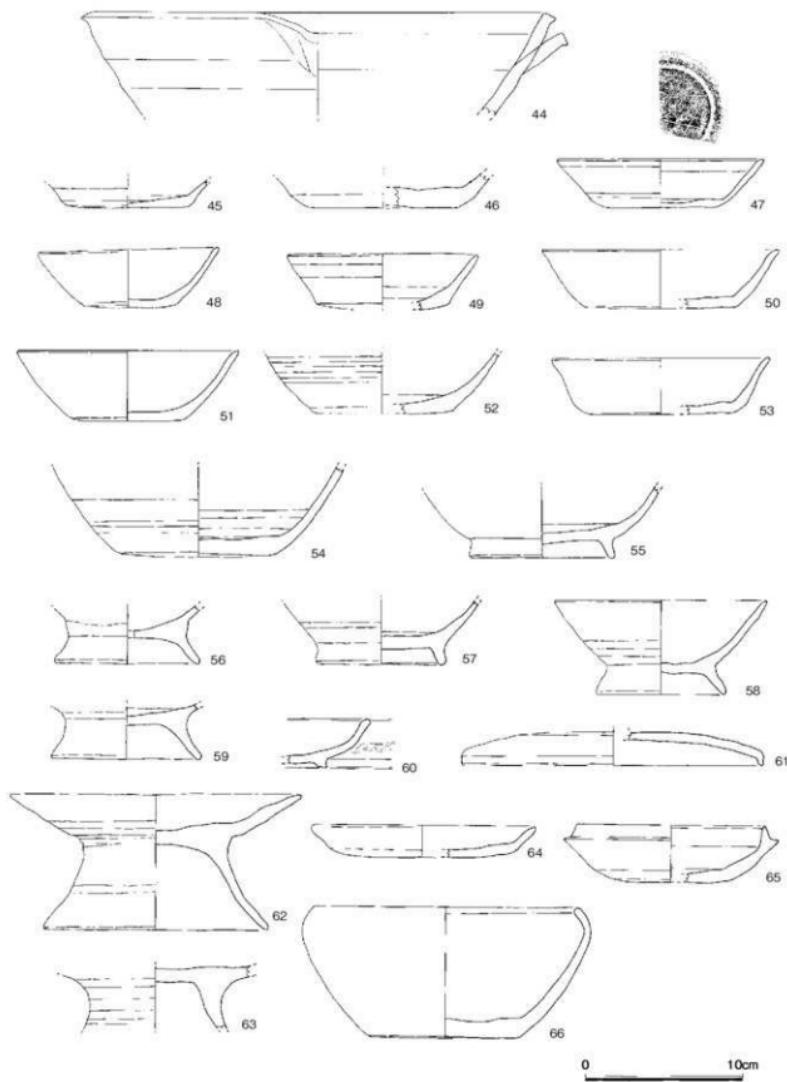
器高4.1cmを測る。27・28は土師器の高台付碗である。27の高台は高く、やや外に開いている。口径14.5cm、器高6.3cmを測る。28は低い高台である。29は把手付きの大型鉢である。把手は2箇所と思われる。全面ていねいな回転ナデ調整である。口径23.8cm、器高13.3cmを測る。全面回転ナデ調整である。30もSX01の下から出土した。須恵器の壺である。31は須恵器の甕で、SX01の下・SX01中層、谷1区上層・中層から出土しており、かなり拡散している。外面は平行タタキで、下半部はタタキの上にカキ目が施されている。内面は平行の当て具と別の種類の当て具を使用しているが、



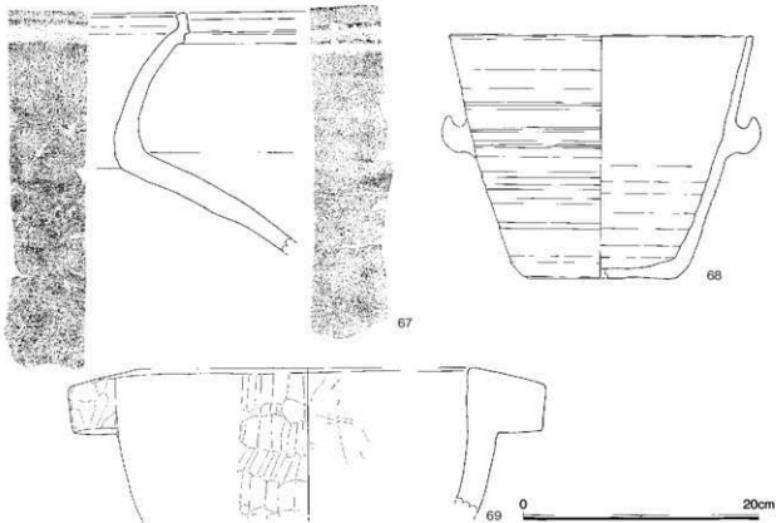
図V-8 SX01の下面出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/5)



図V-9 谷1区Aトレンチ出土遺物実測図1 (1/3、1/2)



图V-10 谷1区上层出土遗物实测图1 (1/3)



図V-11 谷1区上層出土遺物実測図2 (1/4)

文様はわからない。32も須恵器の甕で、口径18cm、推定高27cm前後を測る。外面は平行タタキの上からナデ、内面は同心円当て具で、一部カキ目状のものを施している。この土器もSX01の下・SX01中層、谷1区上層・中層から出土しており、かなり拡散している。

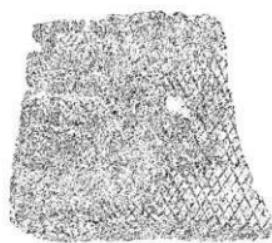
(2) 谷部の包含層出土遺物

順序で記載したように、大きく上層・中層・下層・最下層に分けることが出来る。ただしこれらがすべて存在するのは最も東側(下流側)の谷1区のみで、上流に行くほど層が少なくなる。従って、以下区ごと、層ごとに記載するが、3~4区では遺物の量が極端に少なくなり、5区では10点も出土していない。また包含層の掘削に先立って、1区と2区の間、3区と4区の間にトレンチを設定して掘削したが、前者(Aトレンチ)は1区で、後者(Bトレンチ)は4区のところに記載した。

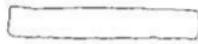
①1区Aトレンチ出土遺物(図9)

調査の最初に設定・掘削したトレンチで、下層下部から最下層までは掘りきれていない。谷1区の上層・中層・下層及び北側台地部の遺物を含んでいる。

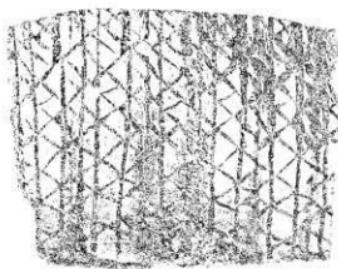
33は土師器の甕で、口径18.8cm、器高3.9cmを測る。34は須恵器の椀で、34は口径15cmを測る。上層出土。35は高台付甕に分類すべきか、高台の裾部が外に開く。口径14.4cm、器高4.2cmを測る。36は椀で、上層出土。37は軸体が大きく鉢か。中層出土。38は高い高台を有する土師器の椀である。上層出土。39は土師器高環で、口径14.3cm、器高9.6cmを測る。40は滑石製石鍋の把手部分で上層出土。41は石製品で、おはじき状に整形している。側面は面取り状に削り取った後に磨き、両平面は磨いている。直径約3.5cm、厚さ1.5cmを測る。下層出土で、石材不明。42・43は丸瓦で、ともに斜格子の



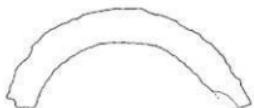
70



71



72



0 10cm

図V-12 谷1区上層出土遺物実測図3 (1/3)

タタキと布目痕を有する。上層出土。

② 1区上層出土遺物（図10～12）

ごく少量の中世遺物の他、平安時代を中心とする古代の土師器・須恵器・石鍋・瓦・鉄滓、少量の古墳時代遺物が出土した。

44は須恵質の片口鉢で、捏ね鉢である。45～49・51は土師器の坏である。口径12cm以下の小型のもの（48・49）、13cm以上のやや大型のもの（47・51）がある。50・53は須恵器の坏で、ともに口径14cm以上ある。52・54は土師器の鉢である。55～59は土師器の高台付椀である。55・56・58は高く開いた高台部を有する。60は須恵器の高台付皿である。61は須恵器の坏蓋で、つまみは欠失している。端部は折れ曲げている。62は土師器の脚台付皿。口径18.4cm、器高8.5cmを測る。脚の上部分は縱方向のヘラケズリで、他は坏部内面に横方向の研磨がわずかに残っている以外は摩滅している。63も脚台付き皿か。64は土師器の皿で、口径14.1cm、器高2cmを測る。65は須恵器の坏身で、口縁部は短い。口径12.0cm、器高3.6cmを測る。66は最上層出土の土師器の鉢で、口径部が内湾している。口径16.8cm、器高8.3cmを測る。外面は磨きに近いいねいなナデ調整である。

67は須恵器の大甕である。両面とも調整は明瞭ではないが、胴部外面は格子目タタキ、内面は当て具痕がわずかに確認できる。68は須恵器の把手付き鉢で、口径25cm、器高20.4cmを測る。ほぼ全面ロクロによるヨコナデで仕上げている。69は滑石製石鍋で、内径で26cmを測る。外面にはノミ痕が明瞭に残り、内面にはヨコ方向の擦痕が見られる。

上層から瓦は20片強が出土したが、細片が多い。70～72は瓦である。70は丸瓦で、外面には目の細かい斜格子タタキを施し、内面には布痕が残っている。71は平瓦で、外面には70と幅・太さの異なる斜格子タタキが施され、内面には布痕が残っている。72は丸瓦で、外面には有軸の斜格子タタキが施されている。内面に布痕が明瞭である。

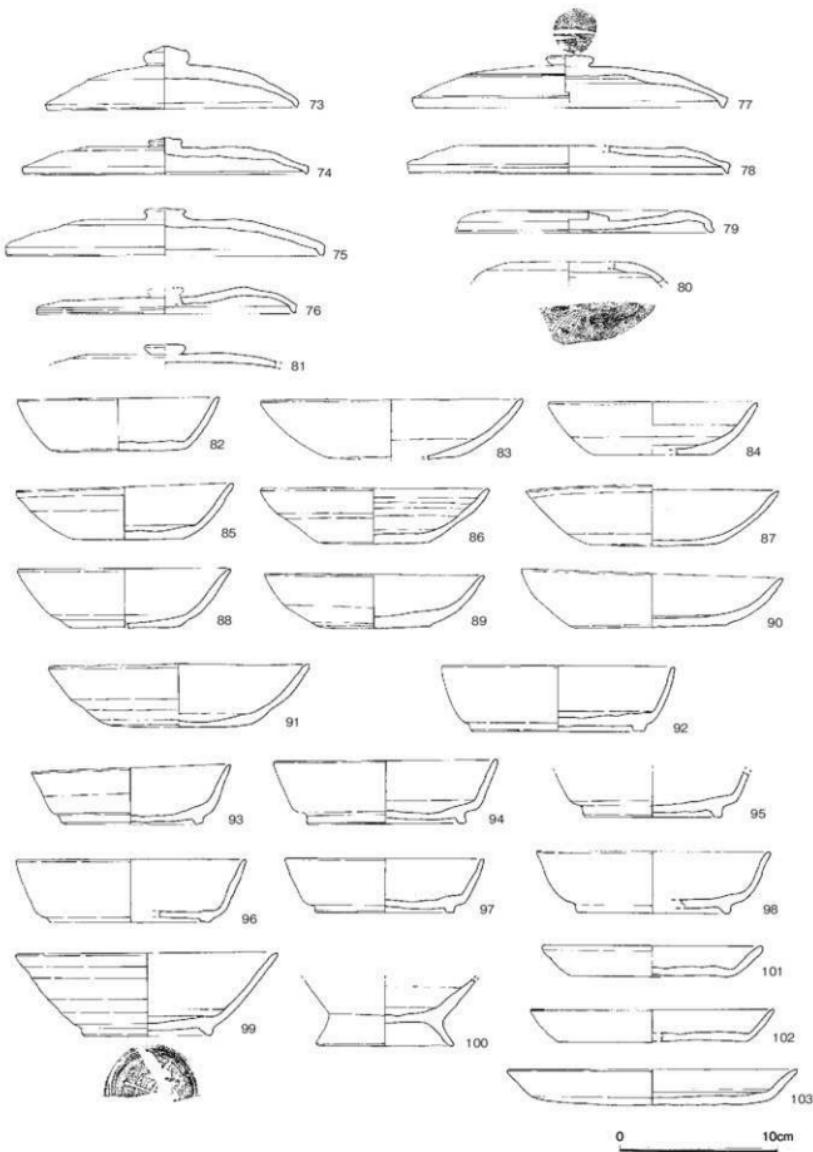
③ 1区中層出土遺物（図13、14）

中層からは奈良時代を中心とする遺物が出土した。瓦は全く出土せず、鉄滓も上部から少量出土しただけである。

73～81は須恵器の坏蓋である。つまみは宝珠形で、器高はやや高く、口縁端部は折り返して垂直に立てている。径16cm前後のもの（73・76・79）と径19cm前後のもの（74・75・78）に分けられる。76・79は焼け歪みがひどい。77はつまみの天井部に2本の短沈線がある。ヘラ記号か。80にはヘラ記号が施されている。

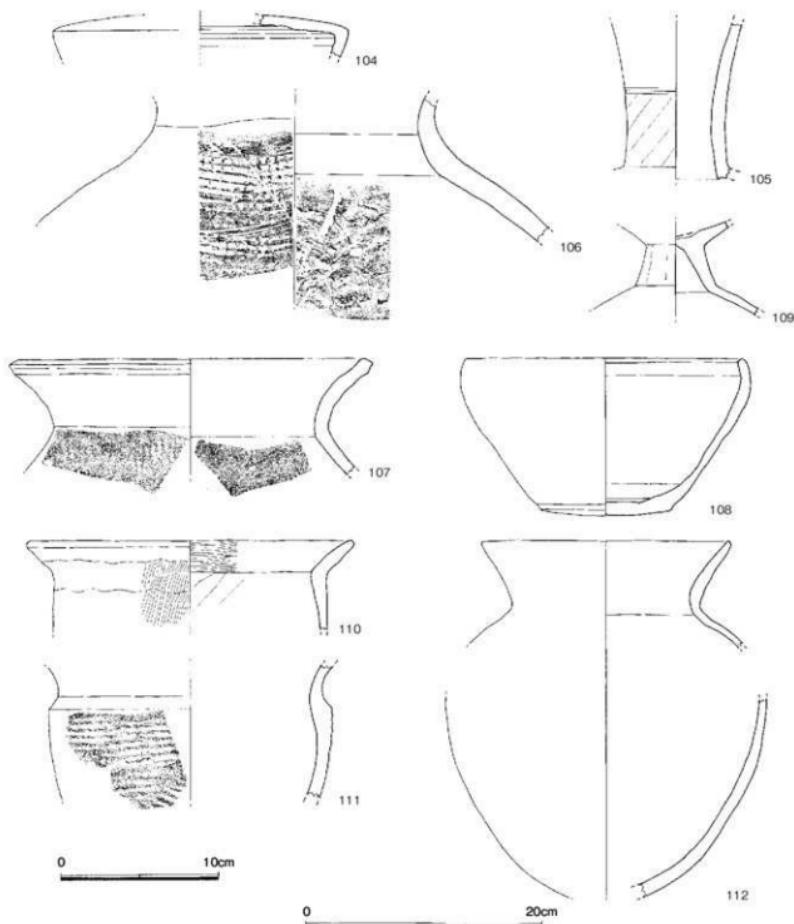
82は須恵器の坏で、83～91は土師器の坏である。いずれも底部ヘラ切りで体部はヨコナデ仕上げである。口径13cm前後のもの（82・84・85・88・89）と16cm前後のもの（83・87・90・91）がある。92～98は須恵器の高台付椀、99は土師器の高台付椀である。全体の器形は、高台は底部端よりやや中側に付き、断面台形を呈して低い。体部はわずかに丸味を帯びている。須恵器は口径12cm強のもの（93・97）と15cm弱のもの（92・94・96・98）があり、土師器の1点は口径16.5cmとやや大きい。99には「×」のヘラ記号がある。100も高台付椀であるが、高台は開いて高い。体部は直線的に伸びている。上層遺物と同形態のもので、このタイプはこの1点だけである。101～103は皿で、101・103は土師器、102は須恵器である。

104・105は須恵器の長頸壺である。104は両面とも回転ナデ調整、105はナデ調整である。106・107は須恵器の甕で、106は調整が明瞭ではなく、外面は平行タタキか。内面は当て具痕とカキ目状のものがわずかに確認できる。口径22.8cmを測る。107の外面は格子目タタキで、内面は同心円文の当て具である。108は土師器の鉢で、口径17.6cm、器高10cmを測る。ミガキに近いナデ仕上げであ



図V-13 谷1区中層出土遺物実測図1 (1/3)

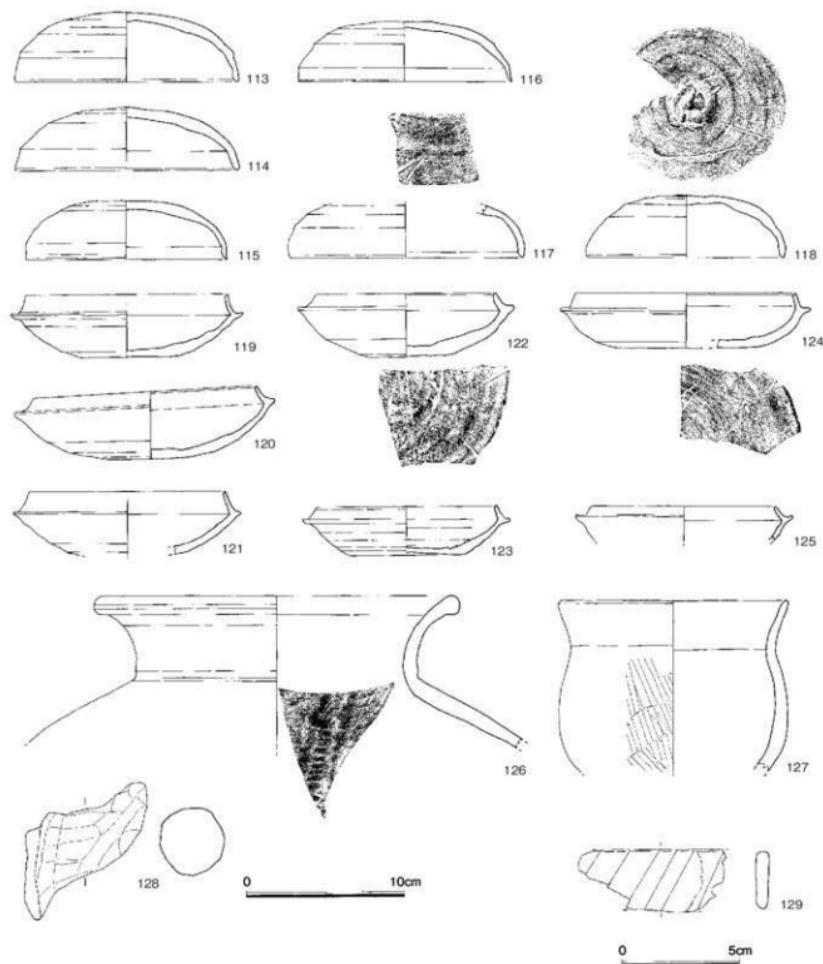
る。109は土師器高環で、筒部は短い。縦方向のヘラケズリで仕上げている。110～112は土師器の甕で、110は外面胴部と内面口縁部にハケメを施し、胴部内面はヘラケズリである。口径20.6cmを測る。111は胴部外面に平行タキを施している。内面は摩滅のため明瞭ではなく、當て具であろうか。112は口径21cm、推定器高31cm前後を測る。丸底で、ほぼ全面ナデで仕上げている。



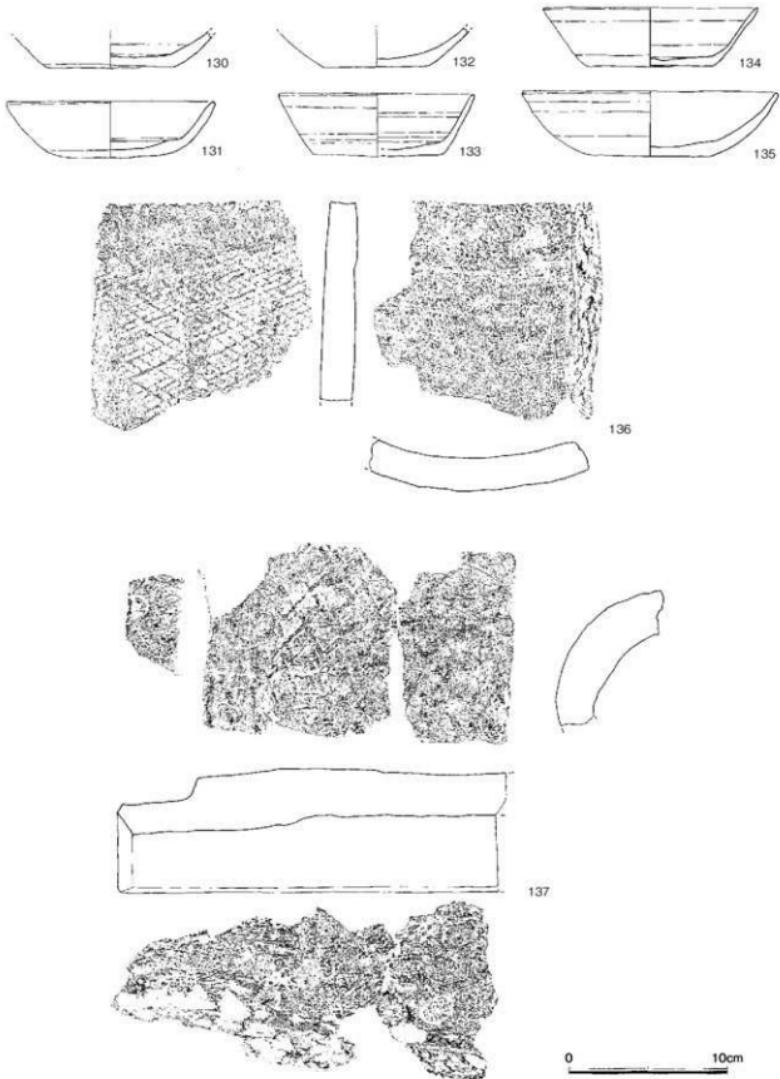
図V-14 谷1区中層出土遺物実測図2 (1/3, 1/4)

④ 1区下層出土遺物(図15)

113～118は須恵器の坏蓋で、口径12.6～14.0cm、器高3.4～4.4cmを測る。113は受け部と体部の境に明瞭な段を有し、口径・器高ともに最も大きい。他は受け部と体部の境は明瞭ではない。117・118にはヘラ記号がある。119～125は須恵器の坏身で、口径11.2～14.1cm、器高3.1～4.5cmを測る。



図V-15 谷1区下層出土遺物実測図 (1/3、1/2)



図V-16 その他の谷1区出土遺物実測図 (1/3)

119・121は受け部がやや長く、120・124は口径が大きい。123・125は受け部が短く、口径も小さい。122・124にはヘラ記号がある。126は須恵器の甕で、口径23.0cmを測る。胴部内面に当て具痕がかすかに確認できるが、両面とも自然釉が付着しているため、不明瞭である。127は土師器の甕で、口径14.5cmを測る。128は土師器の甕の把手。

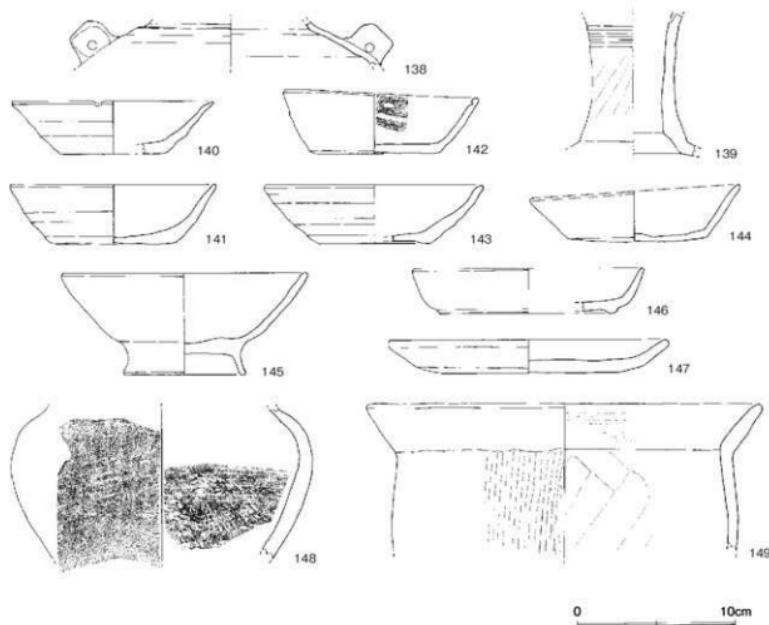
129は木製品である。1区北半の下層は粘質土と砂層の互層から成っているが、水分を多く含んでおり、自然遺物が残存している。その多くは自然木であるが、木の切りかす類が少量出土している。それ以外の木製品はこの1点である。木材は不明である。幅2.7cm、厚さ6mm、現存長さ6.3cmを測る。一見刀状の本体に6本の斜線を線刻している。線刻を施した工具はかなり鋭利な刃物である。各線刻間の距離は不統一である。

⑤その他の谷1区出土遺物(図16)

壁面出土のものや、出土層位不明のものである。130～135は土師器の坏で、口径12.4～16.1cm、器高3.6～4.1cmを測る。底部と体部の境が明瞭なもの(133・134など)と不明瞭なもの(131・135など)がある。136・137は瓦である。136は平瓦で、タタキは目の細かい格子目タタキ、137は丸瓦で、タタキは目の大きな格子目である。両方とも内面にはあて布の痕跡が残る。

⑥谷2区出土遺物(図17)

2区では1区寄りでは比較的遺物量が多かったが、3区寄りの西半から遺物の出土量が激減した。

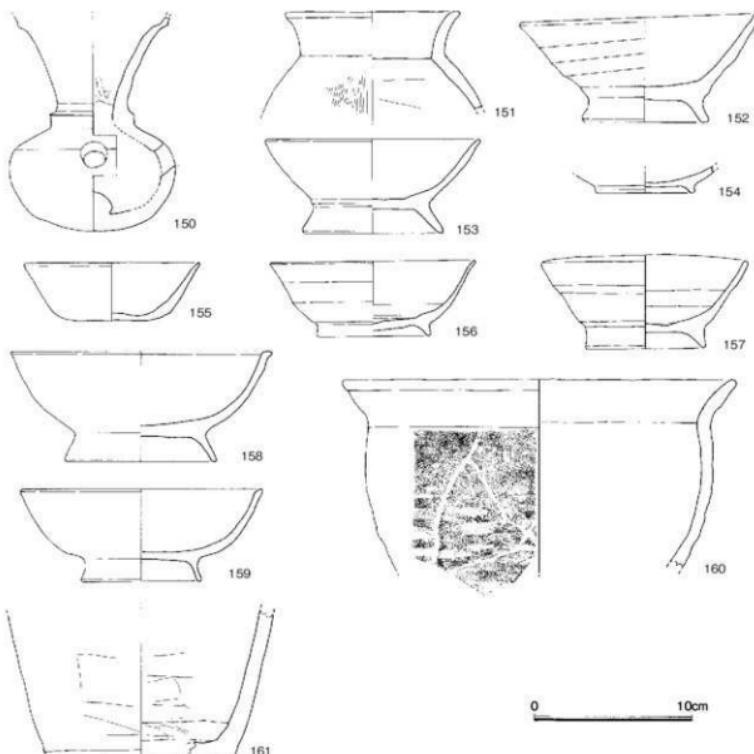


図V-17 谷2区出土遺物実測図(1/3)

138は須恵器の壺で、把手を有する。把手は2箇所と思われる。139は長頸壺の頸部である。両面とも回転ナデで仕上げているが、外面にしづり痕が残る。140～144は土師器の壺で、口径12.2～13.8cm、器高3.3～4.1cmを測る。すべて底部と体部の境は明瞭である。142の体部内面には米粒大の圧痕がある。145は土師器の椀で、器高6.4cm、口径15.5cmを測る。高台の高さは1.5cmと高い。146・147は土師器の皿で、146は低い高台を有する。147は口径17.6cmと大きい。148は土師器の壺で、外面にタタキ、内面に当て具痕を有しているが、摩滅のため不明瞭である。149は土師器の甕である。

⑦谷3～5区出土遺物（図18・19）

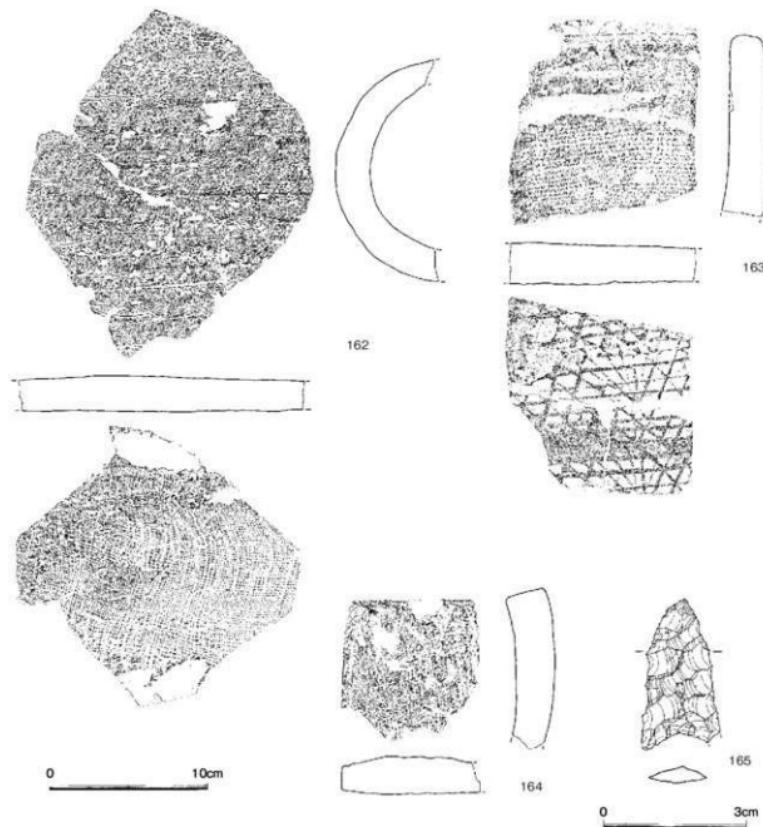
谷3～5区は遺物の出土量が極端に少ない。5区以西の表採遺物を含めても浅いコンテナ2箱に満たない。150は須恵器の壺で、推定器高約14cm、推定口径約11cmを測る。151は口径11cmを測る土師器の甕である。152・153・156・157・159は土師器の椀で、154は高台が低く、他は1cm以上の高台を有している。後者の内、159は丸味を帯びた体部であるが、他は概ね直線的な体部である。口径は



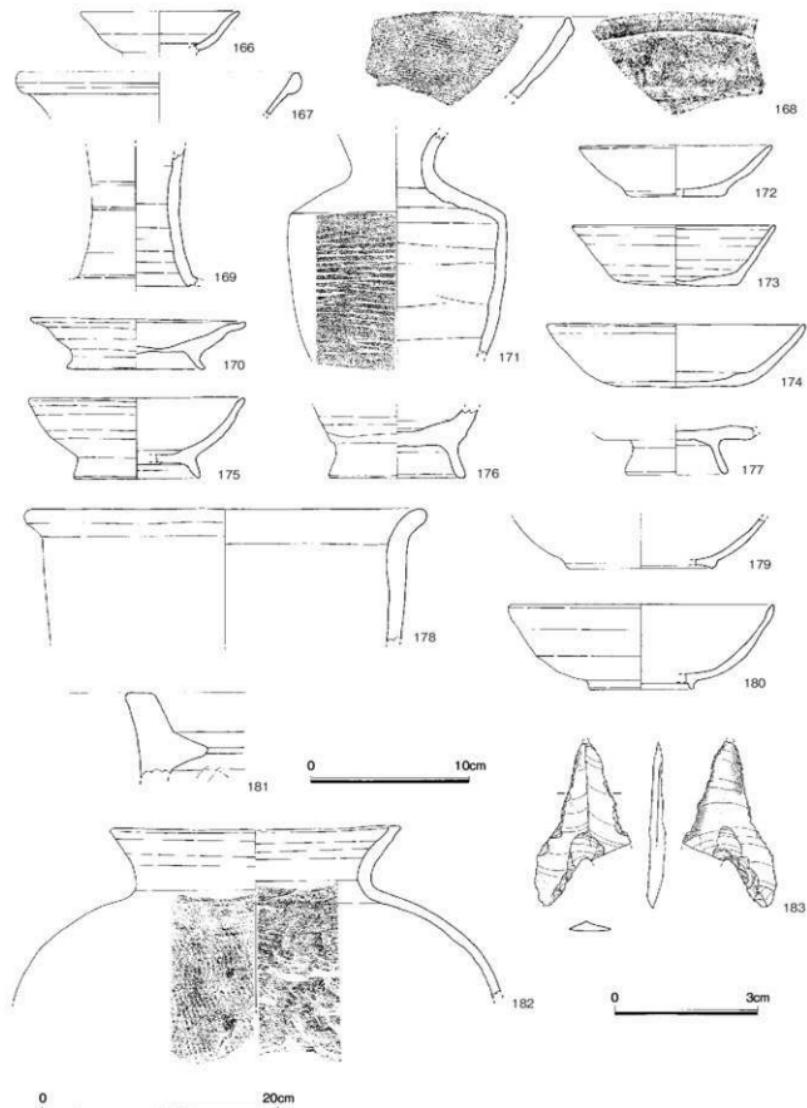
図V-18 谷3～5区出土遺物実測図1 (1/3)

12.9~16.3cmと幅が大きい。155は土師器の坏で、口径11.0cm、器高3.6cmを測る。158は黒色土器A類で、口径16.3cmを測る。外面はミガキ、内面はナデ・ヨコナデで仕上げている。体部はやや丸味を帯び、口縁端部は外に摘み出している。154は緑釉陶器の椀である。胎土は白色を呈し、精良である。釉調は黄色味の強い黄緑色で、焼きはやや軟質ぎみである。160は土師器の甌で、外面に平行タタキの痕跡が認められる。161は須恵器の壺で、両面とも工具によるナデで仕上げている。

162~164は瓦である。162は丸瓦で、外面はケズリの後ナデ、内面は布痕である。163は平瓦で、外面は鳥足状のタタキ、内面は布痕である。164は平瓦で、外面はナデ、内面は布痕である。165は黒曜石製の石鎧で、片脚を欠失する。長さ3.2cm、幅1.7cm、厚さ3.5mmを測る。両面とも長い押圧剥離をていねいに施している。



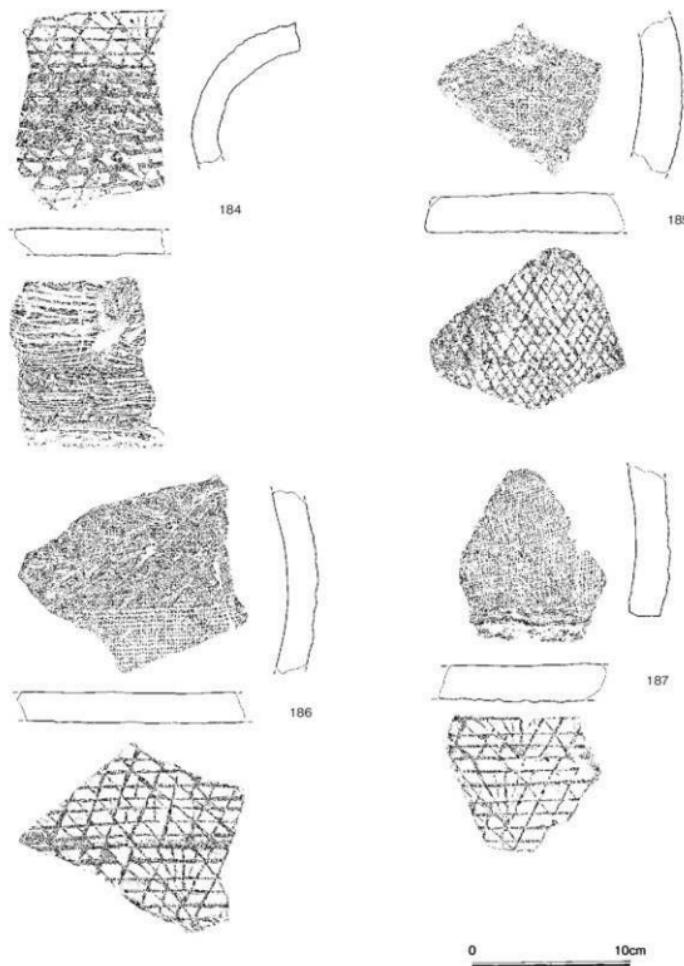
図V-19 谷3~5区出土遺物実測図2 (1/3, 1/1)



図V-20 その他の谷出土遺物実測図1 (1/4, 1/3, 1/1)

⑧その他の谷（包含層）出土遺物（図20・21）

表採のもの、雨で流失し出土地不明のもの（流土）の内、大きな破片のもの・重要性の高いものを取り上げた。166は現代の穴から出土した白磁碗で、口径10cmを測る。釉調は灰白色で、素地は明オーリーブ灰色を呈する。167は玉縁口縁の白磁で、口径18cmを測る。168は瓦質土器の鉢である。170は



図V-21 その他の谷出土遺物実測図2 (1/3)

流水内から出土した土師器の台付皿。171は須恵器の壺で、外面は平行タタキのままで、内面は工具によるケズリの後ナデで仕上げている。172～174は土師器の壺で、法量は様々である。175・176は土師器の椀もしくは鉢である。177は高台付壺か。178は土師器の甕で、外面はヨコナデで仕上げている。179・180瓦器椀で、180は口径16.8cm、器高5.4cmを測る。両面ともていねいな回転ナデで仕上げている。181は滑石製石鍋の口縁部である。182は須恵器の甕で、口径14.8cmを測る。口縁部は両面ともヨコナデ、胴部外面は格子目タタキ、内面は同心円当て具である。183は黒曜石製石鎌である。剥片素材を使用している。両面に使用痕らしき微細剝離が観察できる。あるいは刃器として利用した後に石鎌に転用したものかも知れない。

184～187は瓦である。184は丸瓦で、外面は斜格子タタキであるが、端部近くは鳥足状を呈している。内面は布目痕であるが、かなり目が粗い。185は平瓦で、外面は目の細かい斜格子タタキ、内面は目が細かい布痕である。186は平瓦で、外面は斜格子タタキで、一部が鳥足状を呈している。内面は一部に布目痕が強く残っているが、大半は痕跡が薄。187も平瓦で、一部が鳥足状を成す斜格子タタキを施している。

5 まとめ

第41次調査で検出したのは、谷の中にたまたま、あるいは捨てられた遺物のみで、直接的な構造は検出できなかった。出土した遺物は、①縄文時代の石器、②7世紀～平安時代の遺物、③中世以降の遺物である。このうち①・③はごく少量の遺物が混在しているのみで、遺物の大半は②である。この時期の遺物も、包含層の状況が時期によって異なっているため、最も基準となる谷1区の包含層の各層別にまとめる。

最も下の層は腐葉土層（最下層Ⅰ）と粗砂を中心とする砂層（最下層Ⅱ）であるが、この層はⅠ区のみしか存在しない。最下層Ⅱの状況は水が流れる状況を示し、Ⅰの状況は淀んだ状況を示しているが、とともに須恵器九州編年のIV期の須恵器を包含している。出土した須恵器は壺と甕が大半であるが、壺は完形に近いものが多く、この近くもしくは上流に生活址があったことを窺わせるが、その場所は明確ではない。

下層は黒色の粘質土を主体とする層で、一部砂を含んでいる。すでに當時水が流れる状況ではなかったを考えられるが、依然やや深い谷の形状を成している。出土遺物はやはりIV期～V期の須恵器が主体である。土器以外の遺物は殆ど出土していない。

中層は砂を主体とする互層と一部粘土層である。この時期の谷の形状は底面がかなりフラットとなっているが、特に谷の中心部に溜まっている砂を主体とする互層は水が流れやすい時期であったと考えられる。奈良時代の土師器・須恵器が出土する。量は少ないものの鉄滓も出土している。

上層は厚い褐色の砂混じり土であるが、1区の途中から東側にはこの下に薄い整地層がある。2区以東では、この層の下面および上面はほぼフラットな層を成しているが（図3）、4区の土層断面では上層もレンズ状の堆積である。2区より西側はこの時期には依然谷の形状を成していることが分かる。上層から出土した遺物のうち、目立つのは瓦と鉄滓である。その出土位置は、概ね鉄滓が下部から出土している。土器は平安時代前半期のものが出土している。

S X 0 1がこれらのどの層と時期を一にするのか検討する。S X 0 1は、本文中で述べたように製鉄の際に捨てられた遺物群であり、製鉄址自体は北側にあるものと考えられる。S X 0 1中から出土しているのは8世紀代から10世紀前半頃の土師器・須恵器・瓦であるが、S X 0 1は北側の高い方から流れたように堆積しており、調査はこの層ごとに掘りきれなかったため、異なる層の遺物がS

X 01 中に含まれる。SX 01 の下層及びSX 01 直下の土器を見ると、8～9世紀の土器を含んでいるが、瓦を全く含んでいない。この状況から見るとSX 01 は瓦の前の時期の平安時代初め頃と考えるのが至当であろうか。

出土した瓦は、当調査区の東に隣接する第31次調査区で検出した瓦窯址から出土した瓦と同じタイプである。瓦は谷5区でも破片が出土しているが、第31次調査区の瓦窯址で焼け損じたものをここに捨てたとも考えられるが、その距離（谷5区では100m近い）を考えると、第41次調査区側にも窯址があったと考えるのが自然であろう。第31次調査区の瓦窯址は南側の丘陵斜面に築かれているが、この丘陵斜面は当調査区にも続いている。そのほとんどが現代の用水路によって破壊されており、残った斜面からは痕跡を見つけることが出来なかった。瓦窯址と出土瓦については第31次調査の報告に譲りたい。

元岡桑原遺跡群には、ほぼ系統をたどれる前方後円墳があり、それに統いて多くの後期古墳群があり、さらにそれに統くように飛鳥時代後半から平安時代に至る一連の遺構群がある。その主なものは下記の図に記したとおりである。その内容は製鉄・製瓦等の生産に依拠した遺跡であるが、特殊な祭祀遺物群や「大寶元年」銘を始めとする多くの木簡・鉢帯などの重要遺物が数多く出土しており、その重要性は高い。今後今山遺跡で発見された10世紀代のドック等、周辺地域も含めた総体的な検討を加えていかなければならない。



図V-22 元岡桑原遺跡群古代関連遺構出土地点位置図

表V-1 出土遺物一覧表

図	番号	出土地点	層位	遺物の種類	形態	高さ	口径(径)	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考	
6	1	SX001周辺		埴造器	壺		16.7	カギ目・ヨコナデ	ヨコナデ	3mm以下の中白色粒少量	淡赤褐色～灰赤褐色	良好		
6	2	SX001西半	上層	埴造器	壺			ロコロナデ	ナデ	2mm以下の中白色粒やや多量	灰褐色	良好		
6	3	SX001周辺	最上層	土師器	壺	2.1	14.8	摩減	摩減	微細な粒少量	褐色	良好		
6	4	SX001周辺	最上層	土師器	壺	1.5	14.0	ていねいなナデ	ていねいなナデ	微細な粒少量	褐色	良好		
6	5	SX001-F2区	中層	土師器	壺			ヨコナデ・ハラカタ	ナデ	1mm以下の中白色・金黄色	褐色(赤に近い)	良好	東中央に焼成	
6	6	SX001-Y1区	中層	土師器	壺	2.3	17.1	ていねいなナデ	ていねいなナデ	付やや多量	褐色	良好	東中央に焼成	
6	7	SX001西側	砂層	土師器	壺			ナデ・ハラカタ	ナデ	2mm以下の中白色・赤色粒多量	褐色～灰褐色	良好		
6	8	SX001-B3区		土師器	壺			ヨコナデ・奈良	ナデ	1mm以下の中白色・赤色粒多量	淡褐色	良好		
6	9	SX001		土師器	壺	3.9	12.2	ヨコナデ	ナデ	微細な粒少量	褐色	良好		
6	10	SX001-D2区		土師器	壺			ナデ・ハラカタ	ナデ	1mm以下の中白色・赤色粒少量	褐色(赤に近い)	良好		
6	11	SX001-Z1区	上層	土師器	壺	3.6	14.3	ヨコナデ・ハラカタ	ヨコナデ	2mm以下の中白色・赤色粒少量	淡褐色	稍不良		
6	12	SX001-D3区	1.F	土師器	壺			摩減	摩減	1mm以下の中白色粒やや多量	褐色	良好		
6	13	SX001-A3-4区		土師器	壺			摩減	摩減	微細な粒少量	褐色	稍不良		
6	14	SX001-D3区	上層	土師器	台付鉢			ヨコナデ	ヨコナデ	微細な粒・企念な少量	淡褐色	良好		
6	15	SX001-西半	上層	土師器	壺			ナデ	ナデ	2mm以下の中白色・赤色粒少量	褐色～黒褐色	良好	見込みに數本の沈面	
6	16	SX001-B3区		埴造器	壺	5.8	15.4	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	3mm以下の白色粒少量	黃褐色	良好		
6	17	SX001-A3区		埴造器	壺			回転ナデ	回転ナデ	2mm以下の中白色・黑色粒多量	灰白色	良好		
6	18	SX001	2層(上層開人)	埴造器	鉢		30.0	回転ナデ	回転ナデ	3mm以下の中白色粒多量	褐色	良好		
6	19	SX001-B3区		埴造器	壺			回転ナデ・ハラカタ	ナデ	2mm以下の中白色・白色粒	褐色	良好		
6	20	SX001西半	上層	埴造器	壺		46.2	平行タキナ・横	当て貝・ヨコナデ	6mm以下の中白色・石英やや多量	褐色	良好		
6	21	SX001-Z1区		土師器	壺口		7.2			4mm以下の中白色粒多量	褐色～黒褐色	良好		
6	22	SX001-B3区	上層		羽口		7.8			大粒砂粒多量	に赤い黃褐色～灰色	良好		
7	23	SX001		丸瓦				ナデ	布目	2mm以下の中白色・褐色粒やや多量	褐色～黃褐色	難しい	やや土師質	
7	24	SX001		砾石				砂岩質						
8	25	北台地	底の下	埴造器	壺			ナデ	ナデ	2mm以下の白色粒やや多量	褐色	良好		
8	26	SX001の下	SX001の下	土師器	壺	4.1	12.0	摩減	摩減	2mm以下の白色・赤色粒少量	褐色	稍不良		
8	27	北台地	底の下	埴造器	壺	6.3	14.5	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の白色粒少量	褐色	良好		
8	28	北台地	底の下	埴造器	壺			回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の白色粒少量	褐色	良好		
8	29	SX001	底の下	埴造器	灰瓦跡	13.3	23.8	回転ナデ	回転ナデ	2mm以下の白色・黑色粒少量	灰褐色～暗褐色	良好		
8	30	北台地	底の下	埴造器	壺			回転ナデ	回転ナデ	4mm以下の中白色粒少量	褐色	稍不良		
8	31	SX001-A3区	底の下上	埴造器	壺			平行タキナ・横	ナデ	3mm大の白色・黑色粒多量	ヨコナデ・ハラカタ	難不		
8	32	SX001A	Z	埴造器	壺		18.0	平行タキナ・横	当て貝・キカツ	3mm大の白色・黑色粒多量	褐色～青褐色	良好	口縁両面、肩部に自然輪	
9	33	Aトレンチ	上層	土師器	壺	3.9	18.8	ヨコナデ・ハラカタ	ヨコナデ	1mm以下の中白色・金黄色やや多量	淡褐色	良好	外面覆付着	
9	34	Aトレンチ	上層	埴造器	壺			15.0	回転ナデ	回転ナデ	2mm以下の中白色粒やや多量	褐色	良好	
9	35	Aトレンチ	上層	埴造器	壺	4.2	14.4	ヨコナデ・ハラカタ	ヨコナデ	3mm以下の中白色粒・石英少量	褐色～暗褐色	稍不良		
9	36	Aトレンチ	上層	埴造器	壺			回転ナデ	回転ナデ	3mm以下の白色粒多量	褐色	良好		
9	37	Aトレンチ	中層	埴造器	台付鉢			回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の白色粒・石英少量	褐色	良好		
9	38	Aトレンチ	上層	土師器	壺			ナデ	ナデ	3mm以下の白色粒・石英少量	褐色	良好		
9	39	Aトレンチ	下層	土師器	高环	9.6	14.3	摩減・ハラナデ	摩減・ハラナデ	4mm以下の白色・石英少量	褐色	良好		
9	40	Aトレンチ	上層		石繩			ナデ	ナデ	2mm以下の白色粒・石英少量	褐色	良好		
9	41	Aトレンチ	下層	石繩品	おはじき状	1.5	3.5	砂岩質		1mm以下の白色・白色粒やや多量	褐色	良好		
9	42	Aトレンチ	上層	丸瓦				斜格子タキ	布目	4mm以下の白色・石英少量	褐色	良好		
9	43	Aトレンチ	気泡上層	丸瓦				大斜格子タキ	布目	2mm以下の黑色・白色粒多量	褐色	難しい		
10	44	B1区	上層	埴造器	片口鉢		30.0	回転ナデ	回転ナデ	3mm以下の白色粒やや多量	褐色	良好		
10	45	B1区	上層	土師器	壺?			摩減	摩減	1mm大の白色粒・石英少量	淡褐色	稍不良		
10	46	B1区	上層	土師器	鉢?			ヨコナデ	ヨコナデ	微細な粒・金黄色ごく少量	褐色	良好		
10	47	B1区	最上層	土師器	壺	3.1	13.0	ヨコナデ・ハラカタ	ヨコナデ	微細な白色・金黄色少量	褐色	良好	見込みに數本の沈面	
10	48	B1区	上層	土師器	壺	3.8	11.4	ヨコナデ・ハラカタ	ナデ?	3mm大の白色粒・赤色粒やや多量	淡黃褐色	良好		
10	49	B1区	上層	土師器	壺	3.5	12.0	摩減	摩減	2mm大の白色粒・石英多量	明赤褐色	良好		

ID	番号	出土地点	層位	遺物の種類	器形	高さ	D(直)径	外輪調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考
10	50	B1区	上層	埴輪器	环身	3.7	14.8	回転ナデ・ハラ 切り	回転ナデ	砂粒はとんぐ含まれず精良	淡灰色~淡褐色	稍不良	
10	51	B1区	上層	土師器	环	4.4	14.0	摩滅	摩滅	微細白色粒少量	赤みを帯びた黄褐色	稍不良	
10	52	B1区	上層	土師器	跡?			ヨコナデ	ナゲ	微細粒粉少量	内灰、外にびき黄色	良好	
10	53	B1区	上層	埴輪器	环身	3.5	13.6	回転ナデ・ハラ 切り	回転ナデ	2mm大白色粒少量	灰白色	良好	
10	54	B1区	最上層	土師器	跡			ナガ?	ヨコナデ?	微細白色粒・全青母少量	橙色	良好	
10	55	B1区	上層	土師器	楕			ヨコナデ	ヨコナデ	2mm以下の大白色粒・全青母少量	淡明褐色	良好	
10	56	B1区	上層	土師器	楕			ヨコナデ	ナゲ?	1mm以下の大白色粒・右青少量	淡明褐色	良好	
10	57	B1区	上層	土師器	楕			ヨコナデ	ナゲ?	2mm以下の大白色粒や少量化	明褐色	稍不良	
10	58	B1区	上層	土師器	楕	6.0	13.3	摩滅	摩滅	1mm以下の大白色粒や少量化	赤みを帯びた黄褐色	稍不良	
10	59	B1区	上層	土師器	楕			摩滅	摩滅	2mm以下の大白色粒・全青母少量	明褐色	良好	
10	60	B1区	上層	埴輪器	台付鉢	3.0		ていねいなナデ	ていねいなナデ	微細粒粉少量	灰褐色	良好	
10	61	B1区	上層	埴輪器	环蓋	2.2	19.0	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	微細白色粒少量	淡灰色	良好	
10	62	B1区	上層	土師器	脚付鉢	8.5	18.4	回転ケ・スリ・ナ ゲ	回転ケ・スリ・ナ ゲ	砂粒を帯びた黄褐色	良好		
10	63	B1区	上層	土師器	台付 跡?			ヨコナデ?	ナゲ	1mm以下の大白色粒・右青 多量	橙色	良好	
10	64	B1区	上層	土師器	組	2.0	14.1	回転ナデ・ハラ 切り	ナゲ	1mm以下の大白色粒や少 量化	赤みを帯びた黄褐色	良好	
10	65	B1区	上層?	埴輪器	环	3.6	12.0	回転ナデ	回転ナデ	2mm以下の大白色粒少量	灰褐色	良好	
10	66	B1区	最上層	土師器	跡	8.3	16.8	ナゲ	ヨコナデ	微細白色粒・全青母少量	明褐色	良好	
11	67	B1区	上層	埴輪器	葉			筋目タキナ 横ナデ	当て共	3mm大の白色・黒色粒多 量	淡灰色~暗灰褐色	良好	
11	68	B1区	上層	埴輪器	瓦耳鉢	20.4	25.0	横ナデ	横ナデ・ナゲ	5mm大の白色粒や少 く、微細黑色粒少量	灰褐色~灰黑色	良好	
11	69	B1区	上層	石器				ケタリ	ケタリ	2mm以下の大白色粒多量	青褐色	良好	
12	70	B1区	上層	丸瓦				斜格子タキナ	布目	2mm以下の大白色粒や少 量化	青褐色	良好	
12	71	B1区	上層	平瓦				斜格子タキナ	布目	3mm以下の大白色・黒色 多量	青褐色	良好	
12	72	B1区	上層	丸瓦				斜格子タキナ	布目	3mm以下の大白色・赤色 少量化	に赤い青褐色	相違い・土被質に近い	
13	73	B1区	中層	埴輪器	环蓋	4.0	15.8	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	微細白色粒多量	灰白色	不良	
13	74	B1区	中層	埴輪器	蓋	2.3	18.0	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	微細白色粒少量化・精良	淡灰色	良好	
13	75	B1区	中層	埴輪器	蓋	3.0	19.8	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	微細白色粒少量化	淡灰色	良好	
13	76	B1区	中層	埴輪器	蓋		16.3	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	3mm以下の大白色・右青 少量	灰褐色	良好	
13	77	B1区	中層	埴輪器	蓋			回転ナデ	ヨコナデ	2mm以下の大白色・右青 少量	灰褐色	良好	
13	78	B1区	中層	埴輪器	蓋		20.0	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	微細白色粒や多量	灰褐色	良好	
13	79	B1区	中層	埴輪器	环蓋	1.4	16.2	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	微細白色粒多量	淡灰色	相違	
13	80	B1区	中層	埴輪器	环蓋			回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の大白色・全青 母少量	灰褐色	良好	
13	81	B1区	中層	埴輪器	蓋			摩滅	摩滅	1mm以下の大白色・全青 母少量	橙色	相違	
13	82	B1区	中層	埴輪器	环	3.3	12.8	内輪調整	回転ナデ	微細白色粒・全青母少量	灰褐色	良好	
13	83	B1区	中層	土師器	环			ヨコナデ・ハラ 切り	ヨコナデ	1mm以下の大白色・全青 母等少量	橙色	良好	
13	84	B1区	中層	土師器	环	3.4	13.2		ヨコナデ	1mm以下の大白色・全青 母等少量	橙色	良好	
13	85	B1区	中層	土師器	环	3.7	13.6	ヨコナデ・ハラ 切り	ヨコナデ?	微細粒粉・全青母多量	橙色	良好	
13	86	B1区	中層	土師器	环	3.6	14.4	ヨコナデ・ハラ 切り	ヨコナデ	1mm以下の大白色・全青 母等少量	淡褐色	良好	
13	87	B1区	中層	土師器	环	3.9	15.8	ヨコナデ・ハラ 切り	ヨコナデ?	微細粒粉・全青母等少量	橙色	相違	
13	88	B1区	中層	土師器	环身	3.8	13.4	ヨコナデ・ハラ 切り	ヨコナデ?	微細粒粉・全青母等少量	淡褐色	相違	
13	89	B1区	中層	土師器	环身	3.6	13.8		回転ナデ	微細粒粉・全青母多量	淡褐色	良好	
13	90	B1区	中層	土師器	环	3.9	16.4	ヨコナデ・ハラ 切り	ヨコナデ	3mm大の白色粒・全青 母等少量	橙色	良好	
13	91	B1区	中層	土師器	环	3.9	16.4	ヨコナデ・ハラ 切り	ナゲ?	3mm大の白色粒・全青 母少量	橙色	相違	
13	92	B1区	中層	埴輪器	楕	4.0	14.6	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ・ナゲ	3mm以下の大白色・右青 少量化	淡灰色~灰褐色	良好	
13	93	B1区	中層	埴輪器	楕	3.9	12.4	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	3mm以下の大白色・右青 少量化	灰褐色	良好	
13	94	B1区	中層	埴輪器	楕	4.1	14.0	回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ・ナゲ	3mm以下の大白色・右青 少量化	黑褐色~灰褐色	良好	
13	95	B1区	中層	埴輪器	楕			回転ナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	3mm以下の大白色・右青 少量化	灰褐色	相違	
13	96	B1区	中層	埴輪器	楕	4.0	14.4	ヨコナデ・ハラ カタリ	回転ナデ	微細白色粒少量・精良	灰褐色	良好	

ID	番号	出土地点	層位	遺物の種類	器形	高さ	D(I)H(II)	外面調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考	
13	97	毎1区	中層	瓶底器	楕	3.4	125	回転ナデ・ハラケリ	回転ナデ・ナデ	3mm以下の中白色・右薄 やや多量	灰黒色～灰褐色	良好		
13	98	毎1区	中層	瓶底器	楕	3.9	147	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	3mm以下の中白色・右薄 やや多量	灰白色	稍不良		
13	99	毎1区	中層	土師器	楕	5.1	165	ヨコナデ・ハラ ケリ	ヨコナデ	微細な粒ごく少量、粗且 き	淡黄褐色	良好		
13	100	毎1区	中層	土師器	楕			ヨコナデ	ナデ	3mm以下の中白色等や や多量	微細な色・赤色等多量	良好		
13	101	毎1区	中層	土師器	楕	2.0	13.9	回転ナデ	ナデ	微細な色・赤色等多量	赤みを帯びた褐色	稍不良		
13	102	毎1区	中層	瓶底器	楕	2.1	15.3	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	3mm以下の中白色・右薄 やや多量	灰褐色	良好		
13	103	毎1区	中層	土師器	楕	2.3	18.2	ヨコナデ・ハラ ケリ	ヨコナデ	1mm以下の中白色・全芸 母等少量	明褐色	良好		
14	104	毎1区	中層	瓶底器	長脚壺			回転ナデ	回転ナデ	微細な粒やや多量	淡灰褐色	良好	自然釉付着	
14	105	毎1区	中層	瓶底器	長脚壺			横ナデ	横ナデ	1mm以下の中白色やや 多量	暗褐色	良好		
14	106	毎1区	中層	瓶底器	甌	22.8	横ナデ・タキタ ケ	横ナデ・タキタ ケ	当て目・ヨコナ デ	3mm大の中白色・右薄や や多量	赤みを帯びた黄 褐色	稍不良	瓶底器の器形	
14	107	毎1区	中層	瓶底器	甌			横ナデ・タキタ ケ	横ナデ	1mm以下の中白色・黑色 等少量	灰色	良好		
14	108	毎1区	中層	土師器	鉢	10.0	17.6	ナデ	ナデ	2mm以下の中白色・全芸 母等や多量	明褐色	良好		
14	109	毎1区	中層	土師器	高环			ヨコナデ	ヨコナデ	微細な黄褐色等少 量	明褐色	不良		
14	110	毎1区	中層	土師器	甌	20.6	ハラメ・ヘラケ リ	ハラメ・ヘラケ リ	3mm以下の中白色・白色等 等少量	淡灰褐色～淡棕 褐色	良好			
14	111	毎1区	中層	土師器	甌	17.7	横ナデ・タキタ ケ	横ナデ・タキタ ケ	摩減	白色・赤色等多量	赤みを帯びた黄 褐色	良好		
14	112	毎1区	中層	土師器	甌	31	21.0	ナデ	ナデ	4mm以下の中白色多量	褐色	良好		
15	113	毎1区	最下層	瓶底器	環蓋	4.0	14.0	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	微細な色・赤色等多量	暗褐色	不良		
15	114	毎1区	最下層	瓶底器	環蓋	3.7	12.6	回転ナデ・ハラ ケリ	ナデ	2mm大白色粒少量	灰色	良好		
15	115	毎1区	最下層	瓶底器	環蓋	3.7	12.6	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	4mm石英質少量、微細 白色等多量	暗褐色	良好		
15	116	毎1区	最下層	瓶底器	環蓋	3.7	13.4	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	微細な粒少量	暗灰褐色	良好		
15	117	毎1区	最下層(鉢 附)	瓶底器	環蓋	3.8	14.8	回転ナデ・ハラ ケリ	ナデ	砂粒ほとんど含まず精 粒	灰色(大舟に自然 施)	良好	ヘア記号あり	
15	118	毎1区	最下層	瓶底器	環蓋	4.0	12.6	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	2mm以下の中白色等多量	淡灰褐色	稍不良	ヘア記号あり	
15	119	毎1区	最下層	瓶底器	身身	4.0	12.8	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	微細な白色粒多量	暗褐色	良好		
15	120	毎1区	最下層	瓶底器	身身	4.5	14.1	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	2mm大白色粒少量	灰色	良好		
15	121	毎1区	最下層	瓶底器	身身			回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	微細な白色粒少量	灰～褐色	良好		
15	122	毎1区	最下層	瓶底器	身身	4.0	11.2	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	4mm以下の中白色やや 多量	灰色	良好	ヘア記号あり	
15	123	毎1区	下層	瓶底器	身身	3.1	11.4	回転ナデ	回転ナデ	微細な色・白色粒多量	灰色	良好		
15	124	毎1区	最下層	瓶底器	身身	3.5	13.8	回転ナデ・ハラ ケリ	回転ナデ	微細な白色粒多量	灰色	良好	ヘア記号あり 0.(注)	
15	125	毎1区	下層	瓶底器	身身		11.8	回転ナデ	回転ナデ	微細な白色粒多量	灰～暗灰褐色	良好		
15	126	毎1区	下層	瓶底器	甌		23.0	回転ナデ	回転ナデ	回転ナデ・当て 2mm以下の中白色やや 多量	暗褐色	良好	自然釉付着	
15	127	毎1区	最下層	土師器	甌		14.5	横ナデ・ハラケリ	横ナデ・ハラ ケリ	回転前歯や多く含む ナ	灰～黑褐色	良好		
15	128	毎1区	下層	土師器	把手		14.5	ヨコナデ・ハラ ケリ	ヨコナデ	5mm大の白色粒多量	灰褐色	良好		
15	129	毎1区	下層	木製品								6本の崩落あ り		
16	130	(南壁)	(南壁)	土師器	环		2.7	ヨコナデ・ハラ ケリ		1mm以下の中白色・右薄 少量	橙色	良好		
16	131	(南壁)	(南壁)	土師器	环	3.6	13.1	ヨコナデ(摩 滅)				稍不良		
16	132	(南壁)	(南壁)	土師器	环			ヨコナデ	ナデ	1mm以下の中白色・金芸 母少量	淡黄褐色	良好		
16	133	(南壁)	(南壁)	土師器	环	4.1	16.1	ヨコナデ・ハラ ケリ	ヨコナデ	1mm以下の中白色・ごく 少	1mm以下の中白色・左薄 やや多量	良好		
16	134	(南壁)	(南壁)	土師器	环	3.7	13.5	ヨコナデ・ハラ ケリ	ヨコナデ	1mm以下の中白色・右薄 少量	橙色・黑色	良好		
16	135	(南壁)	(南壁)	土師器	环	4.0	12.4	ヨコナデ・ハラ ケリ	ヨコナデ	1mm以下の中白色・ごく 少量	暗褐色	良好		
16	136	調查区東端		平瓦				斜削子タキ	布目	3mm以下の中白色・右薄 やや多量	青灰色	良好		
16	137	調査区東端		丸瓦				斜削子タキ	布目	3mm以下の中白色・左薄 やや多量	灰色	良好		
17	138	毎2区	最上層	瓶底器	耳付壺			回転ナデ	回転ナデ		灰色	良好		
17	139	毎2区		瓶底器	長脚壺			回転ナデ	回転ナデ		暗褐色	良好		
17	140	毎2区		谷2区	土師器	环	3.3	12.8	回転ナデ	回転ナデ	1mm大の中白色・赤色 やや多量	黃褐色	良好	
17	141	毎2区		谷2区	土師器	环	3.4	13.0	回転ナデ	回転ナデ	微細な粒少含む ナ	橙色	良好	
17	142	毎2区		土師器	环	4.1	12.2	回転ナデ		微細な粒やや多量	暗褐色	良好		
17	143	毎2区		土師器	环	3.7	13.8	回転ナデ	回転ナデ	2mm大の中白色・赤色 やや多量	橙色	良好		

回	番号	出土地点	層位	遺物の種類	基形	高さ	口(底)径	外周調整	内面調整	胎土	色調	焼成	備考	
17	144	井25K	谷25K	土加器	环	2.5	13.3	回転ナデ	回転ナデ	微細な金雲母・赤色粒やや多量	黄赤褐色	稍不良	内面に墨状 黒斑、口縁部 墨斑	
17	145	井25K	谷25K	土加器	碗	6.4	15.5	摩減	ナデ?摩減	1mm以上の白色粒・赤色粒 やや多量	褐色	稍不良		
17	146	井25K	谷25K	土加器	脚付碗	2.9	14.4	回転ナデ	回転ナデ	1mm以上の白色粒・赤色粒 やや多量	褐色	良好		
17	147	井25K	谷25K	土加器	組	2.1	17.6	摩減	摩減	2mm以上の白色粒・赤色粒 やや多量	褐色	良好		
17	148	井25K	谷25K	土加器	垂			タタキ	当貝・回転ナデ	2mmの大の白色粒多量	外・黒褐色、内・褐色	良好		
17	149	井25K	谷25K	土加器	更		15.0	ナデ?ハケメ	ヨコナデ?ヘラ カタリ	3mm以下の大白色粒やや 多量	灰褐色~墨褐色	良好		
18	150	井30K	谷30K	娘窓器	罐	約14	約11	回転ナデ	回転ナデ	1mm以下の大白色粒少量	灰色	良好		
18	151	井41K	谷41K	土加器	甕		11.0	ハケメ・ナデ	ナデ?・ハケメ?ナ ド	2mm以下の大白色粒やや 多量	外・褐色、内・黒褐色	良好		
18	152	井41K	谷41K	土加器	碗	6.0	13.5	ナデ?ヨコナデ	ナデ?・ヨコナデ	4mm以下の白色粒多量	褐色	稍不良		
18	153	(谷41K)		土加器	碗	6.9	15.1	摩減	摩減	微細白色・赤色粒少量	赤みを帯びた黄 褐色	良好		
18	154	包含層	包含層	繩編陶器	碗					白色、稍丸	赤褐色がかった 墨褐色	良好		
18	155	井50K	谷50K	土加器	环	3.6	11.0	ナデ?ヨコナデ	ナデ?・ヨコナデ	3mm以下の大白色粒・石英 やや多量	褐色	良好	口縁内側に 墨斑	
18	156	包含層(奥)		土加器	碗	4.7	12.9	ヨコナデ?	ヨコナデ?	1mm以下の大白色粒やや 多量	褐色~始末褐色	良好		
18	157	包含層(奥)		土加器	碗	5.9	13.0	摩減	摩減	微細白色・白色粒やや 多量	浅褐色			
18	158	井55K	井55K	黑色土入A	碗	7.1	16.3	1.ギキ	ナデ?ヨコナデ	1mm以下の大白色粒少量	外・褐色、内・黑色	良好		
18	159	南トレント		土加器	碗	5.8	15.2	横ナデ?・ヘラ切 り	ナデ?	微細白色・赤色粒・金雲母 少量	洪褐色	良好		
18	160	A-Bトレンチ間		土加器	甕		24.8	タタキ・横ナデ	横ナデ?・摩減	3mmの大白色粒・石英 やや多量	黄褐色	良好		
18	161	Bトレンチ	Bトレンチ	娘窓器	垂			ナデ?	ナデ?	3mm以下の大白色粒少量	灰色	良好		
18	162	井50K		丸瓦				ナデ?+ナデ?	布目	4mm以下の大白色粒多量	青褐色	良好		
18	163	Bトレンチ	1層	平瓦						3mm以下の大白色・石英粒 多量	浅褐色	稍悪い		
19	164	Bトレンチ	1層	平瓦				ナデ?	布目	3mm以下の白色・石英粒 多量	青褐色	良好		
19	165	混合層	石贈							3mm以下の大白色・石英粒 多量	明るいオーブ	良好		
20	166	包含層	白磁	碗		16.0				灰白色	明るいオーブ	良好		
20	167	包含層	包含層	白磁	碗		18.0			灰白色・気泡多い	灰オーブ	良好		
20	168	包含層	包含層	瓦質	鉢			ハケメ?	ハケメ?	2mm以下の大白色粒やや 多量	灰白色	良好		
20	169	包含層	包含層	長颈瓶				回転ナデ?	回転ナデ?	2mm以下の大白色粒やや 多量	洪褐色	良好		
20	170	底土内	井11K	土加器	脚付碗	3.0	13.5	ヨコナデ?・ヘラ 切り	ヨコナデ?	2mm以下の大白色粒多量	褐色	良好		
20	171	包含層	包含層	娘窓器	繩編陶器					ヨコナデ?・ナ ギ	1mm以下の白色粒少量	褐色~に点々 小赤色	自然釉付着	
20	172	包含層	包含層	土加器	环	3.2	12.1	摩減(ナデ?)	摩減(ナデ?)	1mm以下の白色粒・赤色粒 やや多量	洪褐色から黄 褐色	良好		
20	173	底土内	(谷11K)	土加器	环	3.8	12.7	ヨコナデ?・ヘラ 切り	ヨコナデ?	1mm以下の白色粒ごく 少量	洪褐色	良好		
20	174	底土内	(谷11K)	土加器	环	4.1	16.2	ナデ?摩減	ナデ?摩減	1mm以下の大白色粒・金雲 母少量	褐色	良好		
20	175	包含層	包含層	土加器	碗	5.0	13.6	ヨコナデ?	ナデ?	微細な砂粒少量、粗良	浅褐色	稍不良		
20	176	包含層	包含層	高台跡				ヨコナデ?	ヨコナデ?	3mm以下の大白色粒・石英 多量	褐色	良好		
20	177	包含層	包含層	土加器	甕			ヨコナデ?	ヨコナデ?	1mm以下の白色粒やや 多量	褐色	稍不良		
20	178	包含層	包含層	土加器	更			ヨコナデ?	ヨコナデ?	3mm以下の大白色粒等多 量	洪褐色	良好		
20	179	包含層	包含層	瓦器	碗			回転ナデ?	回転ナデ?	微細な砂粒ごく少量	灰白色	良好		
20	180	包含層	包含層	瓦器	碗	5.4	16.8	ていねいなナデ?	ていねいなナデ?	ほとんど砂粒を含まない 粗良	褐色	良好		
20	181	包含層	包含層	石贈				ナデ?	ナデ?	3mm以下の白色粒・石英 やや多量	褐色	良好		
20	182	包含層	包含層	娘窓器	更		14.8	ヨコナデ?・ タテナデ?	ヨコナデ?	3mm以下の白色粒・石英 やや多量	灰褐色	良好		
20	183	溝掘り中		石贈						ほとんど砂粒を含まない 粗良	褐色	良好		
21	184	包含層	包含層	斜面				斜面子タタキ	布目	3mm以下の大白色粒・石英 粒やや多量	に点々黄褐色	稍悪い		
21	185	包含層	包含層	平瓦				斜面子タタキ	布目	3mm以下の大白色粒やや 多量	褐色	良好		
21	186	包含層	包含層	平瓦						2mm以下の白色・石英粒 やや多量	浅褐色	稍悪い		
21	187	包含層	包含層	平瓦				千鳥タタキ	布目	3mm以下の白色・石英粒 多量	青褐色	稍悪い		



調査区全景（東から）



調査区全景（西から）



谷1区土層断面（東から）



谷4区土層断面（西から）



S X O 1 検出時全景（北から）



S X O 1 検出時全景（南から）



調査区北壁・S X O 1 土層断面



S X O 1 土層断面 (B-2区西壁)



S X O 1 土層断面 (D-2区北壁)



S X O 1 土層断面 (D-3区北壁)



S X O 1 挖り下げ後全景（南から）



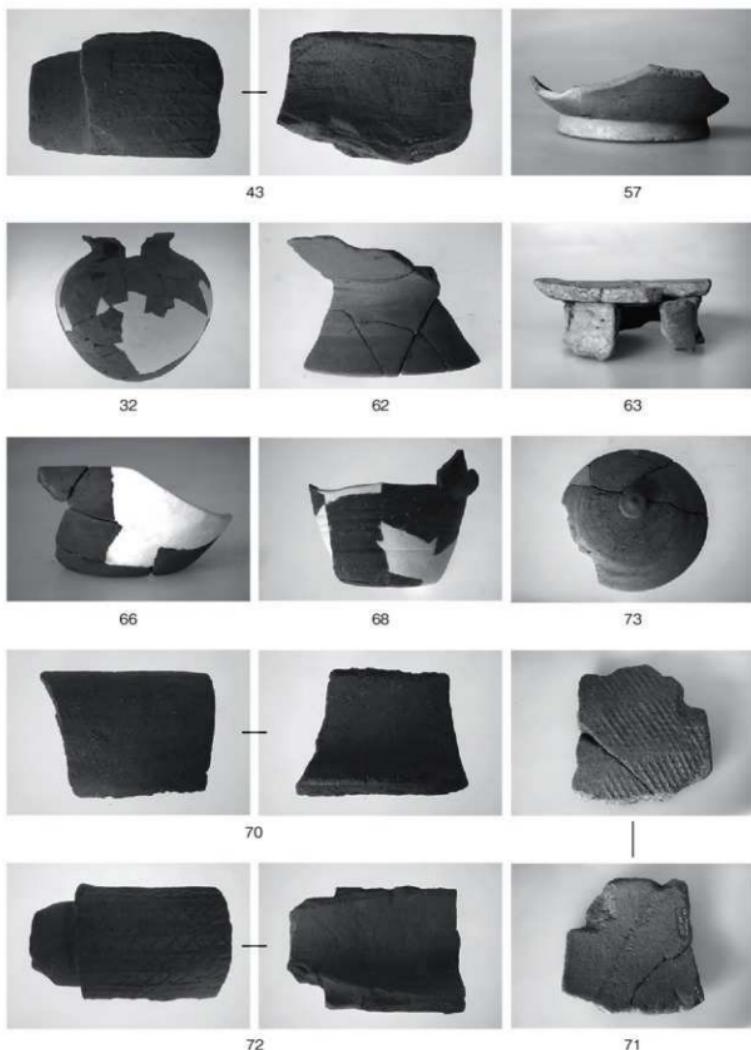
S X O 1 挖り下げ後全景（東から）



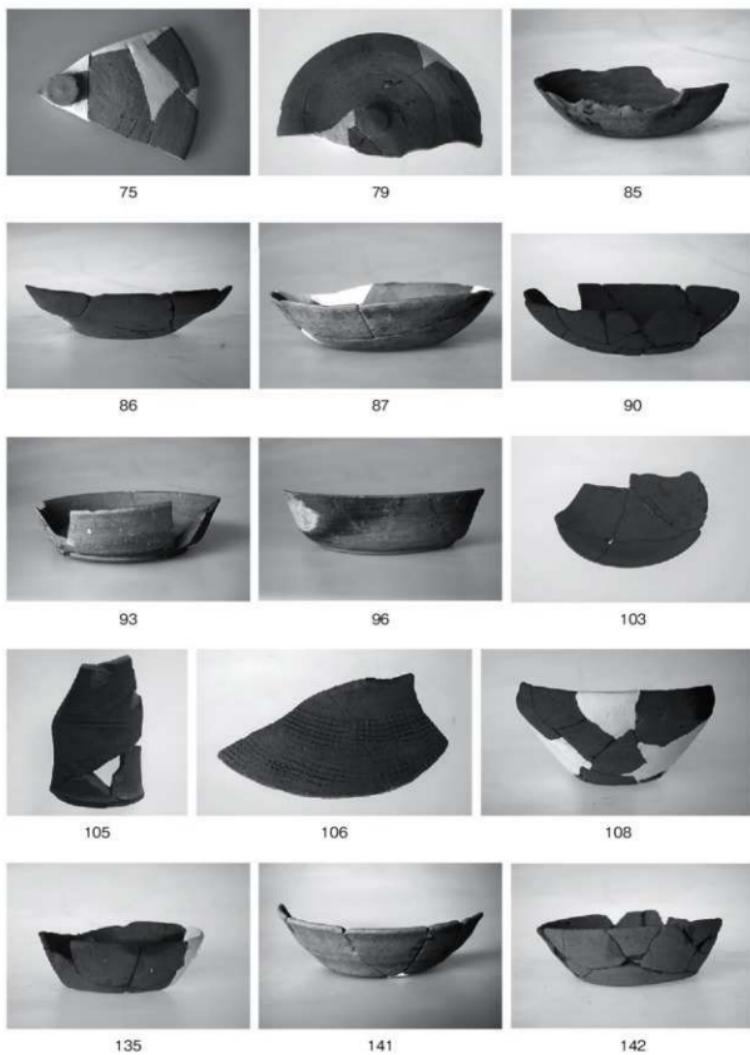
谷1区下層遺物出土状況



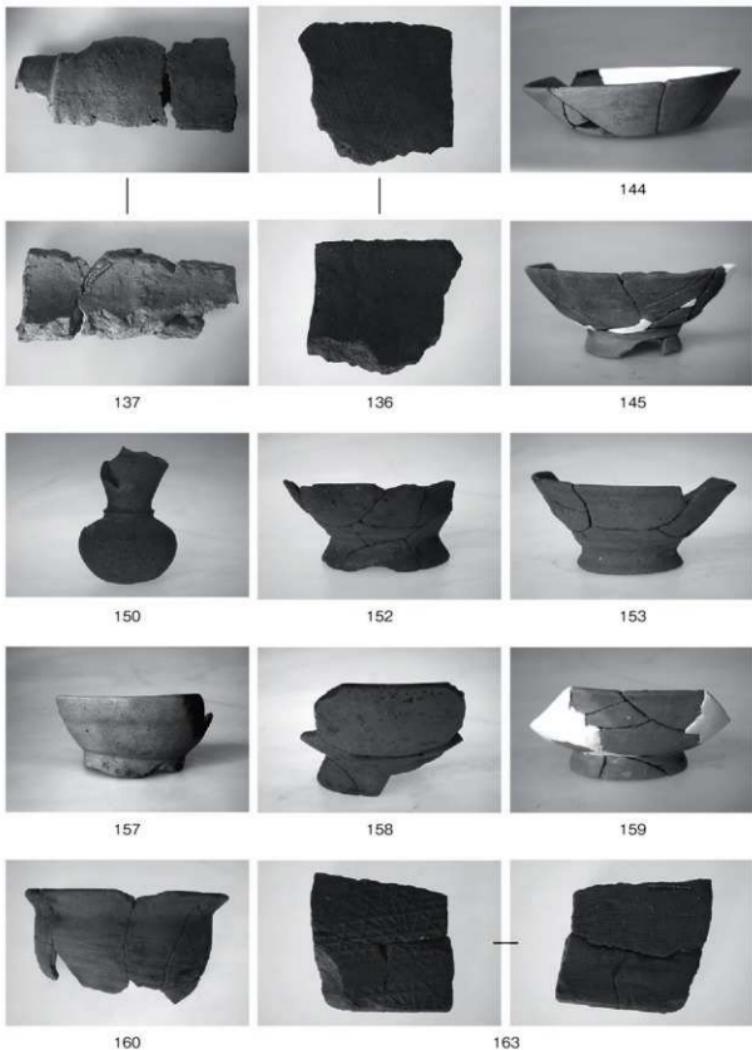
出土遺物 1



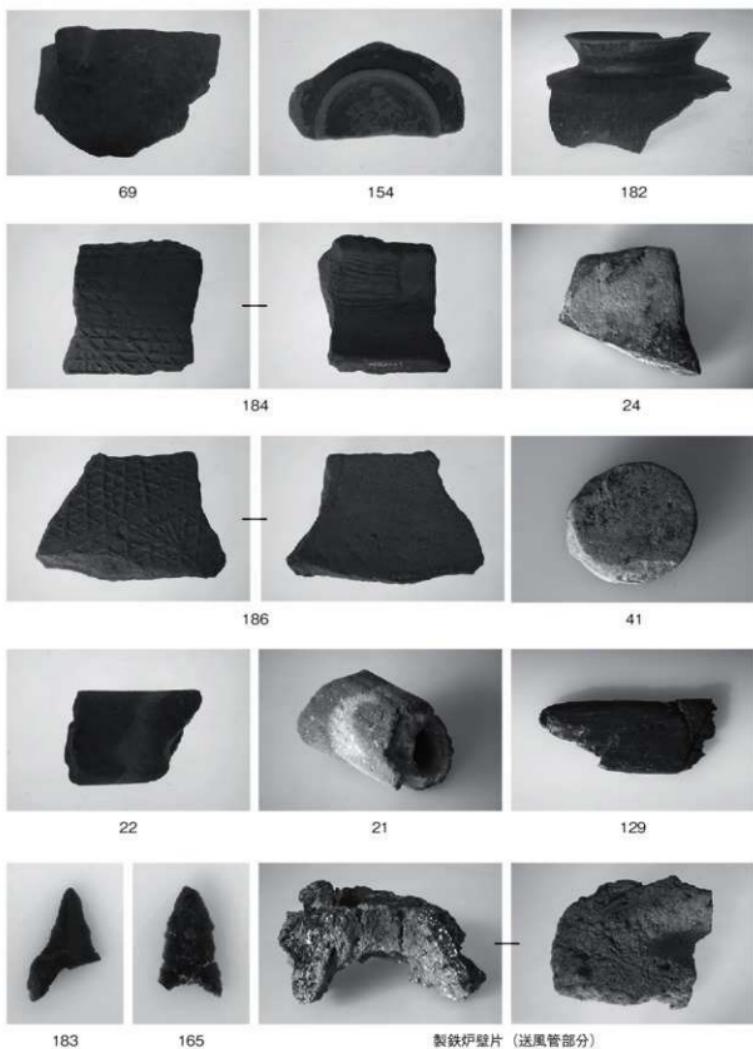
出土遺物 2



出土遺物 3



出土遺物 4



出土遺物 5

VI 第44次調査

1 調査区の位置(図VI-1)

第44次調査区は元岡・桑原遺跡群の南端、標高14～20mの丘陵の東斜面に立地し、第32次調査区の南隣に位置する。本調査区から南方・丘陵を越えた西側の谷部に第42・52次調査区(調査継続中)、同じく北方・谷を挟んで1つ東の丘陵斜面および谷部に第31(未報告)、41次調査区(本書報告)がある。

2 調査の概要

本調査に先立ち、北側隣接地で第32次調査が実施された(調査期間平成15(2003)年1月20日～同年3月31日、調査面積1700m²、調査番号0257)。この調査区の南半部で古墳時代の溝・柱穴・竪穴住居跡等が検出されているが、調査目的が製鉄遺構の確認であったことから詳細な調査は行われていなかった。調査内容としては一部の遺構・包含層の掘削と1/100の平板測量が行われていた。そこで調査の継続として、南半部の残存する遺構・包含層の掘削、1/20の実測図作成を行った(池田担当)。また製鉄遺構確認の本調査として南側に拡張する形で、平成17(2005)年6月1日より本調査に着手し、同年10月20日に終了した(木下担当)。本報告では第32次調査区南半部を3区、南側拡張部を1・2区として説明する(図VI-2・3)。調査面積は1189m²、この内には3区129m²分が含まれる。

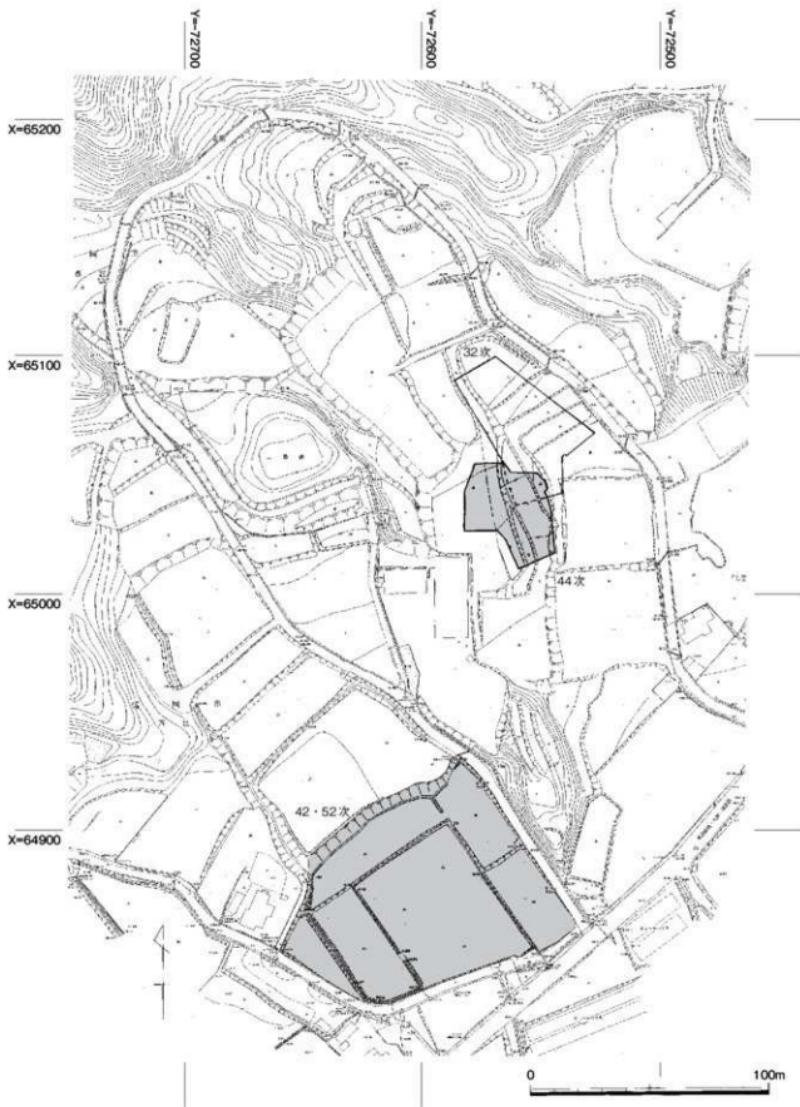
調査区は丘陵の東斜面に位置し、標高は最高地点で20.25m、最低地点で14.4mであり、現況は雜木・竹林である。調査区南北端は表土直下15～80cmで地山の花崗岩バイラン土となるが、中央部では遺物包含層を検出した。調査当初に、32次調査区の南壁ラインが遺物包含層のほぼ中央に当たることから、これを生かす形でトレーンチを設定し、遺物包含層の堆積状況を確認した。なおトレーンチを境とし、北側を1区、南側を2区とした。

遺物包含層は3層に分かれる(図VI-4)。第1層の淡褐色土は古代の須恵器・土師器を中心とする。しかし丘陵肩に近い地点では青磁碗・須恵器鉢・滑石製品が出土しており、一部中世の堆積が残っているとみられる。また古墳時代の須恵器・土師器が混じる。第2層の暗褐色粘質土は古墳時代後期の須恵器・土師器を中心とし、弥生時代中期の土器が混じる。第3層はマンガン粒が混じる黄褐色粘質土で弥生時代中期と見られる。遺物量は第1・2層が大半を占め、第3層は極めて少なくなる。

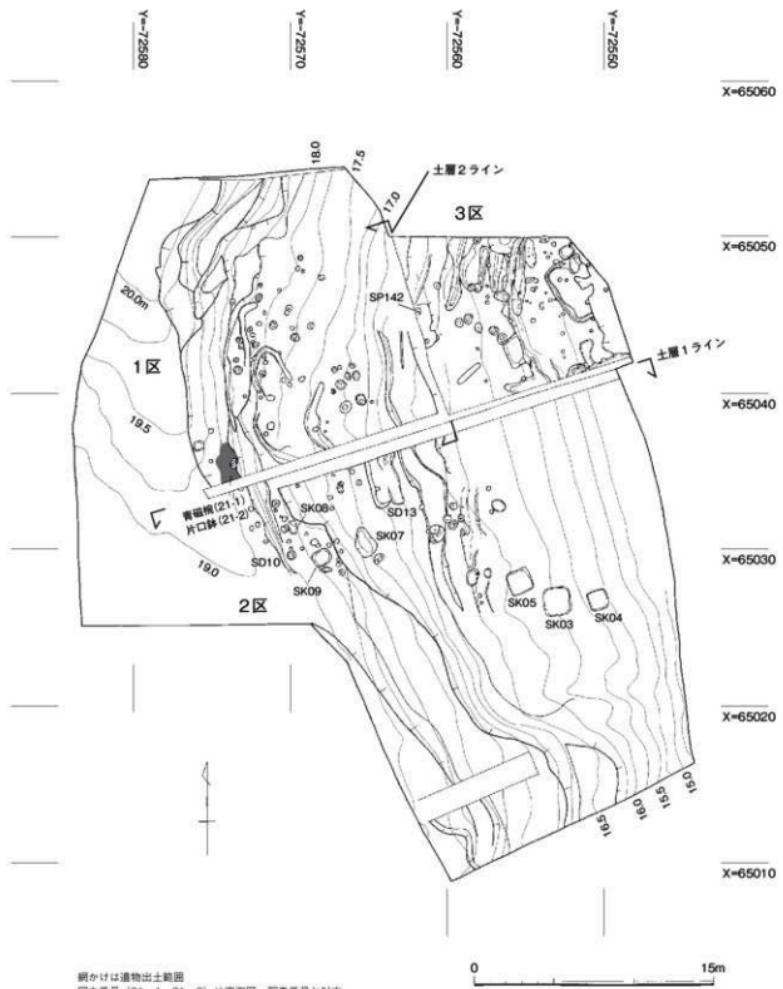
元岡・桑原遺跡群では建物群を築造するため、谷間の斜面地に盛土により段造成を行なっている例がみられるが、土層断面の観察では確認できなかった。流失してしまったか、地山を削って段造成をしたとみられ、本調査区では丘陵肩・谷への落ち際の2ヶ所で、段落ちを確認した。段落ちの直下では水の浸入を防ぐためとみられる溝を検出した。

遺構は遺物包含層各上面で検出し、第2層上面を第1面、第3層上面を第2面とした。古墳時代後期の竪穴住居1・土坑1、同終末期の方形区画溝とそれに伴う柵列、掘立柱建物3、古代の焼土坑1、土坑3、溝、埋没谷、ピット多数を確認した(表VI-1)。

出土遺物量は1・2区でコンテナ60箱、3区で28箱に相当する。古墳時代後期～古代の須恵器・土師器を中心に、最古は弥生時代中期後半の甕・大型蛤刃石斧、最新は中世・13世紀の龍泉窯系青磁碗など中国製磁器、東播系須恵器片口鉢・土師器皿・滑石製鍋、用途不明品が出土している。また遺構は確認できなかったが、包含層やピットから、鉄滓が1・2区でコンテナ1箱、3区でコンテナ2箱分出土している。

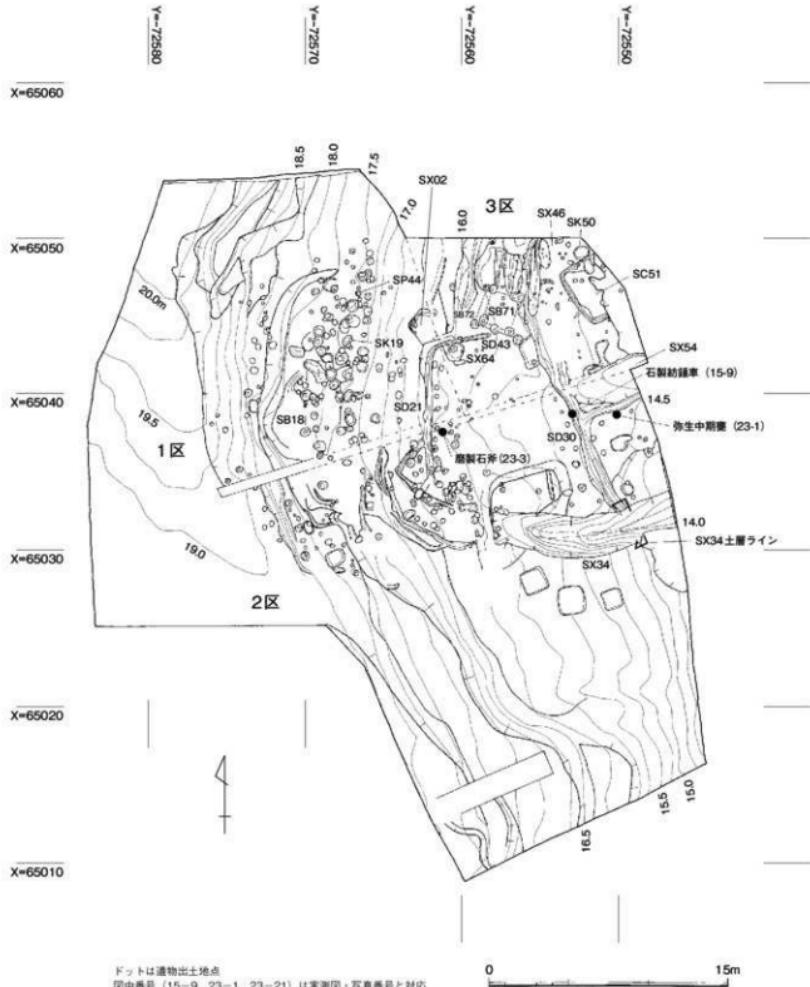


図VI-1 調査区位置図 (1/2,000)



網かけは遺物出土範囲
図中番号(21-1, 21-2)は実測図・写真番号と対応

図VI-2 第1面遺構平面図(1/300)



図VI-3 第2面造構平面図 (1/300)



3 遺構と遺物

第1面

土坑

SKO3(図VI-5、図版VI-6)

2区中央、SKO4とSKO5との間で検出した。1.75m四方の隅丸方形で、深さ0.45mである。覆土は淡褐色粘質土である。SKO4・O5とともに花崗岩バイラン土の地山を掘り込んで造られている。北半中央の底面上に炭の薄い堆積が認められたが、焼けて赤変した状況は認められなかった。

出土遺物(図VI-6)

1は土製錐である。長さ5.8cm、幅2.1cmで径0.6cmの孔が貫通する。その他須恵器・土師器の破片が出土しており、前者には×印のヘラ記号を刻む小片1点が含まれる。

SKO4(図VI-5、図版VI-6)

SKO3の東側で検出した。1.25m四方の隅丸方形で、深さ0.2m前後である。北半の底面上に炭・焼土粒がまばらに堆積していた。焼けて赤変した状況は認められなかった。須恵器・土師器の破片が出土している。

SKO5(図VI-5、図版VI-7)

SKO3の北西で検出した。南北1.45m、東西1.55mの方形で、深さ6cmである。北半の底面上に炭の薄い堆積が広がっており、土師器片がその上面に貼り付いて出土した。焼けて赤変した状況は認められなかった。須恵器・土師器の破片が出土している。

以上SKO3・O4・O5は規模に違いはあるものの、覆土や出土遺物など検出状況に共通点がうかがえ、同じ性格の遺構とみられる。骨片も出土していないため、墓とは認定しがたい。また火を受けた痕跡も認められないため、焼成遺構とも認定できない。類似の遺構として、福岡市西区今津・大原A遺跡1次調査のSK1034、SK2034が挙げられる。

SKO7(図VI-5、図版VI-7)

2区西半、SKO9から0.5～0.9m下がった東側で検出した。南北1.85m、東西1.21mの不整梢円形で、深さ0.1mである。西側は比高差0.46mある。奈良時代に属す。

出土遺物(図VI-6)

2・3・5・6は土師器で、2は甕、3は杯、5は高台杯、6は鉢である。3の底部外面は回転ヘラ切り・板状压痕の後、なで消している。6は体部内外面ともに調整不明である。4は須恵器の杯蓋である。口縁部が屈曲するのが特徴であり、奈良時代後半のものである。

SKO8(図VI-5、図版VI-8)

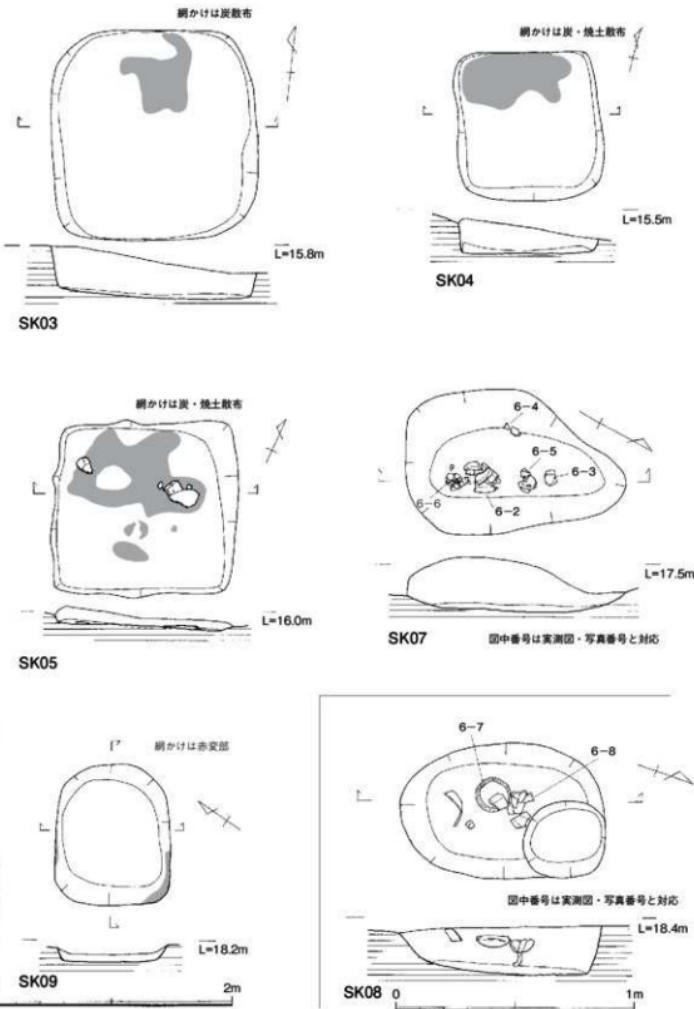
2区西半、SD10のすぐ東側で検出した。長軸86cm、短軸57cmの梢円形で、深さ5～16cmである。赤焼き須恵器の杯身が亀裂はあるものの完形・ほぼ正位で、土師器の把手付き甕が把手を下にして、底面から浮いた位置で出土した。祭祀を行ったものか。九州須恵器編年のⅢB期、古墳時代後期に属す。

出土遺物(図VI-6)

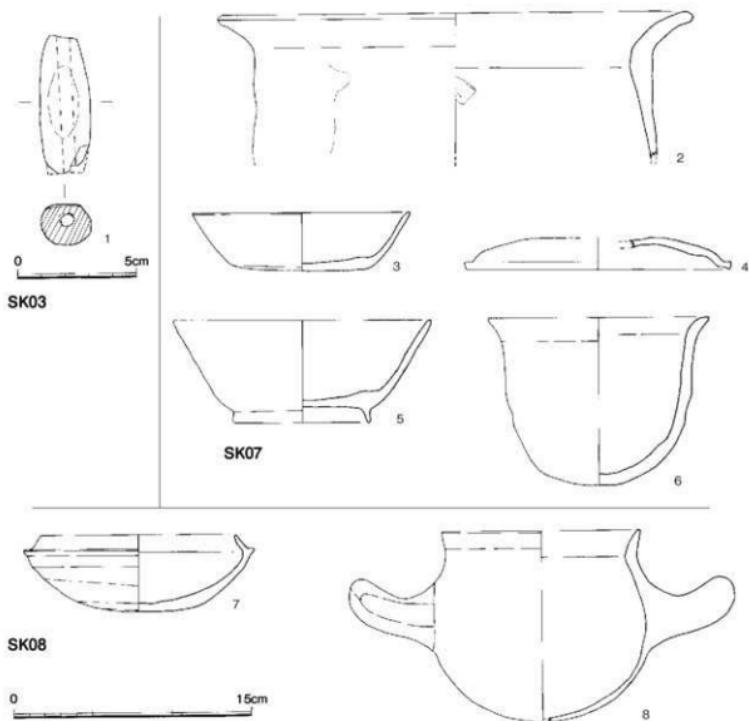
7は赤焼き須恵器の杯身である。8は土師器の把手付き甕である。内外面ともに調整である。

SKO9(図VI-5、図版VI-8)

2区西半、SD10・SKO8の南側で検出した。1.19×0.96mの略方形で、深さ7.5～23cmの焼土坑である。底面上に炭が堆積し、西半の壁が焼けて赤変している。土師器の破片が出土している。



図VI-5 第1面検出土坑実測図 (1/40、1/20)



図VI-6 SK03・07・08出土遺物実測図 (1/3, 1/2)

溝

S D 1 0 (図VI-2)

2区西半で検出した。丘陵肩より一段下がった位置に造られた溝で、丘陵肩と底面の比高差は0.45～0.55mである。大規模な段造成を行った際、水の浸入を防ぐために造られたものであろう。

出土遺物 (図VI-7)

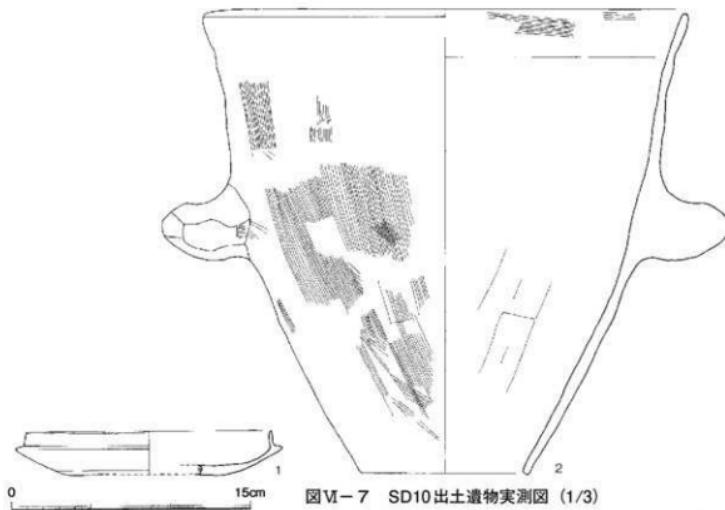
1は須恵器の杯身である。2は土師器の瓶で、内面は口縁部を横刷毛目、頸部以下をヘラ削り調整する。

S D 1 3 (図VI-8、図版VI-9)

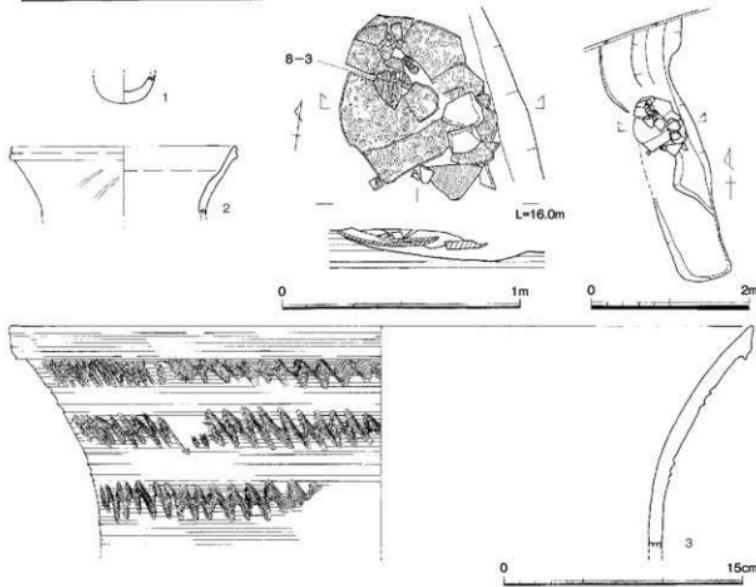
2区北端中央で検出した。現存で南北長3.25m、幅0.75m、深さ0.15mである。検出面で須恵器の大甕が出土した。

出土遺物 (図VI-8)

1は手捏土器である。2・3は須恵器で、2は壺、3は甕である。2は頸部に2条のヘラ記号が斜め方向に刻まれる。3は2条一組の断面山形突帯で文様帶を区画し、その内部にカキ目と見られる条線の上から櫛描波状文を施している。大甕の上面で出土したが、大甕とは接合しなかった。



図VI-7 SD10出土遺物実測図 (1/3)



図VI-8 SD13および出土遺物実測図 (1/60, 1/20, 1/3)

第2面

掘立柱建物

S B 1 8 (図VI-9、図版VI-11)

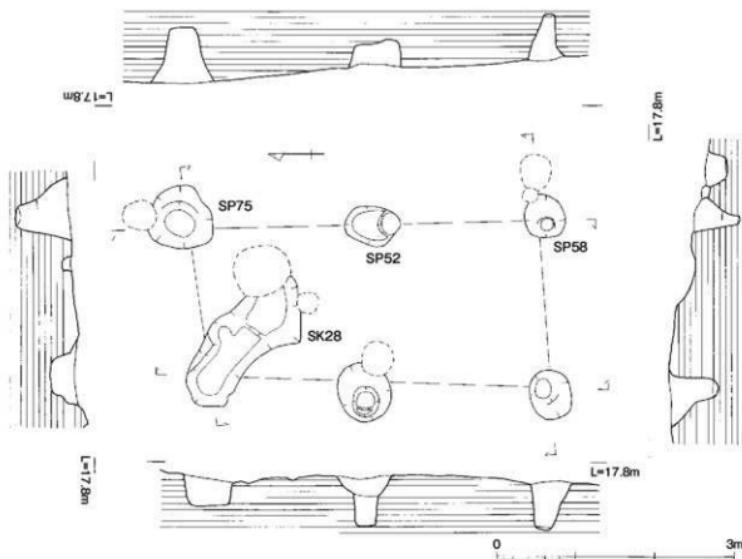
1区中央で検出した。当初SP58・52・75の並びから、1間×2間の南北棟を想定し、北西隅のピットの検出に努めたが想定位置ではなく、南寄りにある土坑状の落ち込みを北西隅に当たるものとした。実際には南にずれており、疑問が残るが、南側1間分は確実と考えられる。柱間は南北2.3m、東西2.1mである。ピットの深さは0.5～0.7mである。建物の主軸は座標北に平行し、SD21およびそれに伴う柱列と全く同一である。従って両者は関連・企画性がかなり高く、同時期のものである可能性がある。ピットの覆土は暗褐色粘質土で、遺物は須恵器・土師器の破片が出土している。

S B 7 1 (図VI-10、図版VI-2)

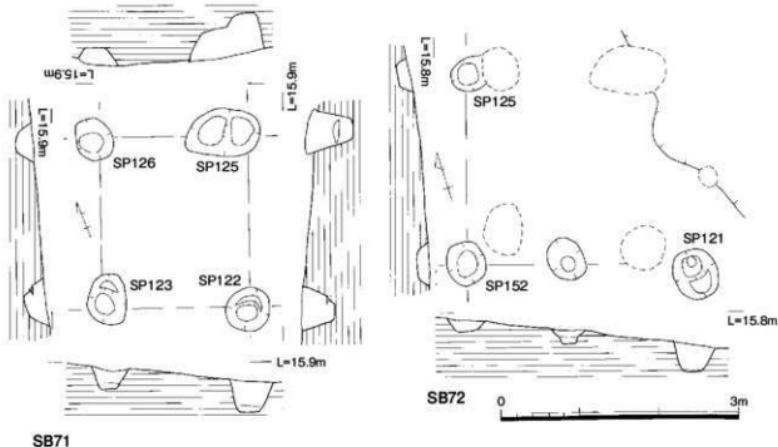
3区で検出した。1間四方で、柱間は南北2.2m、東西1.9mである。ピットの深さは0.23～0.5mである。建物の主軸は座標北より20度東へ振れる。ピットの覆土は暗褐色粘質土で、須恵器・土師器の破片が出土している。

S B 7 2 (図VI-10、図版VI-2)

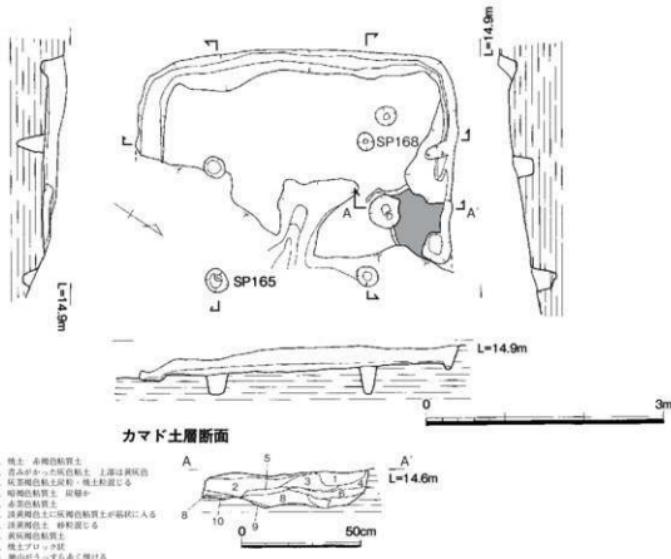
3区で検出した。SB71とほぼ同位置にある。南北1間以上、東西2間以上である。柱間は南北2.4m、東西1.3mと1.6mである。ピットの深さは0.15～0.35mである。建物の主軸は座標北より17度東に振れる。ピットの覆土は暗茶褐色・暗灰色粘質土で、遺物は土師器の破片1点のみである。



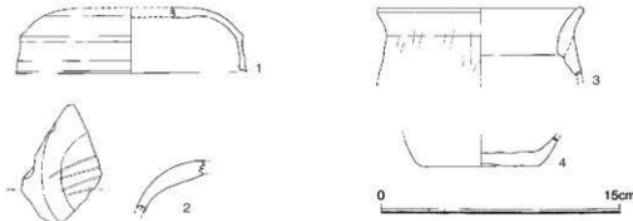
図VI-9 SB18実測図 (1/60)



図VI-10 SB71・72実測図 (1/60)



図VI-11 SC51実測図 (1/60、1/20)



図VI-12 SC51出土遺物実測図 (1/3)

竪穴住居

S C 5 1 (図VI-11、図版VI-3・4)

3区東端で検出した。1辺4mの方形で東側は削平されている。床面までの深さは北側で0.2mである。

覆土は暗褐色粘質土である。4本柱で幅0.3m・深さ0.1mの壁溝がめぐり、北側にカマドを持つ。カマドは灰色・黄色粘質土、炭、焼土が細かく堆積し、全面の床が一部焼ける。袖は削平とビットの切り込みで失われ、形態不明である。古墳時代後期に属す。

出土遺物 (図VI-12)

1・2は須恵器の杯蓋である。2は天井部外面に4条のヘラ記号を刻む。3・4は土師器で、3は甕、4は杯である。3は体部外面に刷毛目調整を施し、頸部内面に粘土紐の内傾接合痕を残す。4は底部外面に回転糸切りの後などで調整を施しており、遺構の時期に合わない。混入か。1は北半、2・4は南半の床上で出土した。

溝

S D 2 1 ・ 4 3 (図VI-13、図版VI-4・12)

丘陵裾を南北方向に伸びる溝で、北方で直角に東へ曲がり、3区の溝S D 4 3につながる。南方は削平によるのか、元々なかったのかプランが不明瞭で東に曲がる様相は確認できなかったが、恐らく方形の区画を意図していたものであろう。現存で南北長9.0m、東西長4.0m、深さ0.2mである。区画の内側に当たる東側に溝に沿って1.45m間隔でビットが並んでおり、柵列を設けていたものとみられる。軸線は座標北に沿っており、S B 1 8と同一であることから、両者は高い関連・企画性をもって造られたものと考えられる。古墳時代後期に属す。

出土遺物 (図VI-14)

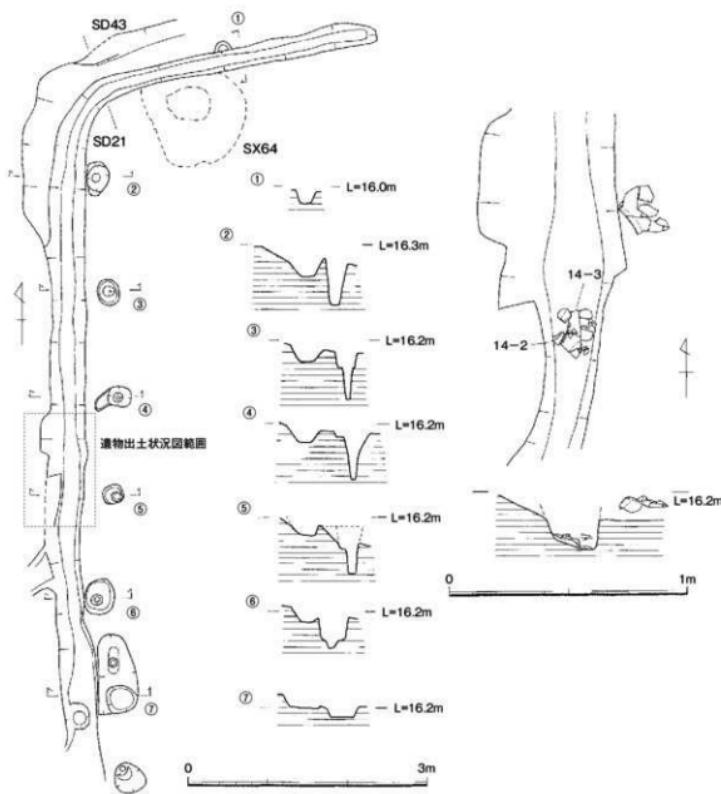
1・2は須恵器で、1は杯蓋、2は杯身である。3は土師器の甕である。3は頸部のやや下に粘土紐接合痕がある。体部内外面の調整は不明である。

S D 3 0 (図VI-3)

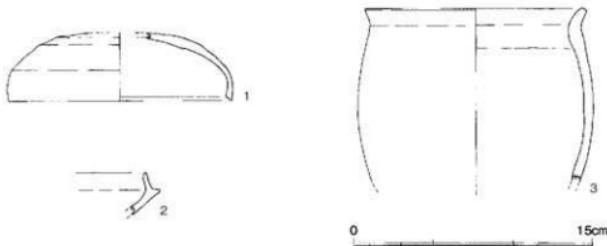
2区東端で検出した。南北方向の溝で3区に伸びる。段落ちの直下に造られており、S D 1 0と同様大規模な段造成に伴う水浸入防止のものであろう。段上と底部の比高差は北が0.2m、南が0.67mである。底部のレベルは北が標高15m弱、南が14.5m強であり、南側の谷S X 3 4に水が流れようになっている。

出土遺物 (図VI-15)

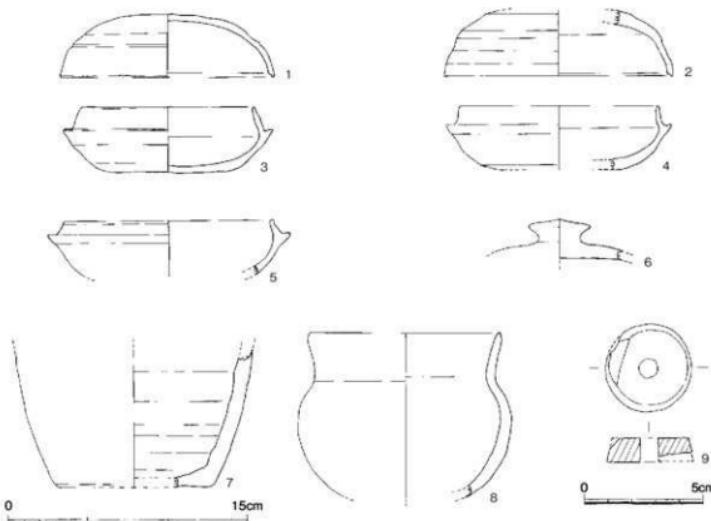
1～7は須恵器で、1・2・6は杯蓋、3～5は杯身、7は壺である。4のロクロ回転は反時計回りである。6はやや扁平な宝珠形つまみを持つ。8は土師器の甕である。内外面ともに内側で調整である。



図VI-13 SD21および遺物出土状況実測図 (1/60, 1/20)



図VI-14 SD21出土遺物実測図 (1/3)



図VI-15 SD30出土遺物実測図 (1/3, 1/2)

る。9は滑石製紡錘車である。下部径3.7cm、上部径3.2cm、高さ1.0cm、孔径0.8cmである。

土坑・その他

S K 5 0 (図VI-17)

3区、S C 5 1の北側で検出した。0.95×0.82mの長方形で、深さ0.2mである。遺物は土師器の破片が出土している。

S X 3 4 (図VI-3・16、図版VI-13)

2区東半で検出した。自然の谷筋とみられるが、古墳時代後期の須恵器蓋杯・壺、土師器の甌または甌の把手などが多数出土しており、当該期に埋没したと考えられる。大規模な造成に伴い、埋め立てられたのであろう。北側に隣接するSD30の底部レベルがSX34に向かって下がっていることから、排水の機能も持たれていたことも、考えられる。

出土遺物 (図VI-18)

1～7は須恵器で、1・6は杯蓋、2～4は杯身、5は甌、7は長頸甌である。2は底部外面をヘラ切りし、板状圧痕が残る。6は天井部外面にヘラ記号を施す。7は内面の粘土紐接合痕が顕著である。8～11は土師器で、8は鉢、9は杯身、10は高台杯、11は把手である。9は須恵器杯身の写しか。

S X 5 4 (図VI-3)

3区南端で検出した落ち込みで、2区の北東隅に広がる。谷側から山側に入り込んでいたもので、出土遺物から平安時代前期に埋没したと考えられる。

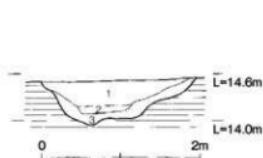
出土遺物 (図VI-18)

1～13は土師器で、1～6は杯、7・8は皿、9～11は高台杯、12・13は甌である。6は破断面が平滑に研磨されており、円盤に転用されたものとみられる。13は体部外面の縦刷毛目、内面のヘ

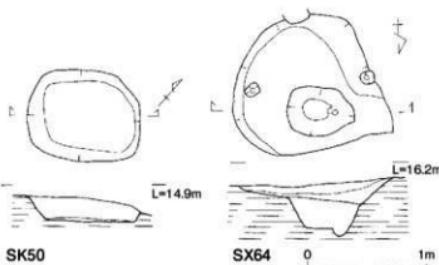
ラ削り調整が不明瞭である。

S X 6 4 (図VI-17、図版VI-4)

3区、SD 4 3の南側で検出した。径1.3mの略円形で、中央部がピット状に落ち込む。深さ0.46mである。中央のピット部はSD 2 1・4 3に伴う柵列を構成する可能性もある。遺物は須恵器・土師器の破片が出土している。

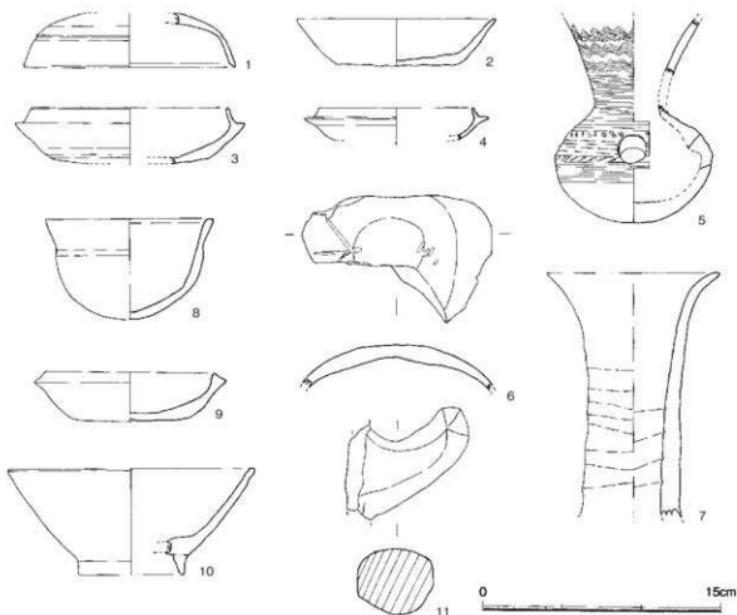


1. 黄褐色粘質土(褐色土・明黃褐色土粘多量、炭灰・上部少軽含む)
2. 棕褐色粘質土
3. 棕褐色粘質土

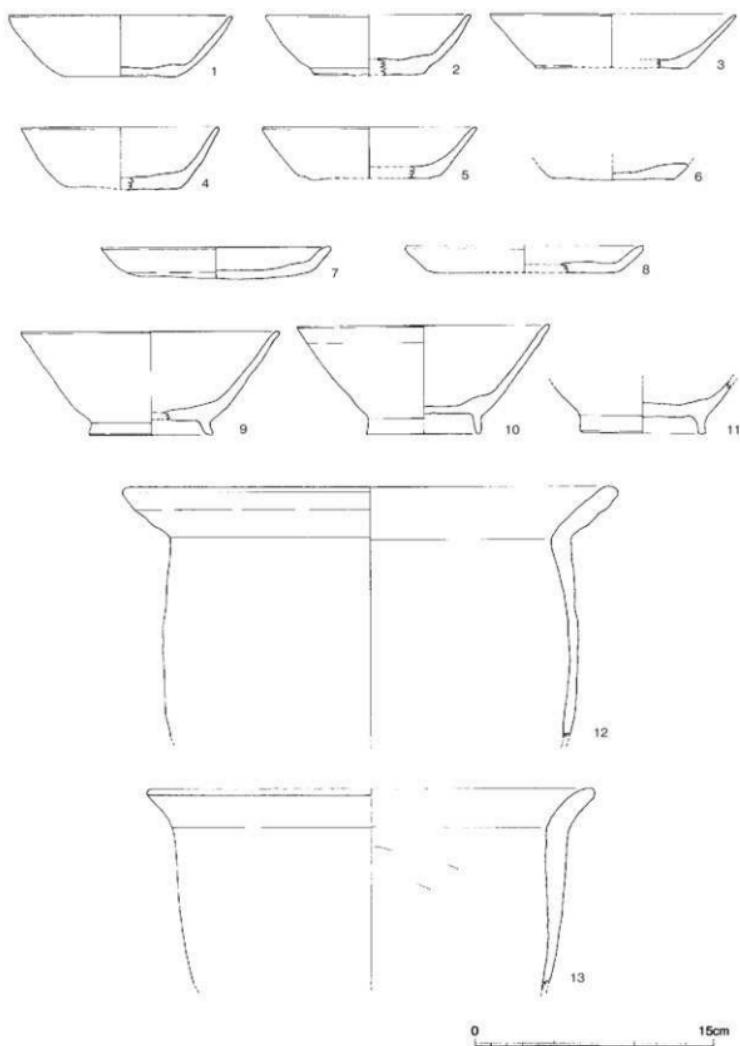


図VI-16 SX34 土層断面図 (1/60)

図VI-17 SK50、SX64 実測図 (1/40)



図VI-18 SX34 出土遺物実測図 (1/3)



図VI-19 SX54出土遺物実測図（1/3）

ピット・その他出土遺物（図VI-20）

1～3は土師器の杯で、1は3区SP442、2は1区SP44、3は1区SX02出土。4は白磁皿、5・6は須恵器の杯蓋、7は杯身、11は立岩産とされる小豆色の輝緑凝灰岩製石包丁で、3区SX46出土。4は太宰府分類III-1類で、底部内面に重ね焼きに伴う輪状の釉掻き取りを施す。5は赤焼で、ロクロ回転は反時計回りである。6は天井部外面に線状のヘラ記号を刻む。10は横長9.3cm・縦幅4.7cm・紐孔の芯々間長1.9cmである。8は土錘で、3区SX49出土。長さ4.3cm・幅1.2cm・孔径0.5cmである。9は砥石、縦16.4cm・横10.3～16.0cm・厚さ2.4～5.1cm。石材は砂岩系で団の左右両側面を使用している。1区第2面SK19出土。10は滑石製鍋の転用品で、容器の蓋またはこて状製品とみられる。平面角型のつまみを持ち、直径13.6cmの円形に復元できる。つまみは高さ2.7cmで紐通しの孔が一部残っている。

包含層出土遺物

第1層（図VI-21）

1は龍泉窯系鏡蓮弁文青磁椀、2は東播系須恵器の片口鉢である。1区の丘陵肩に近い位置から出土した。2は体部外面に指頭圧痕を施す。3～8・13は土師器で、3～8は杯、13は把手付き甕または瓶である。底部外面の調整について、3～6はなで、7・8は回転ヘラ切りである。13は、外面に縦、内面の頸部付近に横方向の刷毛目調整を施す。1区の丘陵肩からやや下がった位置で出土した（図版VI-9）。9～12は須恵器で、9はコップ形、10・12は杯蓋、11は杯身である。9の底部外面は回転ヘラ切り調整である。コップ形須恵器は北方の31次調査で出土している。そちらは青灰色の硬質な仕上がりに対し、本例は灰白色でやや焼成が甘い印象を受ける。12は天井部外面に十字形のヘラ記号がある。14～16は滑石製品で、14はミニチュア容器、15・16は鍋である。14は縦幅2.7cm・横長4.3cm、高さ2.0cmで、割り込みと削り出しで8字状の器部と底に長方形の板を作り出す。雀居遺跡3次調査第1面検出面出土例に近似している。

第2層（図VI-22）

1～5・9は土師器で、1・2・4は杯、3は杯蓋、5は高台杯、9は甕である。底部外面の調整について、1・2は回転ヘラ切り、4は回転糸切りか。9は外面の縦刷毛目をなで消している。

6～8は須恵器で、6は杯蓋、7・8は杯身である。10は弥生土器の甕である。

第3層（図VI-23）

1・2は弥生土器の甕である。1は器高30.0cm・復元口縁17.6cmで、調整は器面が荒れており不明である。2区北東部、SD30の東側で出土した（図VI-3、図版VI-13）。3は今山産の玄武岩製大型蛤刃石斧である。縦残存長7.5cm・横幅8.4cm・厚さ1.9cmで、刃先に使用痕かとみられる細かい条線がある。

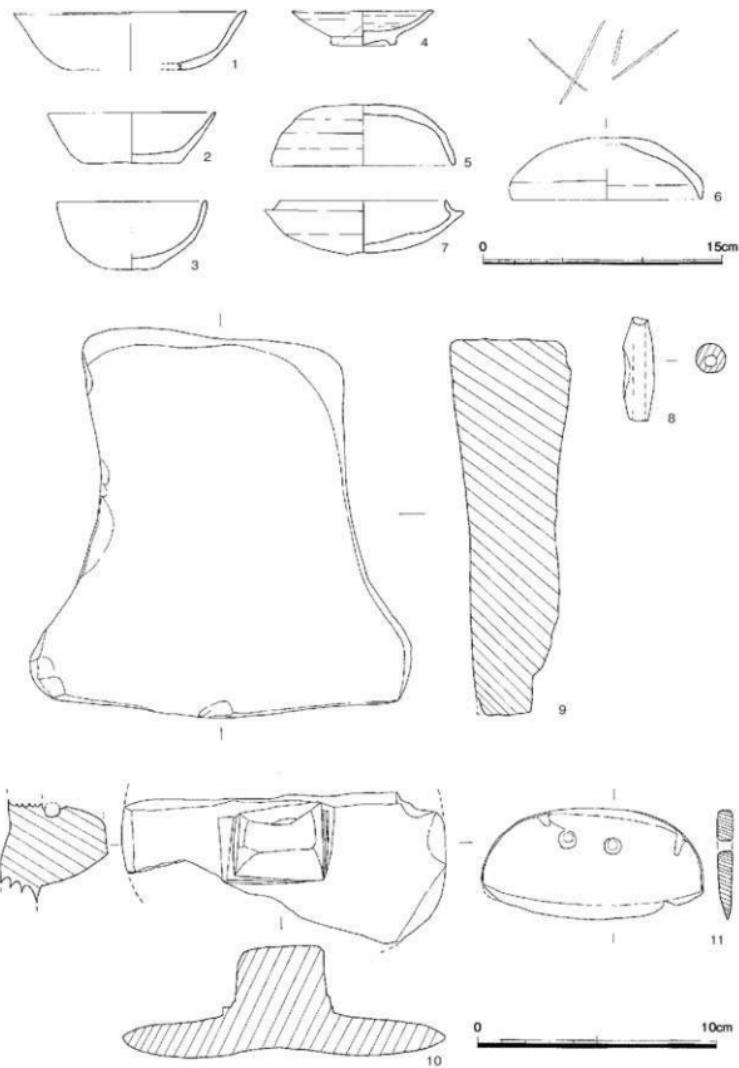
3区包含層62（図VI-24）

62は3区の南西隅部に広がる包含層である。遺物は分層して取り上げられていないが、1・2区と傾向は同じである。遺物量はコンテナ11箱である。

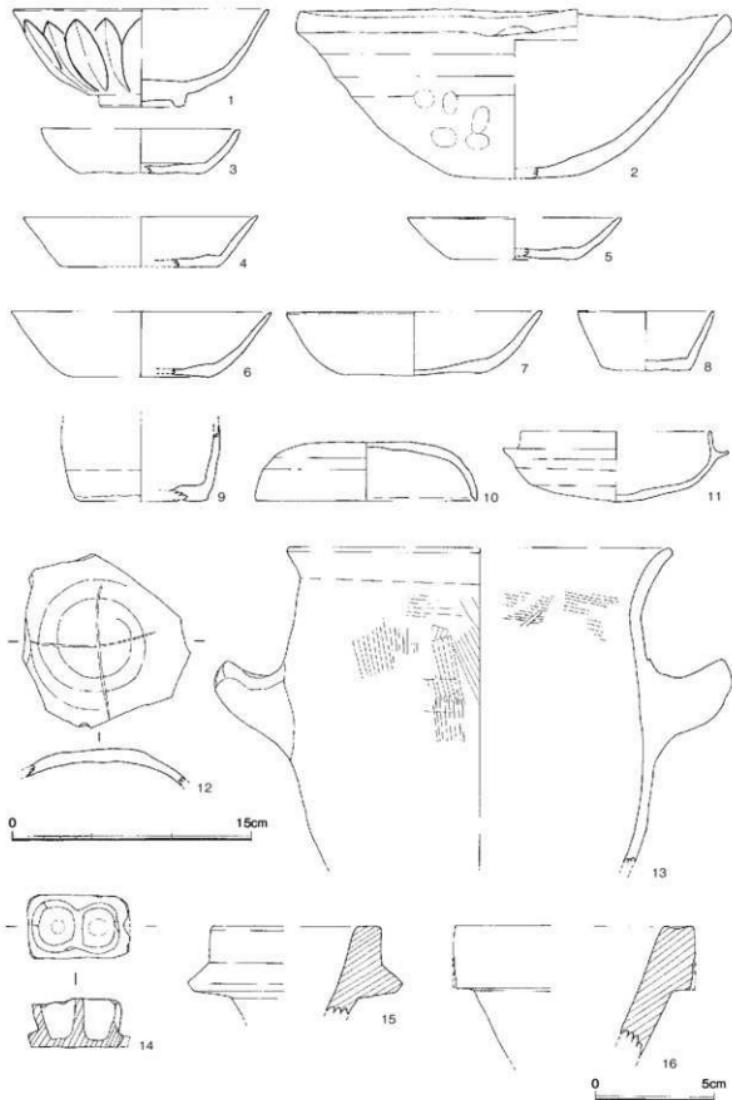
1～11は土師器で、1～4は皿、5～7は杯、8・9は高台杯、10は鉢、11は把手付き甕である。底部外面の調整について、1・3・4・6は回転ヘラ切り、2・5・7はなで調整である。8は破断面が平滑に研磨されており、円盤として転用されたものとみられる。10は外面に黒斑がある。

12は焼し焼きで内外面に炭素を吸着させた瓦質焼成で、釜の口縁部か。13は白磁椀、14は龍泉窯系鏡蓮弁文青磁椀である。13は太宰府分類V類か。

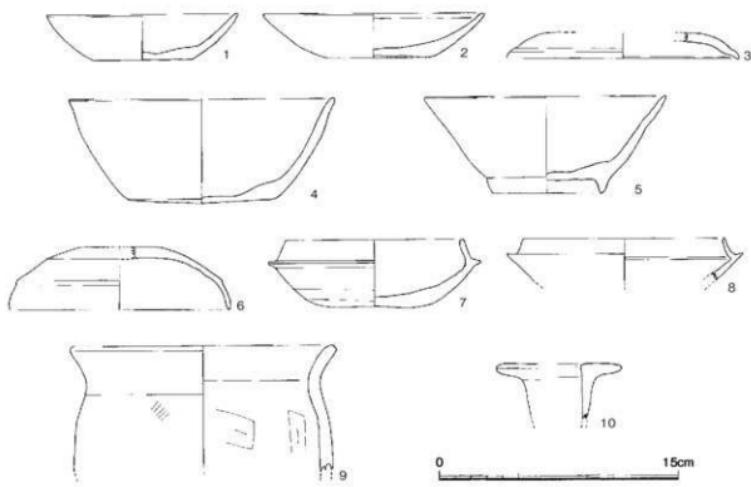
15～24は須恵器で、15～17は高台杯、18は杯、19は皿、20・21・24は杯蓋、22は有蓋高杯、23は無蓋高杯である。底部外面の調整について、18はヘラ切りのみ、19は回転ヘラ切りした後で調整を施す。22は脚部との接合部が観察でき、同心円状の刻みを施し、脚部との安定的な接合が図られている。23は胴部下半にカキ目調整を施す。



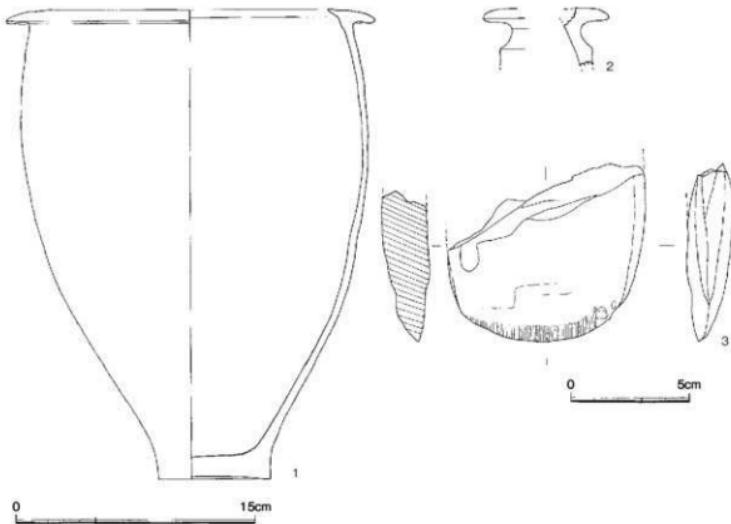
図VI-20 ピット・その他出土遺物実測図 (1/3、1/2)



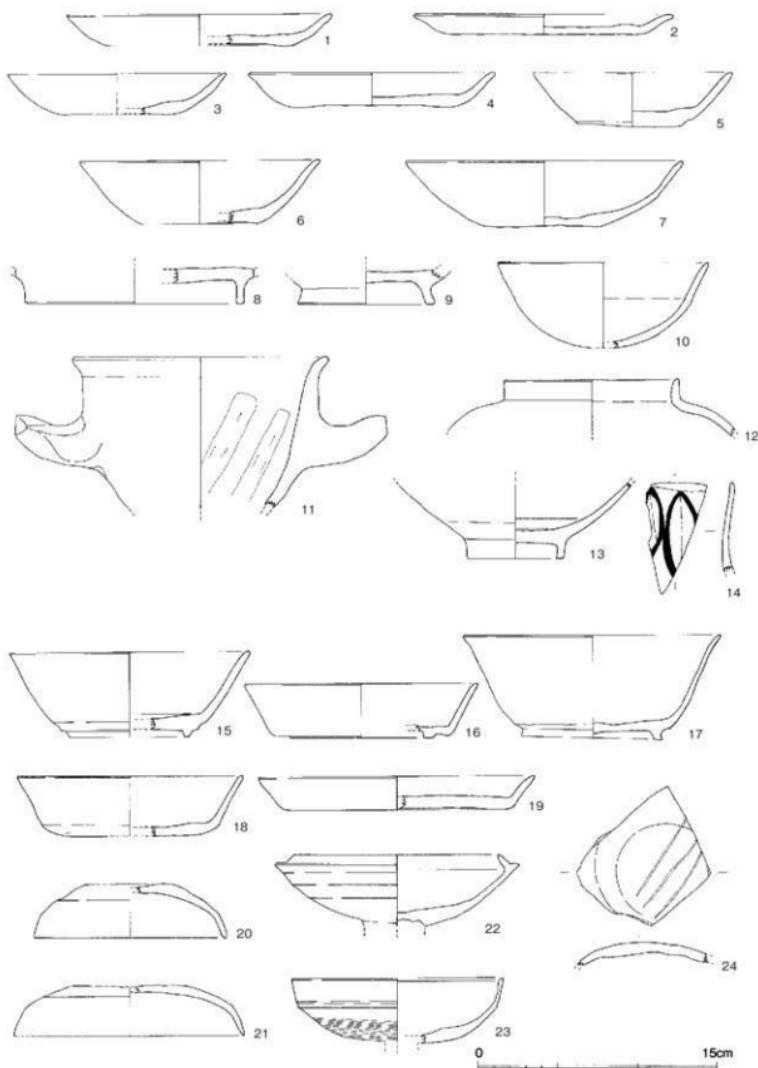
図VI-21 包含層第1層出土遺物実測図 (1/3、1/2)



図VI-22 包含層第2層出土遺物実測図 (1/3)



図VI-23 包含層第3層出土遺物実測図 (S = 1/3、1/2)



图VI-24 3区包含层62出土遗物实测图 (1/3)

4 まとめ

本調査では大別して①弥生時代中期後半、②古墳時代後期～終末、③奈良時代～平安時代前期、④平安時代末期～鎌倉時代前期の遺構あるいは遺物が確認できた。

①は甕、今山産の石斧・立岩産の石包丁が確認できる。丘陵を越えた西側の谷に位置する42・52次調査で、2本の河川の岸辺から検出した大量の土器群は同時期に形成が始まっており、それらとの関連がうかがえる。しかし土器の廃棄を行った人々の居住域の解明には至らなかった。

②になり、遺物量が増え、当該地の造成がより本格化する。段落ちを設け、居住域が形成される。谷筋も埋められる。その他一定方向に軸をそろえた方形区画溝・それに伴う柵列・掘立柱建物の存在から、企画性の高い施設群の存在が考えられる。遺物では須恵器の蓋杯にヘラ記号を施すものが数点ある。その中で鳥の足跡状の3本のもの（図VI-18-6）、十字形（図VI-21-12）は、福岡県八女郡広川町の鈴ヶ山、山の前両古墳群出土品の中に類例がみられる。ヘラ記号が製作者集団の動向を反映するものならば、供給元に何らかの関連があるのではないか。そのためには製作技法・焼成・胎土の比較検討が必要であるが、ここでは可能性のみを指摘しておく。

③になると、各種土坑が造られる。焼土坑の他、性格を特定できないものがある。第1面の項で述べたように、大原A遺跡1次調査の成果が参考になる。元岡・桑原遺跡群が立地する丘陵地帯の東端、博多湾に面した今津に所在し、古代を中心とした製鉄遺構が確認されており、それに伴って以上のようないくつかの土坑が造られている。本調査においても包含層やピットから一定量の鉄滓が出土したことでも踏まえて、土坑群は製鉄に関連する遺構と考えられる。製鉄遺構そのものは確認できなかったが、1区中央、2区との境界付近に堆積する包含層中に炭の多量混入が確認できたことから、その位置に存在した可能性がある。

④は遺構に伴っておらず少数だが、遺物が注目できる。滑石製ミニチュア容器（図VI-21-14）は、福岡市内では代表的な博多・箱崎の他、雀居3次、橋本櫻田、徳永B2次（筆者調査・未報告）など古代末～中世の遺構・遺物が確認できる場所で出土している。使用状況を示すような状態で出土しておらず、機能の解明は今後の課題である。同様に鍋の転用品で容器の蓋もしくはこて状製品とみられるものも、博多、特に35次調査などで出土している。

また土師器の杯・高台杯を円形に打ち欠き、破断面を研磨したものを確認した。博多では瓦玉と呼び、瓦や陶器、中国製磁器の高台を円形に打ち欠き、破断面をきれいに仕上げ、円盤に転用している例がある。特に35次調査では533点もの多数が出土し、その2／3が道路遺構の上から出土していることから、石蹴りの石のような遊具としての用途が想定されている。元岡では土師器を代用していたようである。

糸切り底の土師器皿、龍泉窯系鎮蓮弁文青磁碗の出土から、中世前期・13世紀前半に博多とつながりのある階層の人々が付近に在住していた可能性が想定できる。滑石製用途不明品・円盤・中国製磁器のセットは、博多以外の中世遺跡・遺構の性格を考える上で、重要な指標になると考えられる。

《参考文献》

- 西谷正編「九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告Ⅲ」 1972 福岡県教育委員会
「太宰府条坊跡X V-陶磁器分類編一」 太宰府市の文化財第49集 2000 太宰府市教育委員会
大庭康時・佐伯弘次・菅波正人・田上勇一郎編「中世都市・博多を掘る」 海鳥社 2008
以下3冊は福岡市教育委員会発行埋蔵文化財調査報告書
長家伸編「大原A遺跡1」・「大原A遺跡2」 第430・431集 1995
田中壽夫・宮園登美枝編「橋本櫻田遺跡」 第542集 1997
松村道博・力武卓治編「雀居遺跡4」 第565集 1998

表VI-1 遺構一覧表

排列	遺構名	種類	地区	検出面	覆 土	出土遺物	時代	備考
	SD 0 1	溝	1 - 2 区	包含1層上部		須恵、土師		
	SX 0 2	1区	第2面	昭和色粘質	土師杯			
VI - 5	SK 0 3	土坑	2区	第1面	淡褐色粘質	須恵杯身(立ち上がり小)、土師	古代	
VI - 5	SK 0 4	土坑	2区	第1面	淡褐色粘質	須恵、土師	古代	
VI - 5	SK 0 5	土坑	2区	第1面	淡褐色粘質	須恵杯身(立ち上がり小)、土師	古代	
	SK 0 6	土坑	2区	第1面	淡褐色粘質	須恵、土師高台杯、鉢足	古代	
VI - 5	SK 0 7	土坑	2区	第1面	昭和色粘質	須恵杯臺、土師壺・杯	古代	
VI - 5	SK 0 8	土坑	2区	第1面	昭和色粘質	須恵杯臺、土師手付き壺	古墳後期	
VI - 5	SK 0 9	土坑	2区	第1面	淡褐色粘質	土師		埴土坑
VI - 2	SD 1 0	溝	2区	第1面	昭和色粘質	須恵壺、土師瓶	古墳後期	
	SK 1 1	土坑	2区	第1面	土師			
	SK 1 2	土坑	2区	第1面	土師瓶			
VI - 8	SD 1 3	溝	2区	第1面		須恵大甕、土師		
	SK 1 4	土坑	2区	第1面	土師			
	SD 1 5	溝	1区	第1面	土師			
	SD 1 6	溝	1区	第1面	土師	須恵、土師、鉢足		
	SK 1 7	土坑	1区	第2面	土師			
VI - 9	SB 1 8	楕円柱建物	1区	第2面	昭和色粘質	須恵、土師		
	SK 1 9	土坑	1区	第2面	土師、鉢足			
	SK 2 0	土坑	2区	第2面	土師			
VI - 13	SD 2 1	溝	1 - 2 区	第2面	昭和色粘質	須恵蓋杯、土師甕	古墳後期	
	SD 2 2	溝	2区	第2面		須恵、土師		
	SD 2 3	溝	2区	第2面	土師			
	SD 2 4	溝	2区	第2面	土師			
	SD 2 5	溝	1区	第2面	土師瓶			古墳後期
	SD 2 6	溝	2区	第2面		須恵蓋杯、土師甕		
	SD 2 7	溝	2区	第2面		須恵、土師		
	SK 2 8	土坑	1区	第2面	土師			
	SD 2 9	溝	2区	第2面	土師			
	SD 3 0	溝	2区	第2面	昭和色粘質	須恵蓋杯、土師甕、滑石製鏡座車	古墳後期	
	SD 3 1	溝	2区	第2面		須恵鏡瓶		
	SK 3 2	土坑	1区	第2面		須恵蓋・杯身		
VI - 3 - 16	SX 3 4	谷	2区	第2面		土師		
	SD 3 5	溝	32次			須恵・土師・白磁		
	SD 3 6	溝	32次					
	SD 3 7	溝	3区			須恵、土師		
	SD 3 8	溝	3区			須恵、土師、青磁碗		
	SD 3 9	溝	3区			土師、青磁皿		
	SD 4 0	溝	3区			須恵、土師		
	SD 4 1	溝	3区			須恵、土師		
	SD 4 2	溝	3区			須恵蓋杯、土師		
	SD 4 3	溝	32次					
	SD 4 4	溝	32次					
	SX 4 5	不明	32次			土師把手		
	SX 4 6	不明	3区			土師高台		
	SX 4 7	土坑	32次					
	SX 4 8	段落ち	3区			須恵、土師		
	SX 4 9	不明	32次			須恵、土師(把手・高台・高杯脚)、白磁		
VI - 17	SK 5 0	土坑	3区			土師		
VI - 11	SC 5 1	竪穴住居	3区			須恵蓋杯、土師甕	古墳後期	北壁にカマド
	SK 5 2	土坑状	3区			須恵、土師		
	SD 5 3	溝状	3区		灰色砂質、黄色粘質 ブロック			
	SX 5 4	段落ち	2 - 3区		黒褐色	土師		
	SD 5 5	溝	3区			須恵、土師		
	SD 5 6	溝状底	3区			須恵、土師		
	SD 6 0	溝	3区			須恵、土師		
	SD 6 1	溝状	3区			須恵、土師		
	6 2	包含層	3区			須恵、土師、鉢足	古代～弥生	
	SX 6 3	溝状	3区			土師		
VI - 17	SX 6 4	くぼみ状	3区			須恵、土師		
	6 5	矧ぎ溝状	3区			土師		
	6 6		3区					
	6 7		3区					
	6 8		3区		黄色土混七り			
	6 9	包含層	3区			須恵、土師		
	7 0	包含層	3区			須恵、土師		
VI - 10	SB 7 1	楕円柱建物	3区			須恵、土師		
VI - 10	SB 7 2	楕円柱建物	3区			土師		

表M-2 出土遺物観察表

件目	遺物の種類	器形	出土区	出土上遺物・層位	口径(復元)	器高(残存高)	色調	胎土	焼成	備考
6-1	土製品	鉢	2区	S.K.O.3	長5.8	幅2.1	灰	密	良	
6-2	土師器	甕	2区	S.K.O.7	(29.4)	(9.2)	淡黄褐	密(0.5~2mmの白色透明砂粒多量含む)	良	
6-3	土師器	杯	2区	S.K.O.7	(13.6)	3.7	橙	密(1~2mmの赤褐色砂粒少量含む)	良	
6-4	須志器	杯蓋	2区	S.K.O.7	(16.8)	(2.0)	灰	密(1~4mmの赤褐色砂粒微量含む)	良	
6-5	土師器	高台杯	2区	S.K.O.7	(16.4)	6.5	橙	密(1mmの白色砂粒・赤褐色砂粒多量含む)	良	
6-6	土師器	鉢	2区	S.K.O.7	14.0	10.7	赤	密(1~3mmの白色砂粒多量含む)	良	
6-7	須志器	杯身	2区	S.K.O.8	12.4	4.9	赤	密	良	
6-8	土師器	把手付き甕	2区	S.K.O.8	(12.6)	12.3	黄褐	密(1mmの白色透明砂粒多量含む)	良	
7-1	須志器	杯身	2区	S.D.1.0	(15.6)	(2.8)	灰	密	良	
7-2	土師器	瓶	2区	S.D.1.0	(30.6)	29.8	橙	密	良	
8-1	土師器	手握土器	2区	S.D.1.3		(1.8)	赤	密	良	
8-2	須志器	甕	2区	S.D.1.3	14.2	(4.4)	灰	密	良	ヘラ記号
8-3	須志器	甕	2区	S.D.1.3	(47.2)	(14.2)	青灰	密(1~8mmの白色砂粒微量含む)	良	
12-1	須志器	杯蓋	3区	S.C.5.1	(14.6)	4.1	灰	密(1~2mmの白色砂粒微量含む)	良	
12-2	須志器	杯蓋	3区	S.C.5.1			灰	密	良	ヘラ記号
12-3	土師器	甕	3区	S.C.5.1	(13.0)	(4.3)	橙	密(1~2mmの白色透明砂粒多量含む)	良	
12-4	土師器	杯	3区	S.C.5.1	(底径7.4)	(1.9)	橙	密	良	
14-1	須志器	杯蓋	1区	S.D.2.1	(14.2)	4.4	灰	密(0.5~1mmの白色砂粒多量含む)	良	
14-2	須志器	杯身	1区	S.D.2.1		(2.7)	灰	密	良	
14-3	土師器	甕	1区	S.D.2.1	(14.0)	(11.1)	淡黄褐	密(1~2mmの白色砂粒多量含む)	良	
15-1	須志器	杯蓋	2区	S.D.3.0	13.6	4.0	淡灰	密(1~2mmの白色・黒色砂粒多量含む)	良	
15-2	須志器	杯蓋	2区	S.D.3.0	(14.6)	(4.2)	灰	密(1~5mmの白色砂粒多量含む)	良	
15-3	須志器	杯身	2区	S.D.3.0	11.0	4.2	灰	密(1mmの白色砂粒多量含む)	良	
15-4	須志器	杯身	2区	S.D.3.0	(12.7)	(4.0)	灰	密	良	
15-5	須志器	杯身	2区	S.D.3.0	(13.2)	(3.5)	灰	密(1~3mmの白色砂粒微量含む)	良	
15-6	須志器	杯蓋	2区	S.D.3.0	(1)	(2.45)	灰	密	良	
15-7	須志器	甕	2区	S.D.3.0	(底径9.6)	(8.8)	灰	密	良	
15-8	土師器	甕	2区	S.D.3.0	(12.1)	(10.5)	橙	密(1mmの黒色砂粒多量含む)	良	
15-9	石製品	胡錘章	2区	S.D.3.0						
18-1	須志器	杯蓋	2区	S.X.3.4	(13.4)	(3.4)	淡灰	密	良	
18-2	須志器	杯身	2区	S.X.3.4	(12.6)	3.0	青灰	密	良	
18-3	須志器	杯身	2区	S.X.3.4	(12.4)	3.6	灰	密	良	
18-4	須志器	杯身	2区	S.X.3.4	(9.8)	(2.0)	灰	密	良	
18-5	須志器	甕	2区	S.X.3.4	(13.1)	灰	密(1mmの白色砂粒多量含む)	良		
18-6	須志器	杯蓋	2区	S.X.3.4			灰	密	良	ヘラ記号
18-7	須志器	長脚甕	2区	S.X.3.4	11.0	(15.6)	暗青灰	密(1mmの白色砂粒多量含む)	良	
18-8	土師器	鉢	2区	S.X.3.4	(10.6)	6.4	橙	密(1~2mmの白色砂粒多量含む)	良	
18-9	土師器	杯身	2区	S.X.3.4	(10.6)	3.2	淡黄褐	密(2mmの褐色砂粒多量含む)	良	
18-10	土師器	高台杯	2区	S.X.3.4	(15.6)	6.9	淡黄褐	密(1~3mmの白色砂粒微量, 1mmの褐色砂粒多量含む)	良	
18-11	土師器	把手	2区	S.X.3.4			淡黄褐	密(1~4mmの白色砂粒多量含む)	良	
19-1	土師器	杯	2~3区	S.X.5.4	(14.2)	(3.9)	淡灰	密	良	
19-2	土師器	杯	2~3区	S.X.5.4	(13.0)	(3.8)	橙	密(1~3mmの褐色砂粒多量含む)	良	
19-3	土師器	杯	2~3区	S.X.5.4	(15.6)	3.4	橙	密(1mmの白色砂粒微量含む)	良	
19-4	土師器	杯	2~3区	S.X.5.4	12.6	4.0	淡灰	密(1mmの白色砂粒多量含む)	良	
19-5	土師器	杯	2~3区	S.X.5.4	(13.6)	3.3	淡灰	密	良	
19-6	土師器	杯	2~3区	S.X.5.4	(底径7.8)	(0.9)	橙	密(3mmの白色砂粒・赤褐色砂粒微量含む)	良	円盤軸用
19-7	土師器	甕	2~3区	S.X.5.4	(14.6)	2.0	淡灰	密(1~2mmの白色砂粒微量含む)	良	
19-8	土師器	甕	2~3区	S.X.5.4	(15.0)	1.7	橙	密(1~2mmの白色砂粒多量含む)	良	
19-9	土師器	高台杯	2~3区	S.X.5.4	(16.4)	6.7	橙	密(2mmの褐色砂粒多量, 白色砂粒少量含む)	良	
19-10	土師器	高台杯	2~3区	S.X.5.4	(16.0)	7.0	橙	密(1~2mmの赤褐色砂粒多量, 白色砂粒微量含む)	良	
19-11	土師器	高台杯	2~3区	S.X.5.4	(底径7.6)	(3.1)	淡灰	密(1~2mmの赤褐色砂粒多量含む)	良	
19-12	土師器	甕	2~3区	S.X.5.4	(30.3)	(16.0)	淡黄褐	密(1mm以上の白色・灰色砂粒多量含む)	良	
19-13	土師器	甕	2~3区	S.X.5.4	(28.0)	(12.4)	淡灰	密(1~3mmの白色砂粒多量含む)	良	
20-1	土師器	杯	3区	S.P.1.4.2	(14.8)	(3.6)	橙	密(2mmの赤褐色砂粒微量含む)	良	
20-2	土師器	杯	1区	S.P.4.4	(10.6)	(3.3)	橙	密(2mmの褐色砂粒少量含む)	良	
20-3	土師器	杯	1区	S.X.0.2	9.5	4.4	橙	密(1mmの白色砂粒多量含む)	良	
20-4	白磁	甕	3区	S.X.4.6	(9.0)	2.2	淡灰	密	良	大宰府第-1
20-5	須志器	杯蓋	3区	S.X.4.6	12.0	4.0	赤	密(1~2mmの白色砂粒多量含む)	良	
20-6	須志器	杯蓋	3区	S.X.4.6	11.6	3.9	青灰	密(1mmの白色砂粒微量含む)	良	ヘラ記号
20-7	須志器	杯身	3区	S.X.4.6	(10.6)	3.5	灰	密	良	
20-8	土製品	鉢	3区	S.X.4.9			淡灰	密	良	
20-9	石製品	砥石	1区	S.K.1.9						紳岩

番号	遺物の種類	器形	出土区	出土上標識・層位	口径(復元)	器高(残存高)	色調	胎土	焼成	備考
20 - 10	石製品	容器蓋	1区	地山直上						滑石
20 - 11	石製品	石包丁	3区	S X 4 6	横長9.3 縦幅4.7 厚さ0.6 研孔芯芯間長1.9					輝緑凝灰岩
21 - 1	青磁	碗	1区	第1層		16.2	6.15	灰緑	密	良 龍泉窯 大宰府II-b
21 - 2	中世須志器	片口鉢	1区	第1層		27.0	10.75	灰	密	良 東播系
21 - 3	土師器	杯	1区	第1層		(12.6)	2.8	淡緑	密	良
21 - 4	土師器	杯	2区	第1層		(14.9)	3.2	褐	密(1mmの褐色粒少量含む)	良
21 - 5	土師器	杯	2区	第1層		(13.6)	2.7	淡緑	密	良
21 - 6	土師器	杯	2区	第1層		(16.6)	4.1	浅黄緑	密	良
21 - 7	土師器	杯	1区	第1層		16.2	4.0	浅黄緑	密(1mmの赤褐色粒微量含む)	良
21 - 8	土師器	杯	1区	第1層		(8.6)	(3.7)	褐	密	良
21 - 9	須志器	コップ形	2区	第1層	(底径 8.2)	(4.9)	灰白	密(1mmの白色砂粒微量、1~3mmの褐色粒多量含む)	良	
21 - 10	須志器	杯蓋	1区	第1層		(14.0)	(37.5)	灰	密(0.5~2mmの白色砂粒多量、褐色粒多量含む)	良
21 - 11	須志器	杯身	1区	第1層		(12.0)	(4.5)	灰	密(1mmの白色砂粒少量含む)	良
21 - 12	須志器	杯蓋	1区	第3層				密	良 ヘラ記号	
21 - 13	土師器	把手付き甕	1区	第1層		(24.2)	(10.1)	黄緑	密(1mmの白色砂粒多量含む)	良
21 - 14	石製品	ミニチュア容器	1区	第1層	27 × 43	20				滑石
21 - 15	石製品	鏡	1区	第1層			(3.7)			滑石
21 - 16	石製品	鏡	1区	第1層			(5.5)			滑石
22 - 1	土師器	杯	2区	第2層		(12.0)	2.9	淡黄緑	密(3mmの赤褐色粒微量含む)	良
22 - 2	土師器	杯	2区	第2層		(14.0)	2.8	淡黄緑	密	良
22 - 3	土師器	杯蓋	2区	第2層		(14.8)	1.6	褐	密(1~3mmの褐色粒微量含む)	良
22 - 4	土師器	杯	2区	第2層		(16.8)	6.7	淡黄緑	密(1mmの褐色・白色砂粒少量含む)	良
22 - 5	土師器	高台杯	2区	第2層		15.4	6.2	褐	密(1~3mmの赤褐色粒多量含む)	良
22 - 6	須志器	杯蓋	2区	第2層		(14.0)	4.1	灰	密(1mmの白色砂粒微量含む)	良
22 - 7	須志器	杯身	2区	第2層		11.1	4.5	青灰	密(0.5~5mmの白色砂粒多量含む)	良
22 - 8	須志器	杯身	2区	第2層		(12.8)	(2.7)	灰	密(1mmの白色砂粒微量含む)	良
22 - 9	土師器	甕	2区	第2層		(16.4)	(7.9)	赤	密(1mmの白色砂粒微量含む)	良
22 - 10	弥生土器	甕	2区	第2層			(3.5)	褐	密(1mmの白色砂粒多量含む)	良
23 - 1	弥生土器	甕	2区	第3層		(17.6)	30.0	褐	密(1~3mmの白色砂粒多量含む)	良
23 - 2	弥生土器	甕	2区	第3層			(3.7)	褐	密(1~3mmの白色・灰色砂粒、1mmの褐色砂多量含む)	良
23 - 3	石製品	太型船刃石斧	2区	第3層						玄武岩
24 - 1	土師器	瓶	3区	6.2		(16.8)	2.0	淡緑	密	良
24 - 2	土師器	瓶	3区	6.2		(16.4)	1.3	褐	密(0.5mmの赤色粒微量含む)	良
24 - 3	土師器	瓶	3区	6.2		(13.8)	2.7	褐	密	良
24 - 4	土師器	瓶	3区	6.2		(15.6)	2.2	淡黄緑	密	良
24 - 5	土師器	杯	3区	6.2		(12.6)	3.5	淡緑	密(0.5~3mmの赤色粒多量含む)	良
24 - 6	土師器	杯	3区	6.2		(15.2)	4.0	淡黄緑	密	良
24 - 7	土師器	杯	3区	6.2		(17.6)	4.2	褐	密	良
24 - 8	土師器	高台杯	3区	6.2	(高台径 13.6)	(2.3)	褐	密	良 内輪黒斑	
24 - 9	土師器	高台杯	3区	6.2	(高台径 8.6)	(2.1)	褐	密(1mmの白色砂粒微量含む)	良	
24 - 10	土師器	鉢	3区	6.2		(13.4)	5.5	褐	密(1~3mmの白色砂粒多量含む)	良
24 - 11	土師器	把手付鉢	3区	6.2		(16.0)	(9.7)	淡黄緑	密(1~2mmの白色透明砂粒多量含む)	良
24 - 12	瓦質土器	釜?	3区	6.2		(11.0)	(3.3)	黒色	密	良
24 - 13	白磁	碗	3区	6.2	(高台径 6.0)	(4.6)	灰白	密	良 大宰府V	
24 - 14	青磁	碗	3区	6.2				灰緑	密	良 龍泉窯 大宰府II-b
24 - 15	須志器	高台杯	3区	6.2		(15.2)	5.5	灰	密	良
24 - 16	須志器	高台杯	3区	6.2		(14.8)	3.5	青灰	密	良
24 - 17	須志器	高台杯	3区	6.2		16.4	6.8	淡黄緑	密	良
24 - 18	須志器	杯	3区	6.2		(14.4)	3.8	褐	密	良
24 - 19	須志器	瓶	3区	6.2		(17.6)	2.1	褐	密	良
24 - 20	須志器	杯蓋	3区	6.2		(12.2)	3.4	淡黄緑	密(0.5mmの白色砂粒微量含む)	良
24 - 21	須志器	杯蓋	3区	6.2		(14.6)	3.3	褐	密	良
24 - 22	須志器	有蓋高杯	3区	6.2		(13.4)	(4.3)	灰	密	良
24 - 23	須志器	無蓋高杯	3区	6.2		(13.0)	(4.6)	灰	密	良
24 - 24	須志器	杯蓋	3区	6.2				灰	密	良 ヘラ記号

辨団番号網掛けは写真実載遺物

11径・器高の単位はcm



3区全景（北から）



3区全景（東から）



3区南壁土層（北から）



S B 7 1 · 7 2 （北西から）



S C 5 1 (南から)



S C 5 1 北壁カマド検出状況 (南から)



SC 51 カマド土層断面（東から）



SD 43・SX 64（西から）



1・2区第1面全景（北から）



1・2区第1面全景（東から）



SKO 3 (西から)



SKO 4 (西から)



S K 0 5 (西から)



S K 0 7 (東から)



SK08 (東から)



SK09 (北から)



SD13須恵器大甕出土状況（南から）



1区包含層第1層 土師器甕出土状況（東から）



1・2区第2面全景（北から）



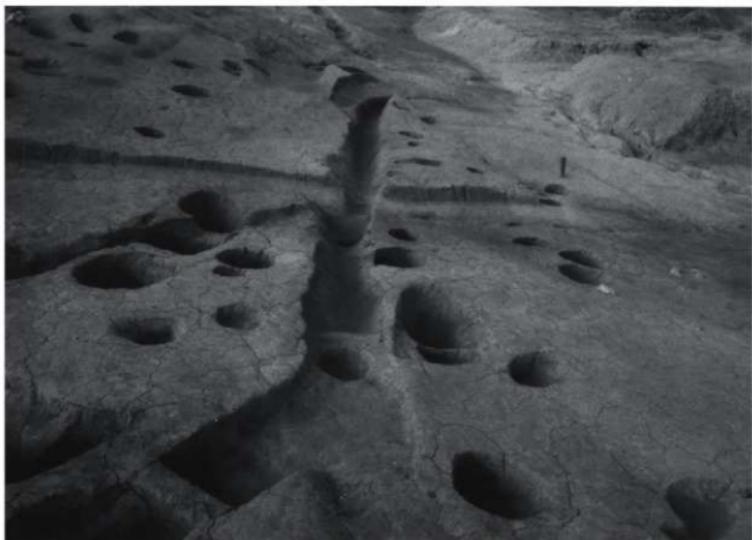
1・2区第2面全景（東から）



1・2区第2面近景（南から）



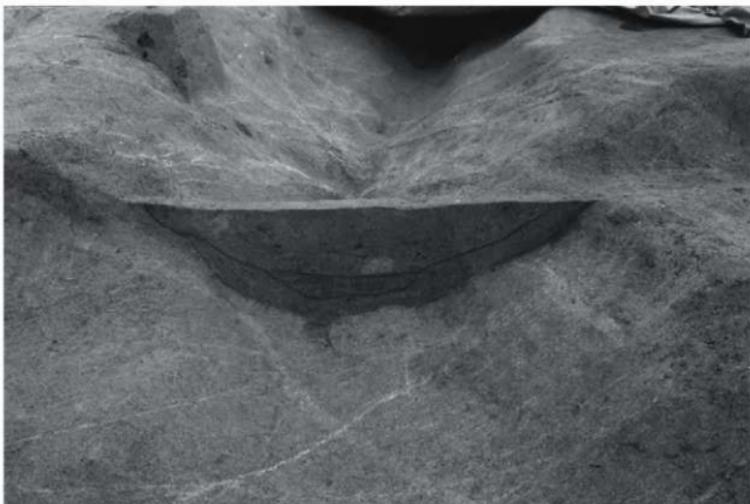
S B 18 (南から)



S D 2 1 (南から)



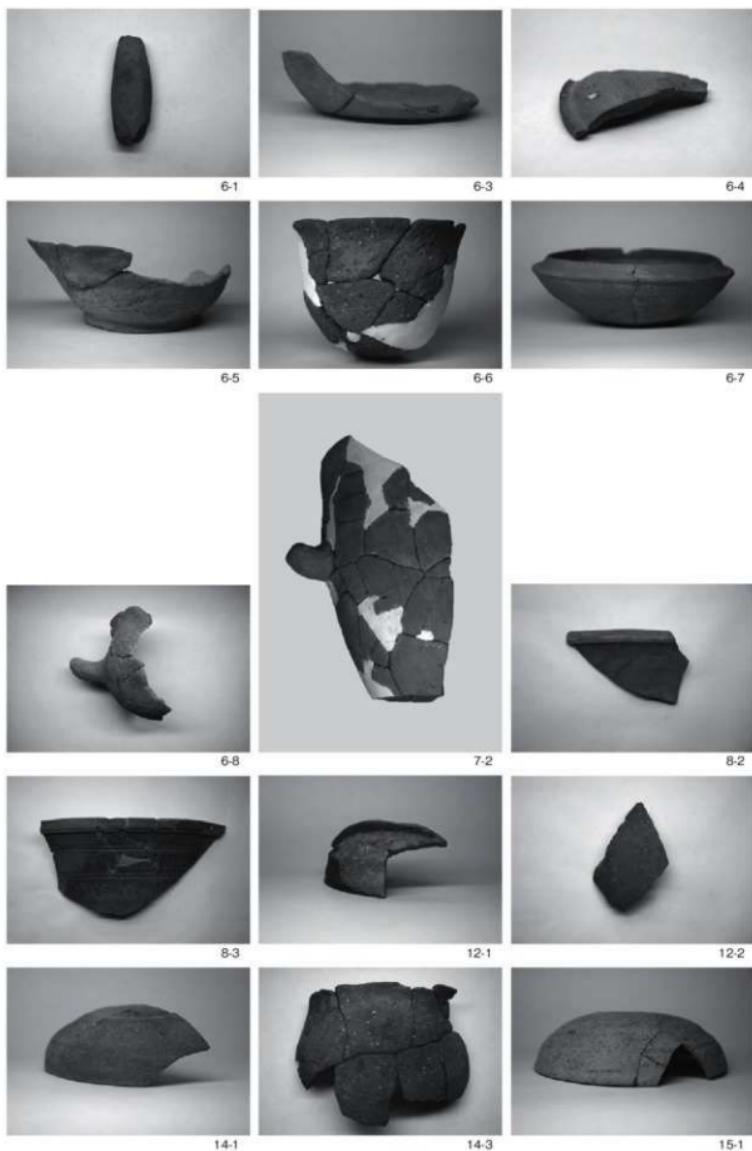
S D 2 1 遺物出土状況 (北から)



S X 3 4 土層断面（東から）

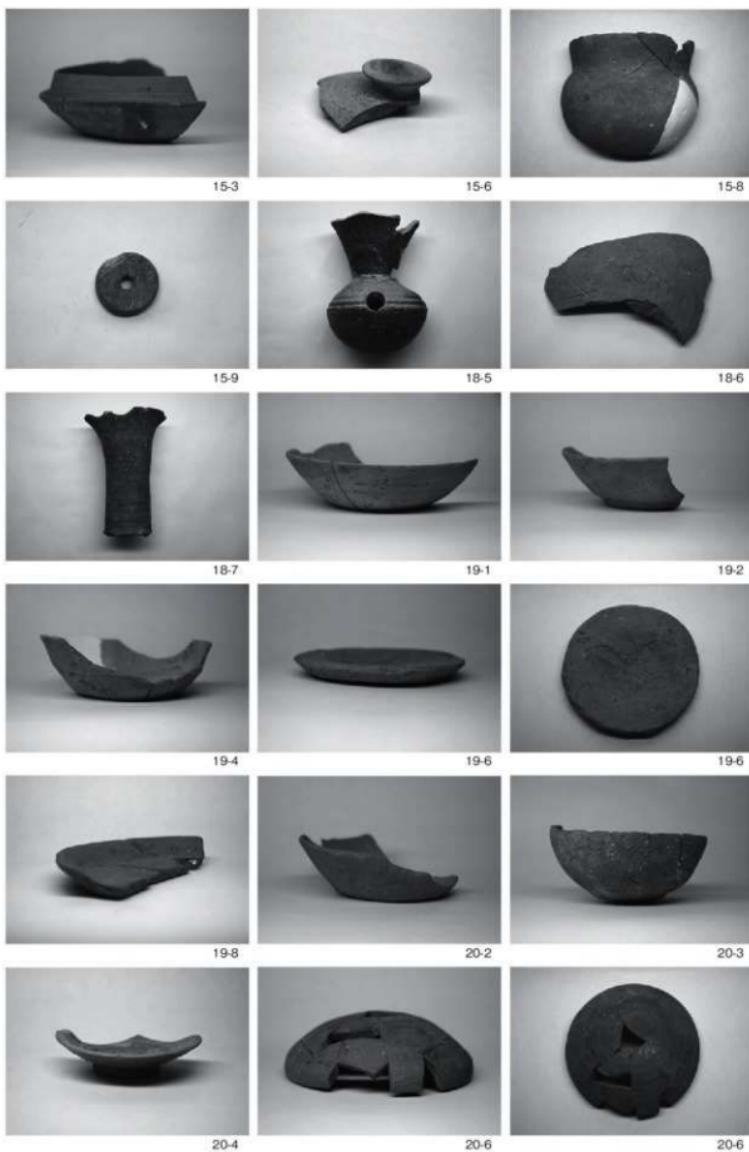


2区東半包含層第3層 弥生中期甕出土状況（東から）

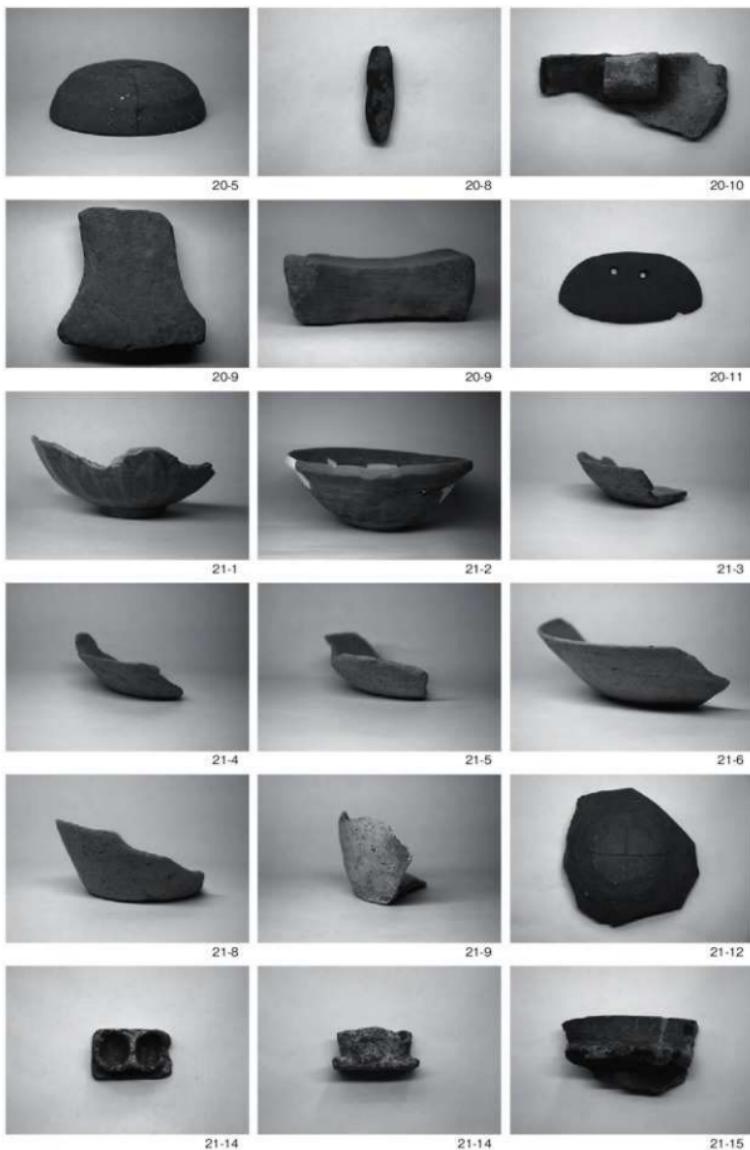


出土遺物 1

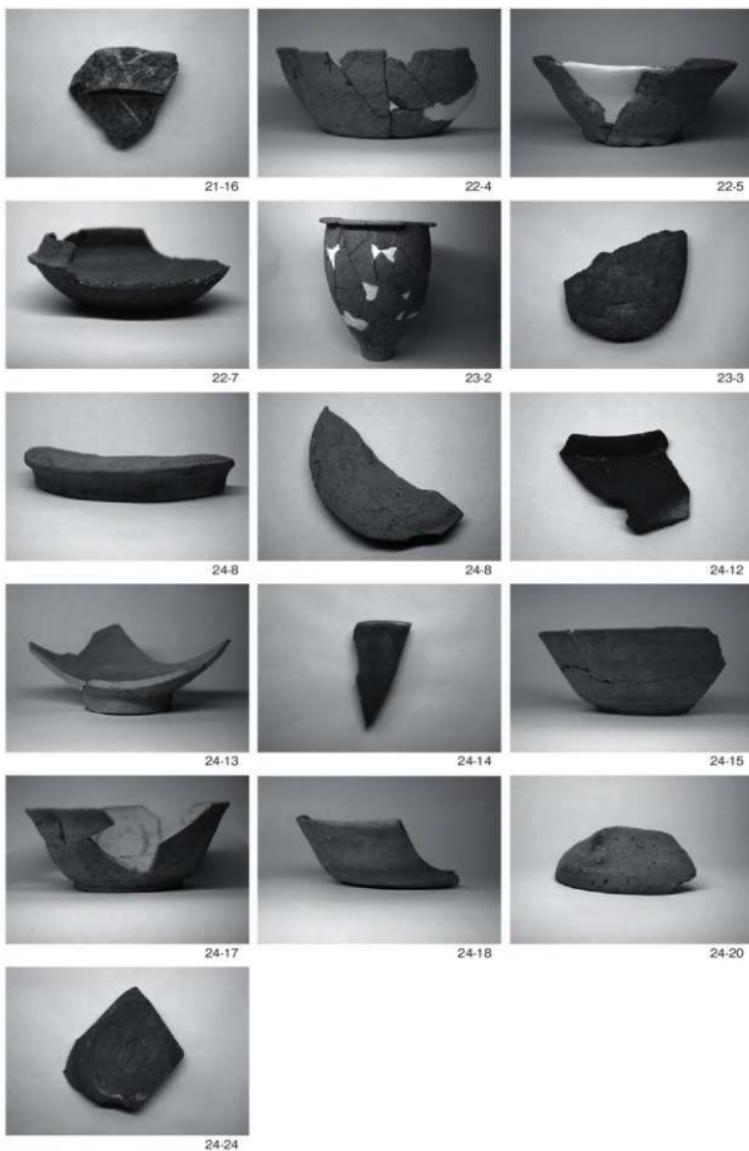
写真番号は挿図番号と対応



出土遺物2



出土遺物 3



出土遺物4

VII 元岡・桑原遺跡群第47次調査

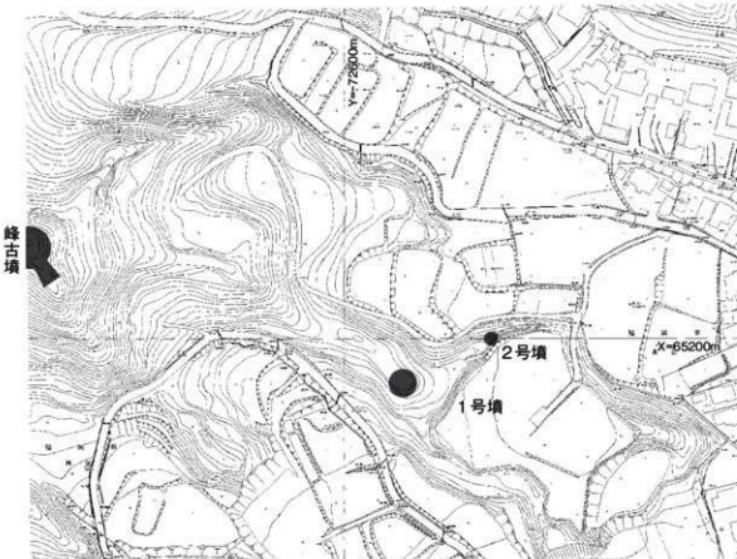
1 調査区の位置と立地

元岡・桑原遺跡群第47次調査地点は、福岡市西区元岡字広瀬に所在する。

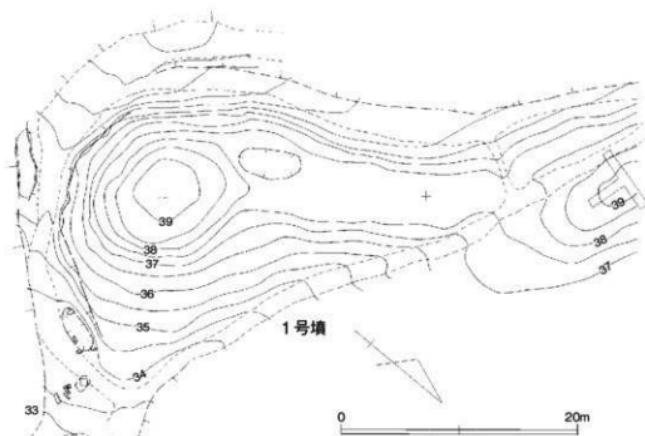
まず九州大学新キャンパス移転地内の位置を説明するならば、対象地の南西隅、ちょうど前原市との境に位置する。ここは平成7、8年度に実施された踏査・試掘調査時にG地区と称された地区である（『九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1』2001、福岡市報告書第693集参照）。

G地区の丘陵頂上の一ひとつ（標高約75m）に峰古墳（全長約50mの前方後円墳）があり、そこから東南東方向に延びた丘陵尾根線上に第47次調査の対象である元岡古墳群I群が位置する（図1）。調査開始時点では前方後円墳1基（元岡I-1号墳）、円墳1基の計2基からなる古墳群と考えられていた。なお、峰古墳については平成18年に九州大学考古学研究室によって測量調査が実施されている（宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・黒木貴一、2006、「福岡市西区元岡池ノ浦古墳・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」、『九州考古学』第81号；本書136頁に測量図を転載）。今回の開発地域には入っておらず発掘調査の計画はない。

丘陵尾根上の標高約37mの地点に前方後円墳と推定される1号墳の高まりがある。そして、そこから北東に約40mの地点に2号墳が位置する。2号墳の現状は、古墳石室の石材抜き跡にも見える窪みであり、墳丘の高まりは確認できない。



図VII-1 調査地点位置図 (1/2,500)



図VII-2 地形測量図 (1/400)

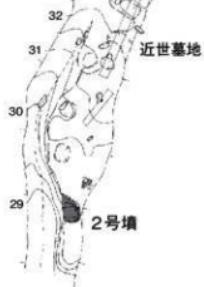


写真1 1号墳遠景（北東から）



写真2 2号墳のある山道



写真3 近世墓地（南西から）

この丘陵は本来もっと先まで延びていたと考えられるが、1号墳のすぐ下で大きく切土が行なわれ平坦地が造成されている。この平坦地を挟んで東南方向に、本来丘陵の続いた丘陵端部の地形が残っている。本調査区のある丘陵尾根の北側の谷では、第31・41次調査が行われ、古代の瓦窯や鍛冶炉等が見つかっている。また、丘陵尾根の南側の谷では、第32・44次調査（本書第VI章を参照のこと）が行われている。

発掘調査時に現地へ向かうルートは、2号墳の東側からの切土された崖面上を通る狭い小道を利用した（図2）。1号墳の南および西からは急斜面のため簡単にはよじ登れない。崖上の細い山道を登っていくと、向かって右側つまり山道の北側に2号墳の窪みがある（写真2）。そこを過ぎて尾根上の緩斜面に到着すると、正面遠方に1号墳の高まりが見える（写真1）。そしてその間の30mほどは細長い尾根上の緩斜面であり、両側は急激に落ちて斜面には竹が生い茂る。その狭長な空間の右半分は近世墓地跡で、墓石や割れた甕の破片が転がり、改葬跡と思われる窪みがいくつも見られる。墓石の年号は元禄十四（1701）年、寛政五（1793）年が見られる。左半分がもともと墓道だったのだろう。灌木や竹も生えずしっかりとした道である。以上のように付近に近世墓地があるので、2号墳については第一印象、古墳ではなく近世墓の改葬跡だと思った。

2 調査の概要

2005年、本調査区周辺の造成工事設計案が示された。設計案によれば、工事によって2号墳が完全に消失し、前方後円墳と推定される1号墳の後円部裾が影響を受けるかどうか不確かであった。よって2号墳の記録保存のための発掘調査と1号墳の正確な位置・範囲を確認するための発掘調査を行うこととなった。発掘調査は平成18（2006）年1月5日から同年3月10日にかけて実施した。

ところで、本古墳群の構成については見解の変遷があったので、ここで述べておく。もともと1995年発行の『福岡市文化財分布地図（西部II）』には元岡古墳群I群（円墳2基）として登録されている。その後、九州大学新キャンパス移転計画に伴い平成7（1995）年に再度踏査が行われ、1号墳が前方後円墳（元岡I-1号墳）であると修正された。その報告文を抜粋する。

「[G地区] 元岡古墳群E、F、G、H、Iの各群を再確認した。その結果元岡古墳群H群およびI群の円墳と考えられていたそれぞれの1基はそれぞれ全長約50m（峰古墳）、約30mの前方後円墳であることが明らかになった。またE、G群は近世墓地であることが明らかになった。」（九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報1』2001、福岡市報告書第693集：2頁）。

そして今回の発掘調査の結果、1号墳が前方後円墳ではなく円墳、2号墳は円墳ではなく近世墓の改葬跡であることが判明した。

発掘調査は平成18（2006）年1月5日から同年3月10日にかけて実施した。

まず最初に周辺の伐採を行った。墓地があったせいか、最近まで人の手が比較的入っており、大木はあまりなかったが、竹や灌木が密集していた。伐採後、1号墳が全貌を現したのであるが、前方後円墳にしてはどこかおかしい。くびれ部の左右非対称や、後円部のラインの一部が後世の切通しによるものであること、前方部の先端が見当たらないことなど、強い違和感を覚えた。

次に現況の平板測量を行った。国土座標、標高は北側に隣接する第31次調査地点から引っ張ってきた。測量中、埴輪や葺石は全く確認できなかったが、後円部南側のやや離れた丘陵斜面下方で赤色顔料の付着した平たい削石点を表探した。

その後、1号墳にトレンチを設定し発掘を行った。トレンチ調査の結果、前方後円墳ではないこと

が明らかになり、次に埋葬主体部の精査に移行した。赤色顔料を含む土や割石が散らばる状況から、埋葬主体部が盗掘を受けていることを確認した。また墓壇の平面プラン、盛土の存在も確認できたが遺物は全く出土しなかった。

そうした状況の中、九州大学側から1号墳については開発範囲から完全に外すとの朗報が届いた。よって、壊されない遺跡は無理に掘るべきではないと考え、主体部の概要を押さえた時点で掘り下げをやめ、記録後、埋め戻しを行った。1号墳は古墳時代前期の円墳であり、その埋葬主体部の構造はおそらく箱式石棺であろう。

1号墳の調査と併行して、2号墳の調査も行い、こちらは近世墓の改葬跡であることを確認した。また、1号墳と2号墳の間の近世墓地と、1号墳の西隣の高まりについてもトレンチ調査を行い、遺構ではないことを確認した。

3 1号墳の調査

前方後円墳と推定されていた1号墳は、調査の結果、円墳であることが判明した。調査の流れに沿って報告する。

1) 現況測量

発掘調査は、まず周辺一帯の伐採および崖面からの転落防止柵の設置から開始した。最近まで人の手が比較的入っていたようで大木はあまりなかったが、タラノキとたくさんの竹が生い茂っていた。

伐採により1号墳が全貌を現したところで現況写真撮影と平板測量を行った。基準杭は、後円部の中央に基準杭Aを、杭Aから前方後円墳の主軸方向で前方部側に22.0m離れた地点に基準杭Bを設置した。そして、基準杭A上に光波トランシットを据えて、放射状に補助杭を設置した。国土座標（日本測地系）および標高は、本調査地点の東北側の谷部（第31次調査地点の脇）に設けられた基準点KI-2（X座標65262.009m、Y座標-72547.788m、Z座標23.879m）から引っ張ってきた。基準点Aの座標がX=65173.574m、Y=-72562.686m、Z（標高）=39.381mである。

図2が調査区全体の測量図である。また、1号墳を拡大して示したのが図3である。平板測量は縮尺1/100で行った。測量時に地表面の観察を行ったが、土器、埴輪はまったく認められず、葺石の痕跡もなかった。ただ、後円部南側の丘陵斜面をかなり下った地点（測量した範囲の外側）で赤色顔料の付着した平たい削石1点を表探しした。

2号墳のある東側から坂道を登ってきて最初に目にする1号墳の姿（写真5）は、いかにも前方後円墳である。この方向（北東側）から見た後円部の高さは、裾の道が標高34m、後円部の頂点が39.3mなので、比高差5.3m程度になる。南や西から見ても比高差は約4.3～5.3mである。また、後円部と前方部の平坦面との比高差は約1.5mである。

しかし、伐採後にあちこちの方向から見てみると、本当に前方後円墳なのか、と疑問に思うようになった。違和感を覚えるのは以下の点である。1) 前方部主軸上に立って見ると（写真4）、明らかに左右非対称であり、くびれ部に注目すると、向かって右の西側はくびれるどころか逆に外側に突き出している（写真8）。2) 前方部がどこで途切れるのかに注目すると、だらだらと変化なく延びて、端部が見つからない。3) 後円部の南東側（前方部と正反対側）は、道を作るために2mほどの幅で地山を切って、切通しとしている（写真6）。4) この道は1号墳の裾部をぐるりと取り巻いている。となれば、地形が人工的に見える原因是古墳ではなく、この道とセットになった土地開発、例えば近世墓地の造営など、に求めることも可能ではなかろうか。

測量を終えた時点で、前方後円墳であるという前提自体がかなり疑わしくなってきた。そこで次に



写真4 前方部側からみた1号墳（北西から）



写真5 近世墓地側からみた1号墳（北東から）



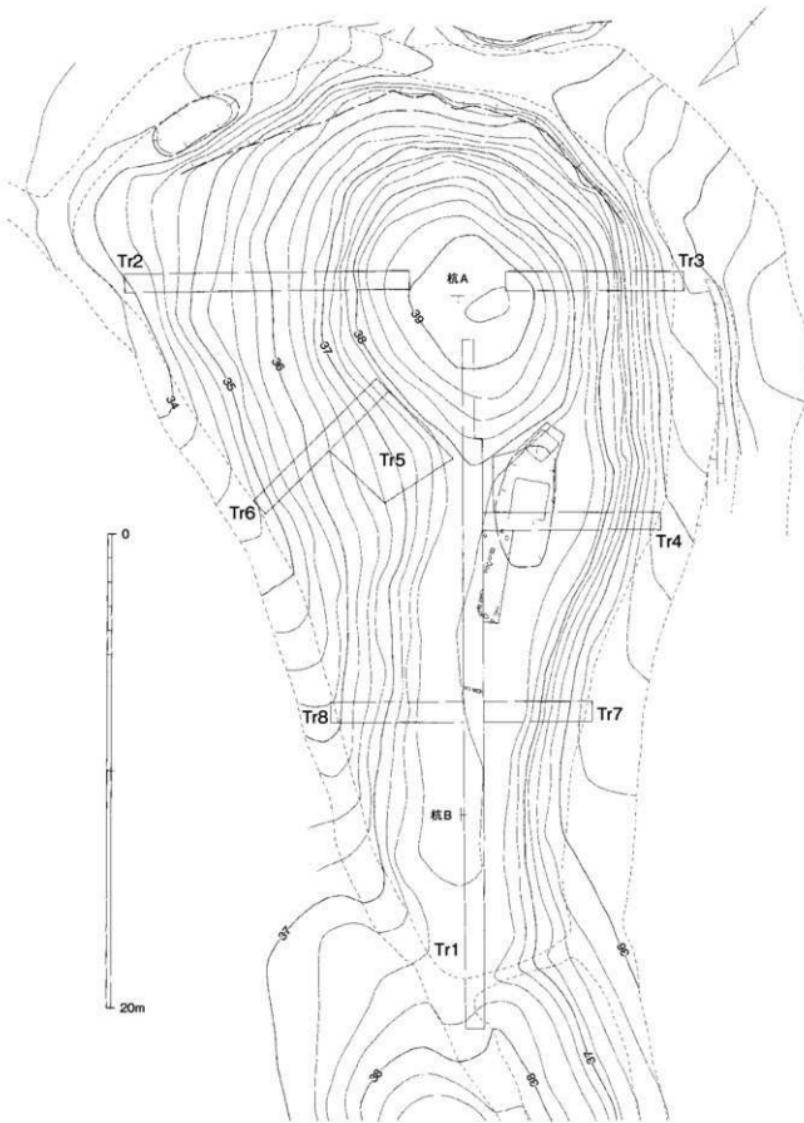
写真6 後円部の切通し



写真7 1号墳の東側斜面（北から）



写真8 1号墳の西側斜面（北西から）



図VII-3 1号墳測量図 (1/200)

前方後円墳か否か、前方後円墳である場合はその規模、範囲はどうか、を明らかにすることを目的に、トレントを設定し、その発掘を行った。

2) トレント調査

トレントは図3の位置に設定した。まず主軸上にトレント1、後円部に主軸と直交方向のトレント2、3、西側くびれ部にトレント4を設定、調査し、追加でトレント5~8を設定した。まず各トレントごとに所見を述べ、最後に総括する。

トレント1 (図4、写真9・10)

前方後円墳の推定主軸線上に設定した。全体的に地表から-5~20cmで地山を検出した。地山は橙色系の花崗岩バイラン土で霜降り肉状の白い筋が入る。木の根元で地山ラインが多少でこぼこするものの、概して単調でなだらかに続き、前方部の端部に相当する段差や溝は認められない。中央付近に小石が一列に並べられている箇所がある。後述するが、古墳とは関連しない。

トレント2 (図4、写真11・12)

後円部東側斜面に主軸と直交する方向に設定した。現表土の下に厚さ20cm程度の黄褐色の山土(地山と同質)が堆積し、その下で厚さ5~10cmのやや黒みを帯びた褐色土を確認した。この層が旧表土で、それより上の黄褐色山土は盛土と考えられる。盛土の広がりは後円部中央の基準杭Aから4.2mまでである。遺物は出土しなかった。斜面部については、旧来の自然地形がそのまま残っているようである。

トレント3 (図4、写真13・14)

後円部西側斜面に主軸と直交する方向に設定した。トレント2と同様、後円部頂部の基準杭Aから3.3mまでの広がりで盛土が見られる。やはり遺物は出土しなかった。

斜面部については、地山が途中から抉られてラインが不自然になる。この部分には、表土の下に薄茶色のしまっていない山土が堆積している。東側斜面の裾が緩やかに延びるのに対して、こちら側は急斜面を呈しているが、これはもともとの斜面が削られたことに起因し、その地形改変は裾を通っている道をつくったときのものだろう。土がしまっていないので比較的新しい時期のことと思われる。

トレント4 (図5、写真15・16)

西側のくびれ部があるべき位置に設定した。表土下に厚さ50cm程度のしまらない黄褐色土がのり、その下で地山を検出した。また、中央に近い平坦部で平面が1.5m四方の正方形土坑を検出した。深さ2.4mまではほぼ垂直に掘り込んでいる。埋土は薄茶色の真砂で、インスタントラーメンの容器、ブルーシートなど現代の物品が出土した。近世墓の改葬跡である(図7、写真22)。

1号墳が前方後円墳ならば、地山ラインが近世墓の見つかった位置辺りまで後退しなければならないのだが、実際には明らかに出っ張っている。

トレント5・6 (図5、写真17・18)

後円部の北方位、主軸から45度方向にトレント6を設定し、そこからくびれ部にかけて面的にトレント5を設定した。トレント2と同様、地表下20cm程度で地山を検出した。裾までなだらかな傾斜が続き、周溝の掘りこみはない。トレント5においても、やはりなだらかな斜面が広がるのみである。旧来の自然地形がそのまま残っている。



図VII-4 ドレンチ1・2・3土壤図 (1/100)



写真9 トレンチ1（北西から）



写真10 トレンチ1土層（西から）



写真11 トレンチ2（南から）



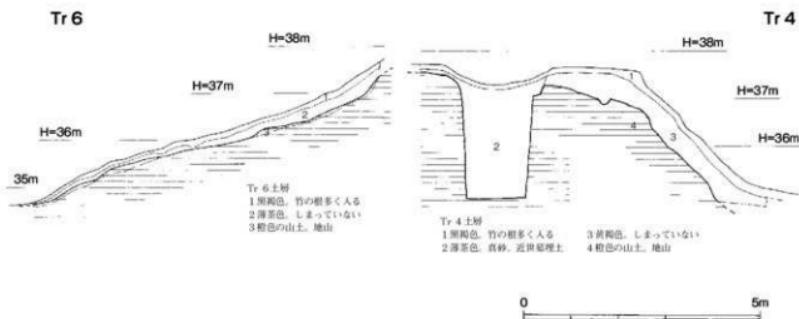
写真12 トレンチ2墳頂部土層



写真13 トレンチ3（北東から）



写真14 トレンチ3墳頂部土層



図VII-5 トレンチ4・6土層図 (1/100)



写真15 トレンチ4 (南西から)



写真16 トレンチ4 土層



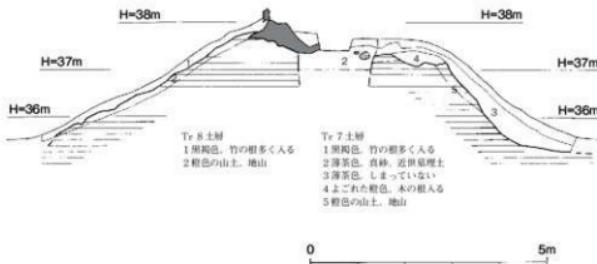
写真17 トレンチ5 (北から)



写真18 トレンチ6 土層

Tr 8

Tr 7



図VII-6 トレンチ7・8土層図 (1/100)



写真19 トレンチ7 (西から)



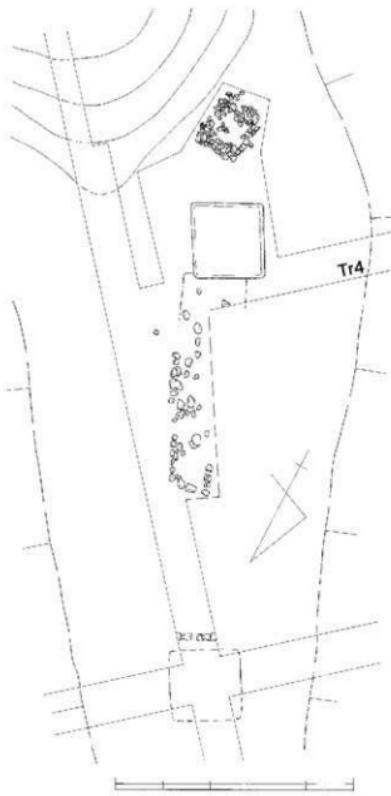
写真20 トレンチ8 (北東から)

トレンチ7 (図6、写真19)

前方部の西側斜面に主軸と直交する方向に設定した。厚さ10cm程度の表土の下に、しまってない薄茶色の土が裾部では50cmほど堆積し、その下が橙色の地山である。検出された地山ラインが不自然で、トレンチ4と同様、本来の斜面を削って裾を通る道をつくったようだ。また、頂部の平坦部で土坑を検出した。近世墓とみられる。

トレンチ8 (図6、写真20)

前方部の東側斜面に主軸と直交する方向に設定した。10cm程度の表土のすぐ下で橙色の地山を検出した。東側斜面に設定したトレンチ2、6と同様、旧来の自然地形がそのまま残っているようだ。



図VII-7 1号墳上で検出した近世墓 (1/100)

トレント調査のまとめ

以上、トレント調査の結果、1号墳が前方後円墳ではないことは明らかである。念のためにその根拠を確認すると、前方部の端部にあたる地形の段差がなく、どこまでも単調に続いている（トレント1）。また、左右非対称で、西側はくびれるどころか逆に突出している（トレント4）。周溝や埴輪、葺石の痕跡がまったくなく、中世以前の遺物は1点も出土しない。

ただし、後円部とされた高まり部分では、土層断面に黒っぽい旧地表土と思われる層を確認できることから、盛土が行われている。その土はかたくしまっており最近のものではない（トレント2・3）。

ところで、前方部とされた平坦部では複数の墓、おそらく近世墓が検出された（図7）。トレント4で検出した正方形の墓坑（写真22）を完掘したところ、深さ2.4mと非常に深く、壁は見事に垂直



写真21 近世墓の基壇（西から）



写真22 近世墓の改葬跡（南東から）



写真23 近世墓の配石（北から）

に削られている。改葬のため掘り返されていた。2号墳近くの墓地で甕の破片が見られることから、これも甕棺墓であろう。また、それに隣接して、小石を正方形に敷き詰めた遺構を検出した（写真21）。埋葬後、墓標を立てる前に小石を使って基壇をつくったのだろう。2号墳のある近世墓地に小石が乱雑に積まれた高まりがあるが、これも同様のものを改葬時に片付けて集めたものである。前方後円墳らしく見えた地形は、近世墓地の造営によるものであった。尾根の平坦面上に墓をつくり、西側斜面を切土して裾で墓道をつくっている。

ここまでトレンチ調査の結果、1号墳が前方後円墳ではないことが確認できたが、まだ円墳や埴丘墓である可能性は高い。後円部で確認された盛土や、表採された赤色顔料つきの薄い削石がその存在を裏付けている。次に後円部頂上部に埋葬主体部があるか否かを確認することにした。

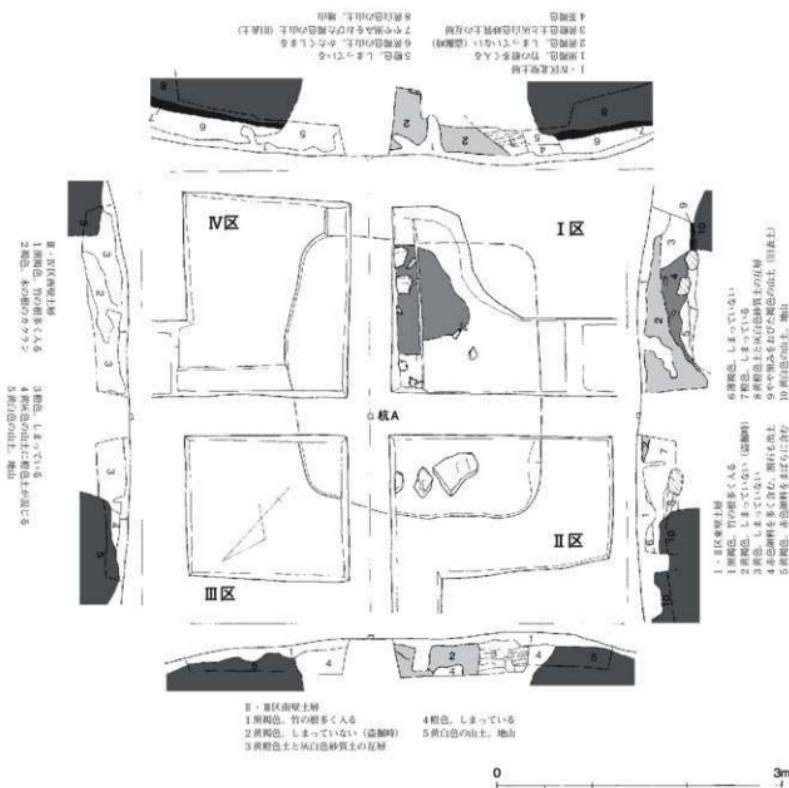
3) 主体部の調査

トレンチ調査の結果、後円部のトレンチ2、3の土層観察から丘陵頂部に盛土が行われていると推測されたが、表採した赤色顔料つき削石を除いて、遺物は1点も出土していなかった。そこで墓坑の有無、その規模と構造の把握を目的として、埋葬主体部の調査に着手した。調査にあたって基準杭Aを中心にしてトレンチと同じ軸方向で十字に土層観察ベルトを残し、丘陵頂部を時計回りにI～IV区の4区画に分割し、面的に掘り下げた（図8）。

掘下げを始めると、まずII区で長さ45×幅40cm程度の平らな石が出土した（写真26）。少しづつ掘り下げていくと、次にI区において、小さな薄い削石の破片とともに、赤色顔料らしき赤っぽい土の広がりが検出された（写真25）。さらに土層と平面を丹念に観察しながら掘り下げ、主体部掘方のラインを検出することができた（写真24）。



写真24 1号墳主体部（北西から）



図VII-8 1号墳主体部実測図 (1/50)



写真25 I区赤色顔料検出状況



写真26 II区南壁土層

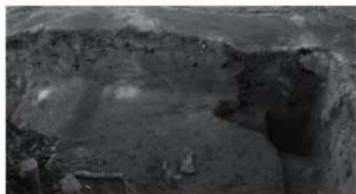


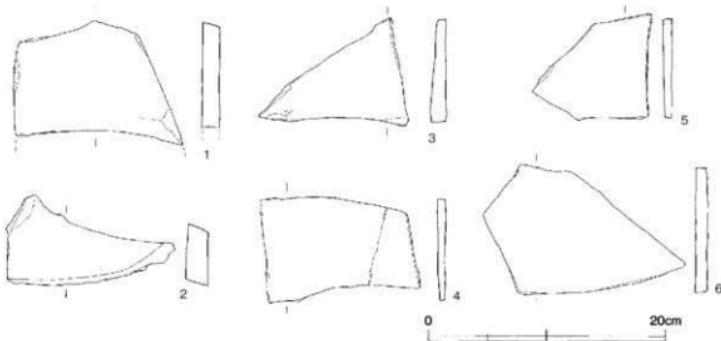
写真27 I区北壁土層



写真28 I区東壁土層

図8が埋葬主体部の平面図および土層断面図である。主体部の平面形は $2.9 \times 2.7\text{m}$ の隅丸方形を呈する。地山の黄褐色土に対して、墓坑内の埋土は橙色土を主とし、I、II区の土層では版築状の土層も確認できる(写真27)。主体部の中心は基準杭Aよりも南のI区側に寄っていた。

赤色顔料を多量に含む土や割石の破片が出土することから、主体部は盗掘を受けている。I区の東壁土層を見ると、上から順に1層 表土、2層 しまっていない黄褐色土(盗掘後の堆積)、4層 赤色顔料を多く含む土(盗掘時にできた層)が堆積している。2層(盗掘後の堆積)の断面形から、盗掘坑は墓坑の中心に向かって漏斗状に掘られている。また、赤色顔料および石棺材の破片の出土はI区に限られており、南側から盗掘が行われたことを示している。



図VII-9 赤色顔料が付着した割石 (1/4)

図9、写真29、30は1号墳の石棺材と考えられる割石である。1は測量時に表採した。片面のみ赤色顔料が鮮明に付着している。側面は図下方の面だけ削れ口が新しい。厚さ1.5cm。2~5は埋葬主体部のI区から出土した。2~5は両面および側面にも赤色顔料が付着している。6は片面のみ赤色顔料が少し付着する。厚みは2が1.7cmと厚く、他は1cm以下の薄いものである。I区出土の赤色顔料のついた割石は、図化したものと含めて、手のひらサイズのものが6点、長さ10cm程度のものが6点、5cm以下の小さいものが14点の計26点である。

赤色顔料を含む土を持ち帰り、福岡市埋蔵文化財センターの片多雅樹氏に分析をお願いした。分析の結果、ベンガラと朱の両方が含まれることが判明した(本書133頁参照)。

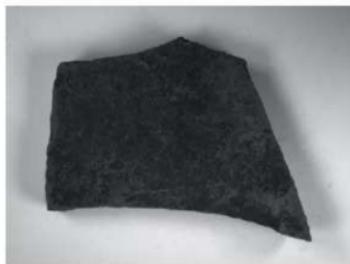


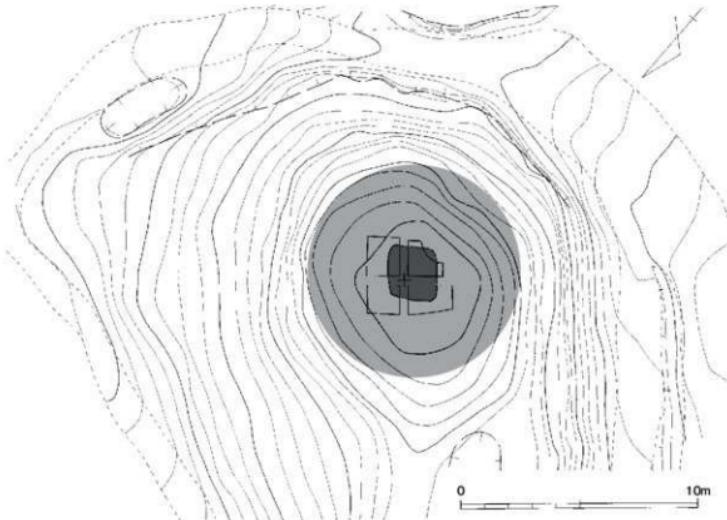
写真29 表採した赤色顔料付着の割石



写真30 1号墳出土割石

埴丘の規模については、墓坑の中心と埴丘のラインが削られずに残っているトレンチ2の土層で確認した盛土の端までの距離が4.5mであるので、直径9.0mに復元できる（図10）。ただし、周溝がないので、盛土のある範囲を埴裾の端とした場合の数値である。

以上のような所見が得られる中、九州大学側より1号墳については確実に開発の範囲からははずすという内容の計画案の修正がもたらされた。この知らせを受け、1号墳はこれ以上掘らずに埋め戻すこととした。いまだ主体部の構造や副葬品の有無など不明な点も多いが、破壊されない遺構はできる限り現状のままで未来へ引き継ぐべきと判断した。実測、写真撮影が終了した時点で、遺構から出土した土を土のう袋に入れて埋め戻しを行い、調査を終了した。



図VII-10 1号墳埴丘盛土復元図（1/200）

4 2号墳の調査

2号墳は1号墳から北東に約40mの地点に位置する。現状は墳丘の高まりが確認できず、山道の脇の斜面に古墳石室の石材抜き跡に見えなくもない大きな窪みが残っている（写真31・32）。

清掃をおこない窪みの中に流れ込んだ土を除去したところ、窪みの底で不定形の石が多く入った長方形の壠方が検出された（写真33・34）。壁面の状況や石の形態からも古墳とは考えにくく、この段階で、近世墓の改葬跡であるとほぼ確信した。その後、掘方の埋土を掘っていったが、底から大きな自然石が出土した。そして、その石の表面には黒マジックで「φ10.0」や「→」の記号が書かれていた（写真36）。よって2号墳は円墳ではなく、近世墓の改葬跡であることが確定した。



写真31 2号墳調査前状況(南西から)



写真32 2号墳調査前状況(東から)



写真33 2号墳清掃後(東から)



写真34 2号墳清掃後(南西から)



写真35 2号墳完掘状況(南西から)



写真36 2号墳内から出土した石

5 その他のトレンチ調査

1号墳のほかにも古墳がないかを確認するため、2ヶ所でトレンチ調査を行った（図2）。

ひとつは、1号墳と2号墳の間の近世墓地である。近世墓の土饅頭と考えてほぼ間違いないであろうが、いくつかの小さな高まりが見られた。2号墳が古墳ではなかったので、もしやこれらの土饅頭のどれかを古墳と判断した可能性がないかと思い、土饅頭を横断するように長さ8.5mと3.5mのトレンチ2本を設定した（写真37・38）。その結果、トレンチ1では墓坑や改葬跡の掘方が確認され、古墳ではなかった。トレンチ2も表土直下で地山の山土が検出され、遺構ではなかった。

もうひとつは1号墳の北西側の小さな高まりである。こちらにもT字形にトレンチを設定し掘下げたが、10cm下ですぐに地山が現れ、こちらも古墳ではなかった（写真39・40）。



写真37 近世墓地トレンチ1（西から）



写真38 近世墓地トレンチ2（南東から）



写真39 1号墳北西の高まり（南東から）



写真40 1号墳北西の高まりのトレンチ

6 1号墳主体部採取赤色顔料の分析

福岡市埋蔵文化財センター 片多雅樹

◆はじめに

元岡古墳群I-1号墳主体部では、床面検出時に赤色顔料の存在が散見された。この赤色顔料に何が使われていたのかを知るために、蛍光X線分析及びX線回折分析を行った。

古代の赤色顔料としては、酸化第二鉄 (Fe_2O_3) を主成分とするベンガラ、硫化水銀 (HgS) を主成分とする朱、四三酸化鉛 (Pb_2O_4) を主成分とする鉛丹が知られている。鉛丹に関しては古代ローマや正倉院宝物での使用例はあるものの、日本国内での出土例はない。

◆調査分析方法

採取した赤色顔料は細かい粒子が粘土状に固まっており、鮮やかな赤色を呈している。顕微鏡下で砂などの余分な土壤を取り除き、瑪瑙乳鉢にて軽く塊を粉碎したものを試料に供した。まず、蛍光X線分析により、赤色顔料の由来主成分を分析した。鉄 (Fe)、水銀 (Hg)、鉛 (Pb) を検出することによりそれぞれベンガラ、朱、鉛丹の存在が推測できる。また、土壤中にも鉄 (Fe) は含まれるため、X線回折分析により結晶構造を解析し同定の補完とした。分析条件は以下のとおり。

エネルギー分散型微小領域蛍光X線分析装置（エダックス社製／Eagle μ probe）

対陰極：モリブデン (Mo) / 検出器：半導体検出器 / 印加電圧・電流：40kV・ $70\mu A$ /

測定雰囲気：真空 / 測定範囲：0.3mm ϕ / 測定時間：約300秒

試料水平型X線回折装置（フィリップス社製／PW3050）

対陰極：銅 (Cu) / 検出器：Xeガスプロボーショナル検出器 / 印加電圧・電流：40kV・30mA /

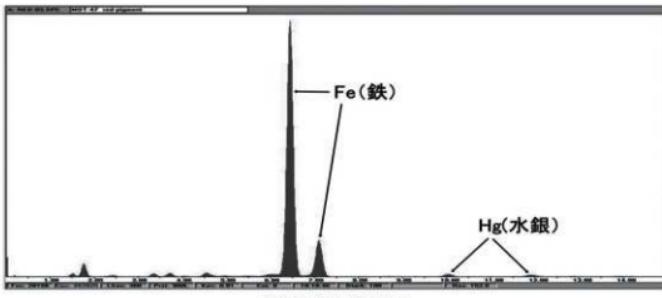
発散・受光スリット：1° / マスク幅：10mm / 走査角度：10～80° (2θ) /

ステップサイズ：0.02° / スキャンスピード：0.04° / sec

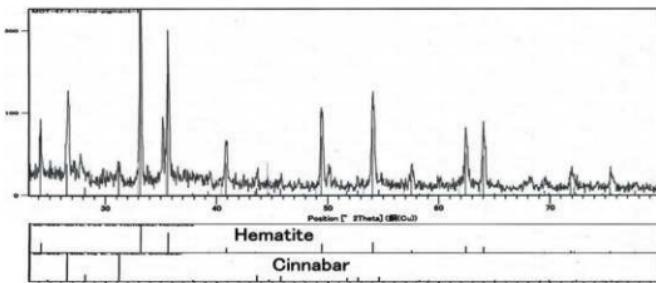
◆結果

蛍光X線分析では明瞭な鉄 (Fe) のピークと微弱ながら水銀 (Hg) のピークが検出された。X線回折分析ではHematite (Fe_2O_3)、Cinnabar (HgS) 共にピークが検出されたため、本試料はベンガラに少量の朱が混じったものと同定された。

古墳時代の埴墓での赤色顔料の在り方を3種にまとめると、床面から朱だけが出土するもの (a類)、朱とベンガラの両方が出土するもの (b類)、ベンガラだけが出土するもの (c類) に分けられる (本田1997)。本例はベンガラと朱の両方が検出されたためb類になり、埋葬施設の床面ないし内面にベンガラを塗布・散布した後、朱を施した遺骸を埋葬したものと推察される。



【蛍光X線分析結果】



【X線回折分析結果】

参考文献：本田光子1997「カルメル修道院内遺跡第5次調査出土赤色顔料について」『カルメル修道院内遺跡4—カルメル修道院内遺跡第5次調査』福岡市埋蔵文化財調査報告書第504集 福岡市教育委員会

7まとめ

元岡・桑原遺跡群第47次調査の結果、元岡古墳群I群のうち、前方後円墳と推定されていた1号墳は円墳であり、円墳と推定されていた2号墳は近世墓の改葬跡であることが判明した。したがって、元岡古墳群I群の構成は円墳1基だけという結果になった。

1号墳は丘陵尾根線上の自然の高まり上に立地している。おそらく当時はここから眼下に広がる古今津湾をぐるりと見渡せたであろう。主体部の礫方は 2.9×2.7 mの隅丸方形を呈する。現地保存が決まったため完掘しておらず埋葬施設の全容は明らかではないが、主体部は盜掘を受けており、赤色顔料が付着する薄く平べったい割石が出土した。したがって、埋葬施設は箱式石棺であろうと推測する。また、墳丘には盛土を行っており、その広がりは直径9.0m程度の円形に復元した。遺物が皆無であるため、1号墳の詳細な時期は不明である。一応、円墳と結論付けるが、時期の問題については、古墳時代前期に限定するものではなく、弥生時代終末期頃になる可能性もある。

さて、今回の調査の結果、元岡・桑原遺跡群で確認されている前方後円墳の数は7基からひとつ減って6基となった。九州大学新キャンパス移転事業に伴う、前方後円墳に関する発掘調査は今回の元岡I-1号墳が最後であるので、残る6基の前方後円墳の発掘調査、測量調査の最新の状況、出典を簡単に紹介して結びに替えたい。とくに、開発地域に入らないため発掘調査が予定されていない残りの前方後円墳3基（塩除古墳、池ノ浦古墳、峰古墳）について、2005年から2006年にかけて九州大学の宮本一夫先生、辻田淳一郎先生と考古学研究室の皆さんによって、測量調査が行われた（本書団11～13に転載）。この成果により、元岡の前方後円墳全6基の墳形の比較検討が可能となり、その相対的な順序関係についても論じられている。また直径約30mの大型円墳である経塚古墳をふくめた元岡の首長墓系列、糸島半島全体のなかでの元岡地域の古墳群の位置づけについても問題提起がなされている（宮本一夫・辻田淳一郎・牛島惠輔・水永秀樹・田中俊昭・黒木貴一、2006、「福岡市西区元岡池ノ浦古墳・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」、『九州考古学』第81号）。ぜひそちらの御一読もお勧めする。

元岡・桑原遺跡群の前方後円墳（全6基）と経塚古墳

①金糞（かなくそ）古墳

発掘調査が行われ全長24.0～24.2mに復元される。前期後半。主体部は削竹形木棺をおさめた粘土椁で、芝草紋鏡と菱雲紋鏡の2面の鏡が出土。現地保存が決定している（『元岡・桑原遺跡群6』、2006、福岡市報告書第909集）。

②石ヶ原古墳

発掘調査が行われ全長49mに復元される。主体部は両袖式单室の横穴式石室。築造年代は6世紀中頃（TK10型式期）。古墳自体は消滅。石室のみ移築となり、現在石材を別所にて保管中である。（『元岡・桑原遺跡群6』、2006、福岡市報告書第909集）。

③元岡E群1号墳

発掘調査を実施。遺存状況悪いが全長35mに復元される。主体部は木棺直葬の粘土椁で、方格T字鏡1面が出土。4世紀前半頃の築造か。時期を決める決定的な資料なし。現在は消滅（『元岡・桑原遺跡群5』、2005、福岡市報告書第861集）。

④塙除（しおよけ）古墳

2005年に九州大学の考古学研究室によって測量調査が行われた。全長は最大約53.5m。葺石があり、埴輪はない。前期古墳。（宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・今井隆博、2005、「福岡市西区元岡・塙除古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」、『九州考古学』第80号）

⑤池ノ浦古墳

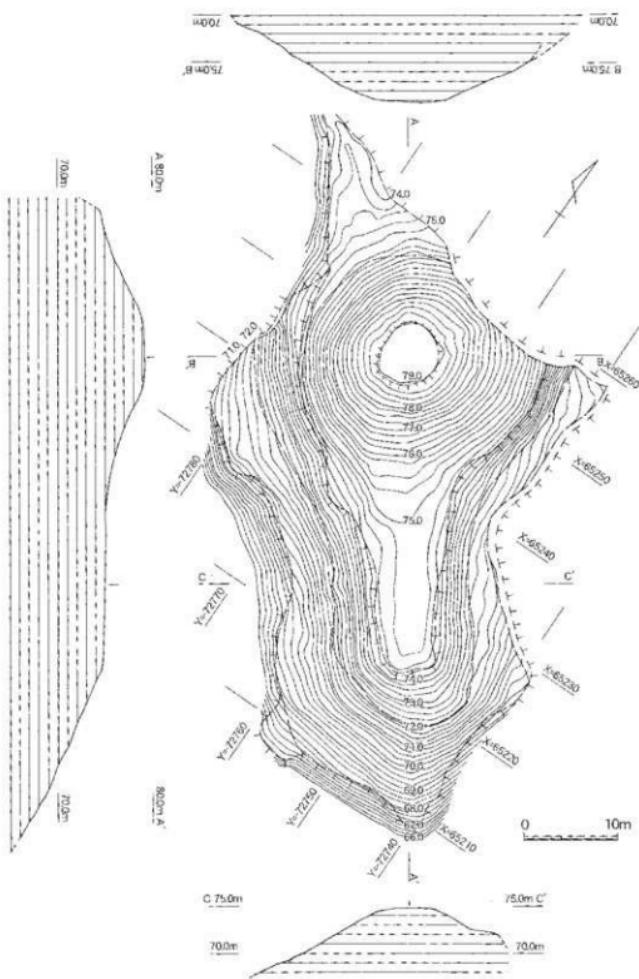
2006年に九州大学の考古学研究室によって測量調査が行われた。全長は推定60m。葺石は全面に施されていたようで、埴輪片13点が表採された。前期後半～末。（宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・黒木貴一、2006、「福岡市西区元岡池ノ浦古墳・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」、『九州考古学』第81号）

⑥峰古墳

2006年に九州大学の考古学研究室によって測量調査が行われた。全長は最大56mと推定される。葺石、埴輪は確認できず。6世紀中葉築造の石ヶ原古墳より幾分先行するか。（宮本一夫・辻田淳一郎・牛島恵輔・水永秀樹・田中俊昭・黒木貴一、2006、「福岡市西区元岡池ノ浦古墳・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」、『九州考古学』第81号）

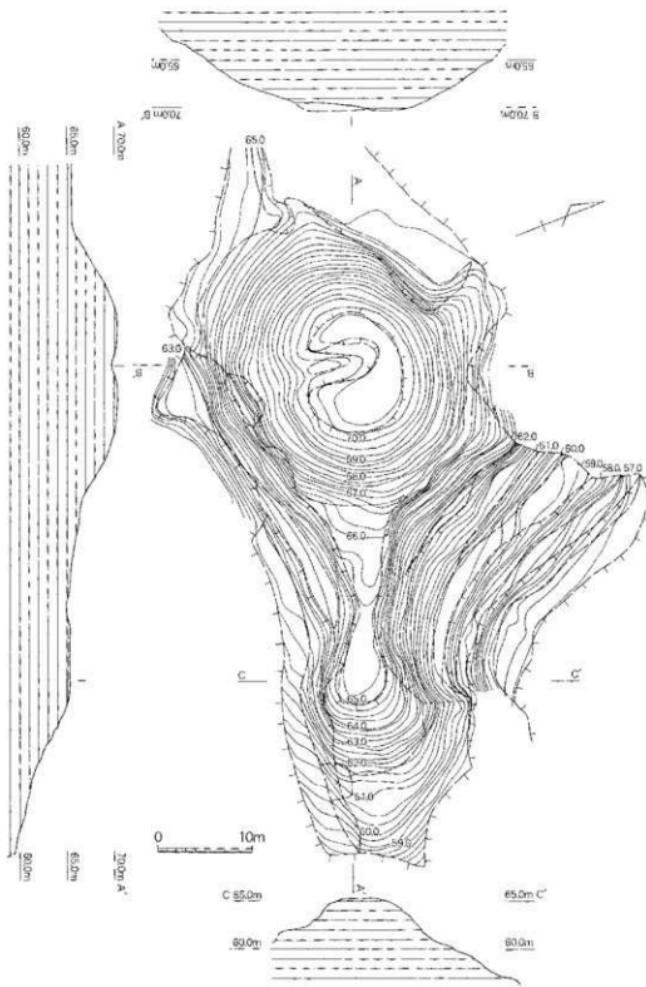
⑦経塚古墳

発掘調査を実施。直径29.6mの中期の円墳。葺石が良好に残る。現地保存が決定し、主体部は未調査。円墳ではあるが、首長系列墓のひとつと推定される（『元岡・桑原遺跡群11』、2008、福岡市報告書第1011集）。



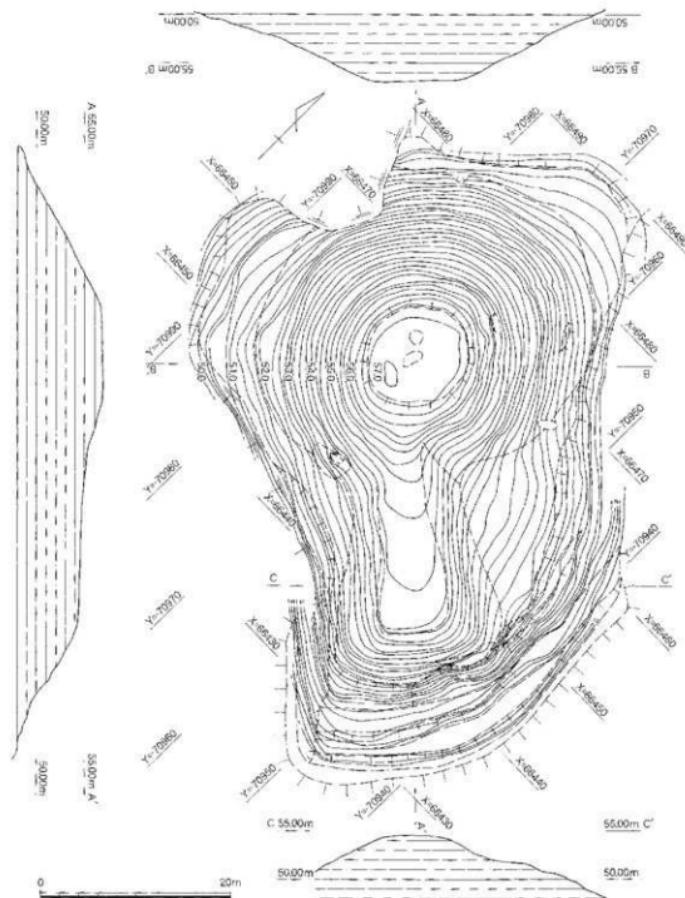
図VII-11 元岡峰古墳墳丘測量図（1/500）

(宮本一夫他、2006、「福岡市西区元岡池ノ浦古墳・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」、『九州考古学』第81号 より転載)



図VII-12 元岡池ノ浦古墳墳丘測量図 (1/500)

(宮本一夫他、2006、「福岡市西区元岡池ノ浦古墳・峰古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」、『九州考古学』第81号 より転載)



図VII-13 塩除古墳墳丘測量図 (1/500)

(宮本一夫他、2005、「福岡市西区元岡・塩除古墳の墳丘測量調査と電気探査の成果」、
『九州考古学』第80号 より転載)

報 告 書 抄 錄

ふりがな	もとおかくわはらいせきぐん								
書名	元岡・桑原遺跡群1								
副書名	第33・40・41・44・47次調査の報告								
卷次	15								
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第1064集								
編著者名	米食秀紀・清石哲也・上角智希・木下博文・片多雅樹								
編集機関	福岡市教育委員会								
発行機関	福岡市教育委員会								
発行年月日	20090331								
作成法人ID									
郵便番号	810-0001				電話番号	092-711-4667			
所在地	ふくおかしにしもとおか・くわはら								
遺跡所在地	福岡市西区元岡・桑原								
市町村コード	40135								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	

40130	くわばるにしきだ こふんぐんいちごうふん	ふくおかしにしく くわばら	2 8 3 7	33 35 60	130 13 03	20030408- 20030519	450	大学移転
	桑原錦田古墳群1号墳	福岡市西区桑原	2 7 8 2	33 36 13	130 13 46	20040407- 20040430	790	
	もとおか・くわばら いせきぐん	ふくおかしにしく くわばら	2 7 8 2	33 35 25	130 12 50	20040507- 20060217 (途中休止期間あり)	900	
	元岡・桑原遺跡群 第40次	福岡市西区桑原	2 7 8 2	33 35 14	130 12 58	20050601- 20051020	1,189	
	もとおか・くわばら いせきぐん	ふくおかしにしく もとおか	0 7 7 2	33 35 17	130 12 59	20060105- 20060310	107	
	元岡古墳群I-1号墳	福岡市西区元岡						

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1064集
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査報告書

元岡・桑原遺跡群15

-第33・40・41・44・47次調査の報告-

2009年3月31日

発行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1-8-1

印刷 株九州カスタム印刷